
黄金の时代

木村 洋平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄金の時代

【Nコード】

N5627W

【作者名】

木村 洋平

【あらすじ】

遙か昔、この世界では黄金の時代と呼ばれる歴史の絶頂期が存在していた。けれどその栄華はすっかり過去のものとなり、現在では人間や魔物、亜人といった種族が渦巻く混沌の大地が広がっていた。そこで、ヴァラルと呼ばれる一人の男はかつての時代の栄光を再び取り戻すため、アールヴリールの大地で一人奮闘するのであった……（注：主人公最強の要素が多分に含まれています。そのことを留意の上、お読み下さい）

プロローグ

黄金の時代と呼ばれる歴史が存在していた。

その時代に生きていたありとあらゆる種族は繁栄を極め、この世の春を謳歌していた。

けれどある日突然、世界全体を巻き込む大災厄が起こった。

火山の噴火による環境の変化、地殻変動による大地震、長期にわたる疫病・・・未曾有の災厄により、世界は何度も滅亡の危機に瀕していたのだ。

それでも世界は滅びることはなかった。一人の男によって……

しんしんと雪が降り続く中、古城がそびえたっていた。

その城の周りには雪原が広がっており、命の息吹をほとんど感じさせないさびれた土地であった。けれど、そのような場所にある古城は古ぼけた雰囲気を持ちながらも、どこか懐かしさを感じさせるものだった。

そして、城の中にある一室で彼らは会議を行っていた。百人は入れそうな広い部屋だったが、そこにあるのは長机と人数分の椅子があるだけだった。

「……本当にそれで良いのか？ここにおいても周りには何も無い所だぞ？」

漆黒の髪と瞳、男とも女ともとれる中性的な顔立ちの男は言った。ぼろぼろになるまで使い込んだ軽鎧を着て、輝きを失いあちこち欠けた剣を腰に下げ、魔力を失った杖を椅子に立て掛けている。彼の名はヴァラル、世界崩壊の危機を招いた大災厄をくいとめた張本人である。

「いいえ、主様。そんなことはありません。確かにここは他と比べて寂しい土地ですが、もとより私たちはどこにも行く当ての無い身。主様の心配には及びません」

安心感を与えるような優しい声でこう答えたのは腰までのびた艶やかな金の髪に青い瞳、そしてとがった耳。派手さは無いが、全身をゆったりと包み込んだローブを身につけている彼女の名はアイリス。ハイエルフと呼ばれる種族である。

「俺もここに残ることに問題はない。特にやることもないし、のんびりさせてもらおうぞ」

若い男の声でこう言った彼の名はガラム。青い髪と琥珀色の瞳を持ち、精悍な剣闘士の姿をしているが、実はドラゴンである。

「主、私のこともおきになさらず。この地で少々やることはありませんので」

凜とした声で言ったのは悪魔のセラシ。彼は肩まで伸びた燃えるような深い紫の髪に緑の瞳、貴族が着るような上品な服を着ており、誰もが振り返るような整った顔には理知的な雰囲気漂わせている。

「……分かった。では話を続けさせてもらう。以前にも言った通り、俺はしばらくの間眠りにつく。期間は正直言って分からないが、自分の間目覚めることはないだろう。そのため、城にはそれなりの蓄えを用意しておいた。この場所を拠点にして、今後どうするか身の振り方を改めて考えておいてくれ。何か聞きたいことはあるか？」

すると、セランから質問があった。

「主、身寄りの無いわれらの同胞を見つけた場合、ここで保護することをお許し願いたいのですが？」

「それも考えなければならなかったか……同胞の保護に関してはそれぞれの判断に委ねる。食料等も城にあるもの全てを使い切るつもりでかまわない。」

「ありがとうございます」セランは口ではそう言いつつ、にやりと笑みを浮かべた気がした。何故だろう。とてつもなくいやな予感があった。

「他に何かあるか？」

「主様、この土地で新たに森を造りたいのですが……」アイリスが遠慮しがちに聞いてきた。森か……彼女も分かっているのだろうか？この土地は荒れ果てているため、それを緑地化するとなると途方もない年月がかかるだろう。つまり、この場所にずっと身を寄せるということになるのだ。

「別にかまわない。だが、相当困難な作業だぞ？いくらアイリスとはいえ、そう簡単には上手くいかないと思うんだが？」

「大丈夫だ、いざとなれば俺やセランがいる。どうにでもなるさ」
ガラムがすかさずアイリスをフォローした。彼もここで手伝うつもりのようなのだ。

「そうか……すまないな、手伝ってやれなくて。せめてこの辺りをもう少し住みやすいところにしたかったんだが……」
「ヴァラルは申し訳無さそうに言った。

「そんな！主様は立っているだけでもやつとだというのに！この城だって、私達のために造ってくださったことぐらい理解できます！」
「そうなのだ。本来、ヴァラルが眠るだけならここまでの城を造る必要がないのだ。彼は、最後まで付いてきてくれた仲間達のために置き土産として造り上げたのだ。口では自分のためといていたのだが、長く旅をしてきた三人はそんな見え透いた嘘にだまされるほど馬鹿ではない。むしろ優秀すぎるくらいである。」

「だからそれは……まあ良い、それよりも話を戻すぞ。セランにも言ったように、後のことは各自の判断に任せる。ただ、何か重要な問題に直面したのならば話し合って決めるようにするんだ。この最果ての地にいる以上、お前達は運命共同体だ。それを忘れないでもらいたい」

ここでヴァラルは一旦言葉を切り、共に歩んできた仲間を見て改めて言葉を口にした。

「三人には色々な所で助けられた……これからはばらく会えなくなるが、今生の別れということでもない。だからまた会えることを楽しみにしている。」

椅子から立ち上がり、深々と頭を下げた。

そうして会議は終了し、四人は部屋を後にした。

向かう先は地下深くに作られた小さな部屋。長い城の通路をいくつも渡り歩き、ついにその扉の前に到着した。

「見送りすまない……」

アイリスに支えられながら疲れた声で彼は言う。本格的に限界が近いようだ。

「主様こそ。お目覚めになられるまで、私たちはいつまでも待ち続けています。」

「そうだ。ゆっくり休みな。」

「主、後のことはわれらにお任せください」

アイリス、ガルム、セランはヴァラルと再び会うことを約束した。たとえどんなに時が経とうとも。

それを聞いたヴァラルは満足げに頷き、アイリスの手を離れそのまま部屋の中へ入っていった。その部屋へは三人だけが出入りするこゝとが出来るのだが、この場では誰もその場を動かなかった。

背後からは、

「おやすみなさい。 主様……」

アイリスの小さな声が聞こえたような気がした。

こうして、一つの時代は終わりを迎えた。

多くの種族は滅び、高度な魔法のほとんどが失われ、歴史の闇に埋もれていった。

けれど、その全てが滅びることはなかった。彼らは時の流れに身を任せ、静かに生きていた。

そうして、幾年の月日が流れ、物語は再び動き始める……

目覚めるとき

アールヴリール大陸の北西部には、外部からの侵入を拒むかのよう
に巨大な山脈が連なっていた。メクビリス山脈。そこを踏破したも
のはいまだかつて誰もいない。

そのメクビリス山脈が囲むようにして守っている大地に、一つの古
城があった。

古城ローレン。かつてこの世界を救った男が眠る城である。

そのローレン城地下深くにある小さな部屋で、ヴァラルは長年の眠
りからついに目覚めた。

「……………んんう……………」

備え付けられたベッドの上で声を漏らした。まだ頭がぼつつとする。
けれど、また眠りたいという欲求は不思議と無かった。

寝ぼけ眼で彼はおもむろに起き上がり、軽く伸びをした。

「あゝよく寝たな・・・あれからどれ位経ったんだ？」

辺りを見渡すと、以前と変わらない簡素なベッドといくつかの家具
があるだけの地味な部屋だった。実際、眠る前に三人に見せたとき
はそれぞれ微妙な顔をしていた。ヴァラル自身、ここはそれなりに
気に入っていたのだが……何がいけなかったのだろうか？

けれど、床にはチリ一つ落ちていなかった。誰かが毎日欠かさず手

入れをしてくれたのだろう、ありがたいことだ。そう思い、隣の部屋で湯を浴びた。何年ぶりになるかわからない、熱いお湯が彼の体を温める。そうして、徐々に彼の意識は覚醒していった。

身も心もさっぱりとしたヴァラルは腰にタオルを巻き、衣装棚に向かい中に用意された一着を取り、着替え始めた。どの服も、前に着ていた服よりかなり豪華になっているのは気のせいだろうか……

慣れない服に悪戦苦闘し、ようやく着替が終わって部屋の外に出ようとすると、突然扉が開いた。

そこにいたのはアイリスで、ヴァラルの姿を見るなり急に抱きついてきた。

「主様っ!!!」

押し倒さんばかりの強い衝撃を受けた彼は、何とか彼女を押しとどめた。

「アイリスか。こんなに早く会えるとは思ってなかったぞ」

あれからどれくらいかの時が流れたのかは分からないが、アイリスの美しさはまったく変わっていないかった。久しぶりに見たせいもあるのか、輝かんばかりの笑顔を見せる彼女は、以前よりも魅力が上がっているようにも感じられた。

「主様がお目覚めになられたと感じて、一目散に飛んできました！他の皆も急いで出迎えの準備をしている最中ですよ！」

彼女は興奮した様子で語っていた。

「出迎え？ここにはアイリスしかいないんじゃないのか？」

彼は、この城にアイリスが残っているだけでも結構驚いていたのだ。まさか、あの日以来ずっと約束を守り続けていたのか？

「ガルムやセランも勿論いますよ。あれから私たちはここですつと暮らしてきたんです。仲間を探すため外に出たこともありますけど、ほとんどはこの場所で過ごしていました」

………事実のようだ。三人はヴァラルが思っている以上に義理堅い一面をもっていたみたいだ。

「ガルムやセランもいるのか。会うのが楽しみになってきたな」

あいつらはここで一体何をしていたのだろうか？確かアイリスは森を造る、ガルムはその手伝い、セランは仲間の保護だったか。どれもこれも非常に大変なものだ。上手くいったのだろうか？少し気になった。

その後、アイリスが外から軽食を持ってきてくれた。久しぶりの食事だったため、野菜やパン、スープや飲み物の一つ一つはどれも格別の味だった。アイリスはもくもくと食べるヴァラルの姿を微笑ましげに眺めていた。すると彼女が急にまじめな顔をして沈黙した。おそらく誰かと魔法で会話をしているのだろうか。

「主様、準備が出来たみたいなので一緒に来てください！」

準備？一体何のことだ。ガルムやセランがここへ来るんじゃないのか？

そう思うこともままならず、彼女はあっという間に食べ終わってしまった食事をてきぱきと片付け、彼女はヴァラルの手を引いて部屋の外へと連れ出した。ああ、こうして外に出るのは久しぶりだな。ヴァラルは城の地下深くの場所とはいえ感慨深くそう思った。

そうして二人は城を登って行った。無論、物理的ではなく、転移魔法陣を利用してのことだが。ヴァラルが起きたのはちょうど朝の時間帯のようだった。城に差し込む日の光がまぶしい。日に照らされた城の内部を改めてみると、どこかが違う。いやかなりおかしい。長い廊下を歩いている途中、ヴァラルは疑問に思ったことを口にした。

「なあアイリス、気のせいだと思うんだが、この城はこんなに立派だったか？俺が作ったときはもつとぼろかったはずだったんだが……」

本人はぼろいと評しているがそれは外観の話である。中身は全く別であり、この城に張り巡らされた防衛魔法は正常に機能しているのだから。

「主様がお休みになられてからどれだけの時が経ったと思ってるんですか？千年ですよ！千年！それだけあれば立派にもなりますよ」

アイリスが強い口調で言った。

千年か……随分と長い間休んでいたな。それくらい長く眠っていたのなら城自体も変わるのも当然か。

「だが、ここにはアイリスとガラム、セランしかいないんだろう？

さすがにここまですることは無いと思うのだが……」

壁の一部をとってみても、高価な材料を使っていることが分かる。置かれている壺や絵画、彫像もきつと名のある芸術品に違いなかった。銅像や絵画に出ている人物がヴァラルにそっくりだということもきつと彼の気のせいだろう。

「もう……主様はまだ気がつかないんですか。まあ良いです。もう少しで分かりますよ」

彼女は少々呆れながらもどこか楽しそうに言った。以前の彼女は、もう少し落ち着いた雰囲気を持っていたはずだが、今では子供のようにはしゃいでいる。千年の月日は性格も変えるのか……ヴァラルはしみじみ思った。

そうこうしているうちに、二人はとある大部屋の扉の前に立った。その非常に大きな扉は重厚感あふれるもので、中にある部屋がいかに重要な場所であるかを示している。

「これからこの部屋の中へご案内します。何があっても驚かないでくださいね？」

アイリスが扉を開け、中へ入るよう促した。何かとんでもないことが起こる気がする。そのような予兆をかすかに感じ取り、ヴァラルは恐る恐る部屋の中へ入っていった。

結果として、ヴァラルの予想は当たった。

部屋の中へ入って、まず最初に目に入ったのは正面にある立派な玉座だった。この世の粋を集めたかのような繊細かつ優美な玉座は、作り上げるだけで一体どれほどの労力を掛けたのが想像もつかないほど素晴らしいものであった。

玉座だけでなく、部屋全体にも荘厳な装飾が施されている。この部屋の中にある調度品一つだけでも一体どれほどの価値があるのか、ヴァラルには想像も付かなかった。彼のように、ここへはじめて訪れた者全員はこの部屋もつ雰囲気圧倒されたであろう。

また、玉座へ向かう道の左右には漆黒の甲冑を身につけた騎士たちが一斉に剣を胸の高さに掲げ、この城の主に向けて臣下として最大級の礼をささげた。この騎士たちも相当な剣の使い手なのだろう、一つ一つの動作に一切の無駄が無く、気品すら感じたのだから。また、魔力量も一人ひとりが破格の大きさだということもすぐに分かった。にじみ出る魔力の残滓がこちらにびりびりと伝わってくる。それだけでも十分な証明だった。

なんなんだこれは……ヴァラルが驚くのも無理は無い。この城を造ったとき、この大部屋は人っ子一人いないがらんとした空間だったのだから。それがいまやこれである。

それらの光景に啞然としてみると、アイリスが近寄ってそのまま彼の手を握り、赤絨毯が敷かれている道の中央へ誘った。左右の騎士達の顔を見ることは出来なかったが、ヴァラルを見る視線には尊敬の眼差しが含まれていた。いや、これは最早崇拜の域に達している。

幾多の視線に晒され、アイリスに手を引かれ玉座の前で彼女は不意に手を放すとそこには懐かしい二人がいた。ガルムとセランである。ガルムは相変わらずラフな服装である一方、セランはどこぞの大神官かのような仰々しい法衣を纏っていた。セラン、お前は悪魔だろう。心の中でヴァラルは突っ込みを入れた。

そうして四人は集まり、再会の喜びに浸るかと思えばそんなことは無かった。こんな敵かな雰囲気でガルムとセランに陽気に挨拶できるほど彼は愚かではない。ヴァラルは説明しろと言わんばかりに彼らをにらめつけたが、三人の放つ無言の圧力に屈し、渋々玉座に腰を下ろした。

こうして式典は始まった。セランがこの国の成り立ちを説明し、玉座にいるわれらの主がいかに偉大な方であるかを延々と語っていた。ヴァラルにとってほとんど覚えの無いことだらけだったが、多少真実が混じっていた分性質が悪い。

そして、主はまだお目覚めになられたばかりなので、正式なお披露目はまた後日行うものとして式典は幕を閉じた。

その後、四人は城の一室で食事を取りつつ、やっと再開の喜びを分かち合った。そして食事を終えた後、ついにヴァラルは言った。

「それじゃあ、そろそろ言い訳を聞こうじゃないか。どうしてこんなことになっているんだ？」

そうしてヴァラルはここに来るまでの間に疑問に思ったことをセランにぶつけた。城がかなり豪華になっていること、前は雪原だった

場所に街が広がっていること。ここは寒冷地帯だったはずなのにどうしてこんなに暖かいのか、極めつけはここが国として成り立っているということだ。

「言い訳も何も、主が仰ったではないですか。われらの同族を保護しろと」

セランは事も無げにそう言った。

「だからといってこれはやりすぎだ。俺は国を造れとは言っていないぞ」

すかさずヴァラルは反論した。いったい同族を保護することですべて国ができるのか。そんなことで国が出来るのなら誰でも実践するだろう。いやするに違いない。

「あの、主様。ここにやってきた皆さんはとても疲れきっています。故郷は跡形も無くなり、家族とも離れ離れになって生きる気力を失っている方がほとんどでした。けれど、セランが懸命に彼らの仲間を探してきたおかげで、無事に家族や知り合いと再会できた方が大勢いたんですよ」

アイリスはセランの援護に回った。

「そんな奴らがお前さんに対して恩を感じるのは当然のことだと思っぞ。まあ、国を作ると聞いたとき、俺も最初はびっくりしたけどな。でも、そのほうが色々やりやすかったんだ。この土地の開発はそれなりの人数がいるとアイリスとセランが言ってたからな」

ガルムもまた国造りに協力していたようだ。

二人とも森を造らないで国を造っていたのか、一体何を考えているんだ。そう突っ込みを入れようとしたが、ヴァラルはアイリスとガラムの言葉に複雑な気持ちを抱きながらも一応は納得した。

「分かった……そんな事情があつたのなら仕方ない。俺も許可を出した以上、責任を待たないとな。お前たちばかりに押し付けてはいられん。それで？これから俺は何をすれば良いんだ？」

さすがにこのままのんびりとしているわけにもいかない。ヴァラルは気持ちを切り替え、セランに質問した。

「とりあえず、主には改めて国民の前で挨拶していただきます。文面は私が考えるので、それを覚えていただければ結構です。それまでは少し時間があるのでこの国を見てまわるのはいかがでしょうか？」

セランがヴァラルに提案した。

「そうするか。俺も気にはなつてたんだよ」

さつきは取り乱したが、これは決して悪いことではないのだ。むしろ良いことのはずなのだ。世界の破滅に比べれば、こんなことどうということはないはずだ。

「私個人から見てもなかなか良い国になってきたと思いますよ。実際に見ていただければ分かるかと」

セランは満足そうに言った。セランが褒めるだなんて珍しいこともあるんだなとヴァラルは思った。……まあ、あのときは何かを褒めるといふ状況すらなかったからな、仕方ない。

「そういえば、この国の名前は何なんだ？まだ聞いて無いんだが」
ヴァラルはふと疑問に思ったことを口にした。玉座の間でちらりとセラランが言ったはずなのだが、そのときのヴァラルは集中力を欠いていたのですっかり忘れていたのだ。

それを聞いた三人が一斉に答えた。

「アルカディア理想郷」

盟友との再会

アルカディアには大きく分けて、三つの区画がある。

自然豊かな湖や森林・耕作地が存在するユグドラシル区画。アルカディア周囲を守るようにしてそびえたつ山々に大規模な鉱山地帯があるウトガルド区画。国の中枢機関が集中し、商業施設や教育機関が立ち並ぶビフレスト区画。責任者はそれぞれアイリス、ガラム、セラランが担当している。

ユグドラシル。アルカディア内で最大の敷地面積を持つこの場所は食糧生産を担う一大拠点だ。肉類や卵、牛乳といった動物性食品、穀物や野菜、果物といった植物性食品、拳句の果てには海産物まで生産しているとのことだ。要約すると、加工食品や調味料を含めたありとあらゆる食材がここで手に入れることが出来るのだ。勿論貴重な樹木や薬草もここで手に入れることが出来る。しかし、このことを知るのは、ヴァラルがアイリス合流した直後のことである。

目覚めてからの次の日、ヴァラルはアイリスが責任者を務めるユグドラシル区画を訪れる予定となっている。彼自身、どこの区画からでも良かったのだが、アイリスが是非最初にユグドラシルへ来てくださいと強く言われ、特に反対する理由もなかったのですのまま決定したというわけだ。

尚、二日目はウトガルド区画、三日目はビフレスト区画をまわることになった。

ヴァラルは適度に身支度をして、城の一室にある無駄に豪華な部屋で朝食を摂ろうとしていた。こんがりと程よく焼けた魚がヴァラルを死んだ目で見ている。それが出された瞬間、彼は焼き魚につき突っ込みを入れてしまった。

お前は どうしてここに いるのだと。

まず、昨日の話から森を造るといふアイリスの目的は十分に達成できたようだ。そこで、食糧を生産し始めたのもまあ良いだろう。だが周りを山で囲まれた場所はどうやって、魚を入手したのか。昔は辺り一面雪原で、海などなかったはずだ。彼女に会ったら早速聞いてみることにしよう。そう思いつつ、目の前にある魚を食べ始めた。

食事をした後、ヴァラルは余裕をもってユグドラシルの入り口に向かった。彼は時間には厳しいほうなのである。寝すぎな部分はあるが。

しかし、三十分も前に森の入り口へ付いたはずなのだが、すでにアイリスは辺りをきよろきよろしていた。

早すぎるだろう……

ヴァラルは自身ではなくアイリスにそう言いたかった。けれど、気を引き締め、アイリスに向かって遅れた事を詫びた。

「すまない、少し待たせたか？」

「そんなことないです！私も今来たばかりですから！」

どう考えてもそれ以上待つていてくれたようだ。申し訳ないと心の底から思いつつ、この後の予定を聞いた。

「今日はよろしく頼む、アイリス。それで？今日はどこを案内してくれるんだ？」

「はい。今日はこのユグドラシルおすすめの場所を見てまわろうかと思えます。さすがに一日では全部を見ることは出来ませんからね」

ちなみに、今回は簡単な隠蔽魔法を使つての秘密の視察である。正式なお披露目前に顔を出すと、どこの区画でも大パニックになるとのことだ。だが、それを見破る者もこのアルカディアにはそれなりにいるので注意してほしいとセラランに言われた。

「分かった。ところで今日の朝食に魚が出てきたんだが、あれは一体どういふことなんだ？」

「あつ！気づきましたか。今日はその疑問に答えられる所も主様を案内しようと思えます。楽しみにしててくださいね」

今朝の出来事はアイリスの仕込みのようで、それも含めて彼女はヴアラルに見せたいものがあるようだ。

……………だんだんとセラランに似てきたのは思い違いであつて欲しい。森へ歩き始めたアイリスの後をついていきながらヴアラルは思うのであつた。

「このユグドラシルには私たちハイエルフの他に沢山の方々が暮らしています。皆さんとても仲良しなんですよ？」

それなりに整備された森の道を二人で歩きながら、アイリスはこの区画に住む仲間や動物達を説明してくれた。

ユグドラシルにはハイエルフやフェアリー、ケンタウロスやユニコーン、ウッドゴーレム等多種多様な森の住人達が暮らしているという。敷地面積が最大規模を誇るだけあって、その数の多さも圧倒的である。

そして、その中には幻獣もいるということにヴァラルは驚きを隠せなかった。

幻獣。狼のような姿をとっているが、非常に高潔な存在で基本的に他の種族と関わりあうことはない。雷や風を纏い疾走する姿は森の王者と住人達から敬意をもって呼ばれている。

「幻獣もいるのか。だが、大丈夫なのか？あいつらは確か縄張り意識が相当強いはず。トラブルにならなかつたか？」

ヴァラルはアイリスたちを心配した。

そう。幻獣はその誇り高さゆえ、住処への侵入者は決して容赦しないのだ。ごく稀に生還する者もいるのだが、大抵はそのまま生きて戻ることは無い。そんな連中がこの住人とトラブルを起こしたら……想像したくもない。

「そんなことはありませんよ。逆に彼らはユグドラシルの開拓に一番最初に協力してくれたんです。そのおかげで他の方々も積極的に手伝ってくれるようになったんですよ?」

アイリスがそのときの状況を詳しく説明してくれた。

そうだったのか……確かに森の王者である幻獣達が自ら動くのなら、この森の開拓もかなり進んだことだろう。

「それはすごいな。気難しいあいつらを従えるなんて」

「そんな、従えるだなんて……私はユグドラシルを造り始めてから一度たりとも彼らをそんな風に思った覚えはありません!」

「すまんすまん、冗談だ。だが、それでもここまでのものを造り上げたのはアイリスが頑張ったからじゃないか。本当にすごいと俺は思うぞ」

ヴァラルは掛け値なしにアイリスを褒めた。

それも当然だ。口には出していないが、開拓する上で、ヴァラルの想像を絶するよなつらいことや悲しいことがあつただろう。それをおくびにも出さず森の仲間達の素晴らしさを語る彼女はまさにこのユグドラシルの管理者にふさわしい。改めて彼はアイリスの強さを認識した。

アイリスが照れた顔を浮かべているのを見つつ、二人は森をさらに進んだ。途中、一角獣やケンタウロスに出会ったが、特に問題もなくアイリスは彼らと会話をしていた。子供が生まれたので是非祝福

して欲しい、新しい野菜を作ったので是非食べに着て欲しい等、アイリスはユグドラシルの中で相当慕われているようだった。

いまではこうして和やかに会話しているが、ここに住む住人の多くがかつて絶滅の危機に瀕していた者達ということを後で教えてくれた。多くの自然が失われ、希望を失った者達がアイリスと共に生き残るためにこの森を造り上げたようだ。その命の力強さにヴァラルは心を動かされた。

けれど、ケンタウロスの一人がアルカディアの王が復活したと語り始めてから始めてから彼の心はスツと冷えた。

内容自体は昨日セラランが玉座の間で語ったようなものだった。けれど彼らがそれを誇らしげに語り、ヴァラルをヒーローのように崇めるその姿を見て、彼は複雑な感情を抱いていた。昨日はその話に反応するものがいなかったのが幸いだったのか、こうして喜びに満ちた彼らの顔を見ているとなんともいたたまれない気持ちになってしまった。

アイリスが彼らとの話を終え、色々な果物を貰ってヴァラルに謝ろうと振り向いた。

「主様、すみません。話が少々長引いて……あの、どこか調子が悪いのですか？近くで休憩を取りましようか？」

彼女が心配そうな口ぶりで声を掛けた。

……いかな。こんなところで彼女に迷惑を掛けてはいけない。折角の貴重な時間だ。一秒たりとも無駄には出来ない。ヴァラルは気持ちを切り替え、アイリスに返事をした。

「すまない。少し考え事をしていたんだ。心配を掛けたな」

「……そうでしたか。それなら主様、もう少しだけ頑張ってください。目的地はすぐそこですよ」

アイリスは訝しげにヴァラルを見たが、気を取り直して彼と歩き始めた。

それから十分後、ついに目的地の一つに到着した。そこは外周だけでも数十キロにも及ぶ巨大な湖だ。アイリスによるとこの湖深くには海底洞窟があり、海と直接繋がっているのだそうだ。

ふとヴァラルは奇妙な感覚に囚われた。誰かがここへ近づいている気がする。けれどすぐにその感覚は無くなりヴァラルはそれを思い過ぎしだと考え、アイリスと湖畔の近くにある芝生の上で昼食を摂ることにした。

アイリスの作る料理は美味しい。それはヴァラル、ガラム、セランの共通認識だった。千年前、彼らは楽しみといえるものがほとんど無かった。けれど、毎日の食事だけは彼ら三人の唯一の楽しみだったのだ。

あのかきはそれなりの材料しか扱うことが出来なかったが、今は違う。何せユグドラシルの責任者は彼女であり、日々の料理が彼女の手によりつくられた食材から生み出されているのだ。

確かに、昨日の昼食、夕食共に美味しかった。けちのつけよしの無い美味しさだった。

けれど、アイリスの料理は違う。食材ごとにヴァラル好みの味付けや調理法等、全てに至るまで知り尽くしているのだ。そんな彼女がヴァラルのためだけに手料理を作ってきてくれたのだ。期待しないほうがおかしい。

「さて、アイリス。今回はどんな料理を作ってきてくれたんだ？正直言っただけでかなり待ち遠しいのだが」

ヴァラルは急かした。

「ふふつ。主様、慌てなくてもちゃんと用意してありますよ」

そう言っただけ、彼女は大きなバスケットから料理を取り出した。おにぎりやから揚げ、卵焼きやウインナー、サラダと先ほどケンタウロスたちから貰った果物といったラインナップだった。

「見どころにもあるような料理だと思っただけがちだがそんなことはない。」

彼女の真骨頂は、こつしたありふれた料理にこそ真価を発揮するのだから。

いただきますと二人が手を合わせたと同時に、ヴァラルは料理に唸喊した。

まず彼は最初におにぎりを食べ始めた。米の一粒一粒に程よく塩気が混じり、湿った海苔との相性は抜群だった。また、中に入っていた具は梅干であり、こんなものまで作っていたのかと驚きつつ食していった。

昆布、ツナマヨといったヴァラルの好物のおにぎりをちゃんと把握していたアイリスに感謝しつつ、次々と料理に手を出していった。

から揚げは魔法を使ったのか、揚げたてのようならつとした衣にジューシーな肉汁が口の中であふれ出した。卵焼きはふわつとろけるような味、ウインナーはパリツとした歯ごたえ、サラダはレタスのシャキシャキとしたみずみずしさ、マンゴーのような果物は濃厚な甘さの中にさっぱりとした味わいでヴァラルの舌を楽しませた。

「ご馳走様でした。アイリスさん、本当に美味しかったです」

このときばかりはヴァラルは敬語になっていた。いつもは不遜な態度を誰にでも働く彼だったが、彼女の料理の前では全く太刀打ちできなかつた。彼の非常に珍しい姿である。

「ありがとうございます、主様。こうして美味しく召し上がっていただけただけでも私は幸せです」

アイリスはヴァラルの姿に苦笑しつつ思ったことを述べた。千年間、彼女はヴァラルを待ち続けてきたのだ。こうして彼と何気ない日常を過ごすだけでもこの上ない幸せなのだ。

二人はその後、食後の麦茶を飲みながらゆっくりとしていた。この麦茶もキンキンに冷えており、ヴァラルの喉に清涼感をもたらした。飲み終えた後、ヴァラルはのんびりと芝生の上で横になっていた。風が心地よく吹き、今にも眠りそうだ。隣ではアイリスが座りながらヴァラルの顔を眺めている。

「平和だなあ……」

ヴァラルはポツリと言った。千年前、ここは草の根一つ生えない土地だったのだ。それがここまで自然豊かな土地になるとは……これも彼女のおかげなのだろう。ヴァラルはアイリスに声をかけようとしたとき、湖に異変が起きた。

何かがやってくる。

巨大な影が写りこみ、水かさが徐々に増していった。急いでヴァラルは湖の近くへ寄った。その一方、明らかに異常事態だというのにアイリスはのんびりと立ち上がり、ゆっくりとこちらへやってきた。アイリス！何のんびりやっているんだ！そう言おうとした瞬間、水しぶきが上がり、その生物は姿を現した。

全身に青く輝くような鱗、蛇とドラゴンの体躯を併せ持ったそれはリヴァイアサン。海神とも呼ばれ、全身から圧倒的な力の奔流を感じさせる彼は、かつてヴァラルたちに力を貸してくれた盟友でもある。

「こんにちは、フィリス。今日はまたどうしてここへ？といっても、貴方なら分かりますか」

アイリスはちらりとヴァラルの方を向いた。

「アイリスか。いやなに、懐かしい気配がしてな……目覚めていたのか、ヴァラル。久しいな」

リヴァイアサンのフィリスはその巨大な体躯をヴァラルのいる方向へ向けた。それなりの隠蔽魔法を掛けたつもりなのだが、彼はそれをあっさりと見破っていた。

「ああ、久しぶり。あんたがここにいるとはね。しかしフィリスは聖地へ戻っていったと思っていたんだが……何かあったのか？」

ヴァラルはかつての盟友がここにいるわけを知りたかった。

彼が言うには、聖地と呼ばれる海底神殿に一度戻ったのだそうだ。けれどその場所は大災厄によって影も形もなくなっており、彼は世界を転々とする日々が続いていたらしい。そんな折、風の噂でアイリスたちがこの地で国を造っていると聞き立ち寄ってみたところ、ここはかつての聖地と同じように魔力が溢れる素晴らしい土地だったという。

「そのためこの地へ住まわせてくれるようアイリス達に頼み、今に至るといっわけだ」

長々と語り終えた彼はヴァラルと目を合わせた。

「そうだったのか……すまないな、色々」

ヴァラルは今でも何か出来ることがあったのではないかと思索し、結局詫びることしかできない自分に腹を立てていた。

「何を言うのかと思えば。本来、あの我らは大災厄によって滅びるはずだった存在。むしろ感謝したいほどなのだ。この地で心安らかに過ごせる事に」

フィリスは勘違いを正すかのようにヴァラルに言った。

「すぐ謝る所は相変わらずですね、主様は」

アイリスも千年経っても変わらない主の癖に少し呆れていた。

「ところでフィリスはここで……ああ、なるほど。アイリスの言っていたことはそういうことだったのか」

フィリスはこの湖深くにある海底洞窟に住んでおり、彼はアルカデアへ魚介類を提供しているようだ。周りを山で囲まれているのに、どうして海産物が食卓に並んでいることに疑問に感じていたヴァラルだったが得心がいった。

そうして、盟友との再開の時間は瞬く間に過ぎていった。彼を除いて後二体いるフィリスと同類の存在である彼らの行方、それについて話し合っていたのだ。

「結局のところ、あいつらとははあれっきりなんだな、フィリス」

「そうだヴァラル。だが、二人のことだ。きっとこの世界のどこかで遅く生きているに違いない」

そういつてフィリスはこの話を締めくくった。

そして、数瞬の間が置かれた後、アイリスは話を切り出した。

「フィリス、本当に申し訳ないのですがこの後、私達は行く場所があるのでそろそろ失礼しますね」

アイリスは彼に謝った。フィリスはまだまだ話したいことがヴァラルにあるだろうに。けれど、それを邪魔する自分の心の浅ましさを呪った。

「気にすることではない。我もヴァラルと少しの間だけでも再び話をする事ができ、それだけでも非常に有意義な時間であったことは確かだ」

いざとなれば魔法で直接会話すれば良いのだから、フィリスはヴァラルと顔を合わせただけでも十分だった。

「分かりました、またここへ来ますね」

「そのときは我が住処へ招待しよう。楽しみにしていると良い」

フィリスの住処か……どんなところなのだろう。ヴァラルは二人のやりとりを聞きながらそんなことを思っていた。

こうしてヴァラルとアイリスは彼のいる湖を後にして、次の目的地へ向かった。

二人はその後、大急ぎで小高い丘にたどり着いた。時刻は夕方。この場所はユグドラシル全域を見渡すことの出来る所なのだ。

「主様、いかがでしたか？このユグドラシルは。といってもほんの

一部しか見せられなかったのですが」

アイリスはこの光景ををヴァラルに見せたかったようだ。夕陽を背にして映る彼女は本当に美しい。

「千年経ったとはいえ、これほど自然が豊かな場所だとは思わなかった。本当にびっくりしたよ」

「ありがとうございます。そう言っていたただけでも本当に嬉しいです。けれど私だけの力ではここまで出来ませんでした。そして何より、主様のおかげでユグドラシルを含めたアルカディアはここまで立派になったんです」

「俺が？ 一体どういうことなんだ」

ヴァラルは疑問に思った。千年眠り続けていたはずなのだが、知らない間にアイリス達に力を貸していたようだ。身に覚えの無いことに彼は戸惑った。

「主様が眠りにつかれた後、この辺りは信じられない早さで魔力が大气に満ちていったんです。いまではかつての聖地以上に魔力が集まっているですよ、ここは」

聖地と呼ばれる場所には絶対条件がある。それは大気中の魔力濃度が一定水準以上に達することだ。この他にも様々な条件はあるのだが、最初の絶対条件を満たすことが一番難しいのだ。

「目覚めたばかりなのに、やたらと調子が良いのはそういうことだったのか……」魔力濃度が高いと、アルカディアの住人は活性化する。言い換えれば絶好調の状態が続くのだ。

「他の区画でもこの土地に惹かれてやってきた方々がたくさんいます。今は無理でもそのうちに会ってくださいね。あっ！そろそろですよ主様！」

アイリスがそういって、太陽は徐々に地平線の彼方から徐々に沈んでいった。アイリスと二人で過ごす時間はこれで一旦終わりだ。

そうして日が沈むことで周りは暗くなっていった。

「こうやって主様とここで夕日を眺めることが私の夢だったんです」

「随分と小さい夢なんだな」

「ええ、そうなんです。私は毎日を穏やかに過ごすことが出来ればそれで良いんです」

その後、ぼそぼそと彼女が何か言ったような気がした。

「すまん、アイリス。何ていったのか聞こえなかった」

「何でもありません！さて、そろそろ帰りましょうか。あんまり遅いと二人に怒られます」

そうやって彼女は歩き出し、ヴァラルはその後について丘を去ろうとした。

「そうだ、アイリス。まだ言ってなかったな」

ヴァラルは思い出したように言葉を口にした。

「主様？」

アイリスは後ろにいる彼に振り向きうしろを向いた。

「ただいま」

ヴァラルは彼女を後ろから抱きしめた。

「……………おかえりなさい……………主様あ……………」

アイリスは泣きそうになっていた。

ウトガルド

アイリスとユグドラシルをまわった次の日、ヴァラルはガルムが責任者を務めるウトガルド区画へ向かった。

ウトガルドはユグドラシルとは違い、荒野の大地が広がり、メクビリス山脈がそびえたつ場所で、決してのどかなところではない。

メクビリス山脈。突然の豪雨、常に吹き続ける強風、断崖絶壁の山々、まさにそこはアルカディアを守護するに相応しい天然の要塞と化していた。

このような厳しい環境のため、そこに住む生き物もドラゴンやドワーフといった強靱な生命力を宿しているものが多い。

そのためウトガルドは他の区画と比較すると、不毛の場所だと思われるがそんなことはない。メクビリス山脈自体が魔力を大量に溜め込んだことで稀少な鉱石が泉のように湧き出ているからだ。

朝食をとり、ヴァラルはウトガルド区画の入り口である山の麓へと到着した。今回はここでガルムと待ち合わせをすることになっているのだ。

……さすがにいないな。ヴァラルはとりあえず一安心して彼を待ち、約束の時間の五分前、ガルムは駆け足でこちらにやってきた。

「おお危なかった。ヴァルは時間にはうるさいからな」

ふうと息を整えヴァラルに話しかけた。急いでいたようだが、彼に疲労の色は見えない。

「何か事情があるなら怒りはしないさ。ところで、どうして今日はあの姿じゃないんだ？」

ヴァラルは疑問に思った。ガルムはドラゴンだ。その気になれば姿を変えることで、あつという間にここへたどり着くことが出来るだろう。けれど、人の姿で走る彼を見て不思議に思ったのだ。

「いやなに、簡単なことだよ」

何故ここでも人の姿をとっているのかというヴァラルの疑問に彼は答えてくれた。

そもそも、ガルムはこのアルカディアに住むようになってから人の姿でいることが多くなっていったようだ。セランやアイリスと何度も顔を合わせる機会が多いのも理由の一つなのだが、一番の理由は真の姿を見たものは大抵怖気づいてしまうからなのだそう。故人前ではあまり本来の姿に戻ることは無いのだという。

「全く、俺で怖がるようなら、セランが元の姿に戻ったら一体どうなるんだよ。失神でもするのか？」

ガルムが不満げに語っていた。

「あれはなあ……アイリスも最初びっくりしてたっけ」

まあ、セランがああ姿になることは余りないだろう。相当怒らせる必要があるのだから。尤も、そんなことをさせた相手は即座に死ぬことが確定するが。

「それとだ、今日は俺の住処にそのまま案内するつもりだったんだが予定変更だ。遅れそうになったのは鉱山やドワーフの工房を見せてもらえないか今まで交渉してたんだよ。急だったんだが、何とかねじ込むことが出来た。ウトガルドへ来たんなら、この二つは絶対にヴアルに見せようと思ってな。俺の住処へ行くのはその後だ」

ドワーフ。浅黒い肌で筋骨隆々とした体を持ち、口に髭をたくわえている彼らは、鉱山の奥深くに住み、そこから採れる金属を加工する技術に長けた種族である。彼らは気難しい種族だ。というより、仕事一筋の連中が多い。そんな彼らの仕事現場へ押しかけるのだ。なかなか骨の折れる交渉だったに違いない。

「なんだか悪いな。手間をとらせたようぞ」

ヴアルは彼の心遣いに感謝した。ガルムはドラゴンということと周りからは粗暴なイメージを持たれているが、こういったところではさりげない気配りが出来る頼れる仲間なのだ。

……まあ普通のドラゴンとは少々違うのだが、それを知っているのはアルカディア内でもそう多くはないだろう。人の姿でいることが多いという彼のことだ、むしろ少ないはずである。

「いや、俺も久しぶりに見たかったからな。もののついでという奴だ。さて、そろそろ行くか。あんまり遅れるのもまずいからな」

軽くヴアルの言葉を返してガルムは歩き出した。確かに、いつま

でも話をされていて遅れることになれば彼の厚意を無駄にしてしまう。そのため、ヴァラルもガルムの後に続いた。

三十分後、メクビリス山脈を眺めながら原野を歩き続けていた二人は目的の場所に着いた。

鉱精の回廊。ウトガルド区画の中で鉱石の最大産出量を誇る鉱山である。ここから採掘される鉱石は最高級の品質をもち、アルカディア内の重要施設や武器、魔法アイテムの材料等、ありとあらゆる場所に使われている。因みに、ヴァラルの住んでいるローレン城にもその多くが使われている。

その鉱精の回廊の前で一人のドワーフが二人を待っていた。今回も隠蔽魔法を使っているのでドワーフには、ガルムだけしか見えていないはずだ。

「おいガル、急にここを見たいだなんて一体どういう見をしているんだ？わしらにも都合というものがあるのだぞ？」

ドワーフが不機嫌そうにガルムに文句を言った。

「悪いエド。ほら、ヴァラルが起きただろ？アルカディア中をまわることになったとき、こここの区画だけ問題があったらまずいだろう？だから今回の視察はそれをチェックするためのものだと思うてくれ。何、邪魔はしないさ」

ドワーフの名はエドというらしい。彼はドワーフの中でも指折りの実力者であり、特に武器や防具作成に関しては彼の右に出るものはいないとのことだ。

「ふん、何を考えているのだから……今日はこの中と工房を見せるということでいいんだな？」

渋々ながらもエドは確認を取った。口は悪いが、根は案外良い奴なのだろう。

「ああ、よろしくたのむ」

ガラムはその場で、ヴァラルは心の中で呟いた。

「ふんっ。せいぜいはぐれないようにするんだな。迷ってもそのまま置いていくからな」

そうして三人は鉱精の回廊へ足を踏み入れた。

鉱山の中へ入ってからしばらくして、今まで無言だったエドが口を開いた。

「……なあガラム、お前さん何かしたか？」

薄暗い坑道を歩きつつガラムに質問した。どうやら彼はこの場所がどこか変であるということに気づいているようだ。

「質問の意味が分からん。別に俺は何もしてないぜ？」

その一方、ガルムは何が起こっているのか全く理解できていないという顔で彼に答えた。

「……ならいいんだ」

エドはヴァラルの瞳をじっと見たかと思うと、再び歩き出した。

「何なんだ？ 一体？」

ガルムは何がなんだかさっぱりだという表情をし、困惑していた。

しかし、ヴァラルはエドの言いたいことが少し分かったような気がした。

騒がしいのだ、ここが。

そこまで大きなものではない。ただ、ささやき声のようなものが辺りから聞こえてくるのだ。

その声に悪意は感じないのだが、正体はわからない。とにかくガルムたちとはぐれないようにしよう。一旦思案するのをやめ、急いで二人の後を追った。

三人がその場所に着いたとき、誰もが驚いた。

そこは大きな空洞が広がっていて、いくつものテントが張られている。おそらくここはドワーフたちの中継地点のようなものなのだろう。いつもなら何の変哲もない所なのだが、今日は全く違っていた。

空洞を構成している壁が光り輝いているのだ。それも様々な色で。まるでここへ訪れたヴァラルを歓迎するかのようだ。

けれど、そんなことを露も知らないドワーフたちは慌てふためいている。彼らの動揺振りがこちらにも伝わってくるようだ。

一人のドワーフがエドを見つけるなり、急いで近づいてきた。彼もこの事態に困惑している一人のようだ。

「エドさん！これは一体どういうことなんですか！」

「わしにも分からん……こんなことは始めてのことだ……」

彼も内心戸惑っていたが、やはり他のドワーフとは違う。何が原因でこのようなことが起きたのか、冷静に分析していた。

そうしてエドは違和感に気づいたのか、ガルムへ話しかけた。

「なあ、ガルよ。本当にお前さんは何も知らないのか？わしは今朝お前が急にここへ来たいと報告を受けてからどうも怪しいと思っていたのだ」

じつとガルムを見た。先ほどとは違い、どんな嘘でも見逃すまいとする目だ。その眼光の鋭さにさすがのガルムも怯んだ。

「俺がここへ突然来た時だって今まで何回かあったし、そのときは何も起きなかったじゃないか！そんなこと急に言われても……

…あ」

ガルムが変な声を漏らした。それを彼は見逃さなかった。

「何か知っているみたいだな。さて、とつとと白状してもらおうか？」

じりじりとにじり寄るエド。ガルムはその迫力に気圧され今にもその場から逃げ出しそうだ。

そろそろ潮時か……この辺りでどうにかしないとガルムにあらぬ疑いがかり、大変なことになる。ヴァラルはそう考え、隠蔽魔法を解いた。

「全く、ガルの奴め。そんな大事なことを黙っていたのか……………」

「さっきのことを含め、本当にすまない。これは俺のわがままだったんだ。エド、ガルムを責めるのなら俺を責めてくれ」

気絶しているガルムの隣でヴァラルはエドにここまでの経緯を説明し謝罪していた。

ここは鉱山の外にあるエドの工房。あれからヴァラルはドワーフたちを落ち着くよう説得して回った。

けれど、突然アルカディアの王が現れたということで周りはさらに慌て、一時はパニックになりかけたが、エドの一喝によって事態は終息に向かっていった。さすがはエド、俺の見込んだ男は違っね！と、調子の良いことを言っていたガルムは彼の拳骨を食らい、依然としてのびたままだ。

「いや、過ぎたことをいちいち掘り返してもしょうがない。こちらこそみつともない姿を見せてしまったな。折角来てくれたというのに、こんな場所ではかお主を迎えられないのはドワーフの恥だな……」

「恥だなんてとんでもない。さっきの鉱山での出来事を見ていたが、随分と部下から慕われていたじゃないか。俺が起こしてしまった騒動をいとも簡単に鎮めた男の住処だ。けちをつけるはずないじゃないか」

「そうか？そう思ってくれるだけでも随分助かる。わしもあのときは無我夢中だったからな。若造どもにもお主のこと、よく言い聞かせておこう」

「そうだぜエド！ヴァル、見てみるよこの剣！すげえ綺麗じゃないか！」

いつの間にか復活していたガルムが大型の剣を勝手にどこからか持ち出していった。全く、こういうところは相変わらずだな……

「エド、もし良ければ工房を見せてもらえないか？実は、それがここに来た理由でもあるんだ」

「良いとも。お主からすればまだまだかもしれんが、それなりの自信作がある。是非見て欲しい」

三人は一旦、昼食をとった。こう見えてもエドはなかなかの料理上手で、ガルムとヴァラルの舌を唸らせた。さすがはエド、つくる事に関しては何でも器用にこなすな。

その後、ヴァラルたちはエドの工房にある倉庫に案内してもらった。そこには剣や槍、槌やハルバードといった武器の数々や、重厚な盾や、鎧といった防具が所狭しと並んでいた。

「すごいな……どれもこれも」

ヴァラルは溜め息を漏らしていた。一見すれば無骨な剣や鎧に見える。けれど極限までに洗練された武具はある種の美しさを放ち、芸術品と呼んでも差し支えないものばかりだった。ここにある武器や防具はエド渾身の力作なのだろう、これほどのものを作り上げる彼の腕にヴァラルは驚嘆した。

「そうだろう、そうだろう。俺やセラも人の姿のときはこの武器を使ってるんだぜ？いいだろう」

ガラムが自慢気に話した。くっ、確かにうらやましい。俺もエドに作ってもらおう。ヴァラルはすぐさまエドと交渉に入った。

「なあ、エド。俺もそのうち武具を作ってもらえないか？材料と費用は俺が出す」

「構わないぞ。むしろこちらからお願いしようと思っていたところだ。しかし……お主の剣を以前見せてもらったことがあるのだが、あれを使えばよいのではないか？」

あの折れたやつか……

「あれは駄目だ。すでに使い物にならないし、あんな剣が必要になるほど世界が切羽詰っているわけでもないだろう？それにエド、俺はお前の作った武具を使ってみたいんだ」

ヴァラルは真剣に言った。というよりエドのような男にはこうして頼むしか方法はないだろう。

「そうか……そこまで言われたなら、期待に答えねばなるまい。分かった、いつでもやってやる。金は取らん。材料もこちらに任せてもらえるのなら今からでもやっても良いが？」

頼みが通じたのか、エドは素直に引き受けてくれた。さらに、破格の条件までつけて。さすがにそこまでしてもらってはこちらの立つ瀬がない。

「いや、約束してくれただけでもありがたい。いずれ頼むことにするよ」

ヴァラルは彼に礼をいい、後日改めてここを訪れることにした。さて、どんなものをつくってもらおうか。彼が悩み始めると、ガルムがぶーぶー文句を言い始めた。既にエドの武具を持っているくせに、何を言っているんだ。

「良いよな、ヴァラルは。こう見えてエドはドワーフの中でもかなり頑固者なんだぜ？俺だって作ってもらうのに相当時間がかかったんだぞ」

やけにあっさりしていたと思っただが、彼もやはりドワーフであり、作る相手を選んでいたようだ。

「ガルは礼儀がなつとらん。セランはそのあたりきちんとしていたぞ。それにお前さんはすぐに壊す。何回直したと思っっているんだ。もっと大切に使い」

エドのつくった武具を何回も壊すとは……ガラムは一体何をしているんだ。

「いやあ、すまんすまん。あいつらの相手をするとい……な」

「何度も言ったが変身すれば済むことだろう。なぜその姿で戦おうとする？わしには理解できないぞ」

「それだと弱いものいじめになるって言っただろう？互角の勝負をしたいんだ俺は」

「どこの世界にあいつらと戦う馬鹿がいるか。そんな奴ら見たことないぞ」

「俺がいるじゃん。ヴァラルは当然として、セラんにアイリス、フイリスもいけるな。後はあいつ等に……何だ、結構いるじゃないか」

「そういう意味で言ってるんじゃない！……はあ、お前さんの相手をするのは本当に疲れる……」

エドは深い溜め息をついた。心中察する。ガラムはいい奴なんだが、たまに話がずれることがあるのだ。二人のやりとりを見ながら、エドを気遣った。

そんなことを思っていると、外から轟音が部屋中に響いた。まるで何かに着地したかのような凄まじい音だ。

ヴァラルは突然の出来事に驚いたが、ガラムはこの原因が何か知っているような顔をしており、エドはまたか……という諦めたような

表情をしていた。

暴虐の龍王、天のバハムート

三人が外へ出るとそこにはドラゴンがいた。けれどこのドラゴンは大きい。いやとてつもなく大きい。

ワイバーンに代表される飛竜は最大でも十メートル程の大きさになる。けれど、ここにいる龍は少なくとも二十メートル以上はある。

エンシエント・ドラゴン
古代龍。彼等はずつとこの世界の上位種族だった。強大な魔力をその身に秘め、大空を自在に飛び回る彼等は何者をも寄せ付けぬ存在であり、時の一大勢力を築いていた。

けれど大災厄が発生したことで、彼等の栄光は地の底へ墮ちた。種の繁栄よりも個々の強さを求めたため、その数は他の種族に比べて非常に少なかった。それが仇となり、ヴァラルが眠りについたときには既に種として滅びかけていたらしい。

そんな絶滅危惧種だった彼等が何故こんなところにいるかは特に問題ではない。ユグドラシルにいる連中のようにここへ逃れてきたのだろう。

問題なのは龍鱗の色だ。

エンシエント・ドラゴンにもいくつかの種類があり、龍鱗の色でそれは判別できる。赤みがかかったオレンジなら火龍、黄色の龍鱗ならば雷龍、緑色ならば風龍だということだ。

だがこのドラゴンの龍鱗は黒、つまり黒龍である。

彼等の社会はいわば実力主義のところが多い。力を常に求めてきた彼等だ、それも当然の成り行きのことである。そのような中で黒い鱗という存在は彼等の間である意味象徴的な存在であった。

何故なら、黒龍はエンシエント・ドラゴンたちの王なのだから。ただでさえ一体一体が強力な固体なのに、それを凌駕する力とはどれほどのものだろう。そういうことを考える者達が後を絶たなかった。

黒龍は他の種族や同族の龍たちを徹底的に叩きのめした。それも争う気無くすほどにまで。それゆえついた名が暴虐の龍王。奴とは争ってはならない。それが黒龍というものであり、同族からも畏怖される存在がヴァラル、ガラム、エドの三人の前に立っていた。

「こら！その姿でここへ来るなどあれほど言っただろう！もう忘れたのか！」

エドが大声で怒鳴っていた。黒龍は反逆するものを一切許さない。そのためここにいるドワーフのエドも、その気になれば簡単にひねりつぶされるだろう。ヴァラルはそんな不穏なことを考えてしまった。

けれど、そんな彼の考えとは裏腹に黒龍はエドに向かって謝り始めた。

「ああ、すまないエド。つい忘れてしまった。余りここへはこないからな、許してくれ」

「それで済むならさっさと手伝え！ああ、小屋が……」

黒龍が着地したときに、衝撃によってちょうど近くにあった小屋を吹き飛ばしてしまったようだ。そのため、辺り一面には色とりどりの石が散らばっている。どうやら鉱石を貯蔵しておく場所のようだった。

エドが鉱石を集めているときに、ガルムは黒龍に声をかけた。

「おお、マルサスじゃないか。どうした？こんなところで？」

ガルムはマルサスという名の黒龍に話しかけた。二人は知り合いみたいだ。するとマルサスが答えた。

「ああ、ガルム殿を見かけたと龍たちが騒いでおったので、挨拶をしようと思いこの場所へ来たのだ」

「そっついのはいいって……そっといえば全然来てなかったな」

ガルムはここ最近ウトガルドへ行かないで、ビフレストにあるセランの屋敷に泊まりこんでいたらしい。ガル、お前はここの責任者だろう……顔くらい出しとけ。ヴァラルはうなだれた。

「しかし、珍しいな。ガルム殿がここへいるなんて……おや？隣にいる方はもしかや？」

マルサスがふとヴァラルのほうを向いた。念のためにかけていた魔法だが、フィリスと同じようにあっさりと見破られた。

「マルサスの想像通りだ。こいつはヴァラル、アルカディアの王様

だ。といつてもほんの二日前に目覚めたばかりだけだな。今日は案内を兼ねてここへ寄ったんだ」

ガルムはここにいるわけを彼に説明した。すると、マルサスは大層驚いた様子だった。

「ほう、貴方がヴァラルル殿だったか。噂は龍達の間で聞き及んでいる。私達を助けてくれて感謝する」

なんともむず痒い態度で挨拶され、暴虐の龍王と呼ばれる彼がこのような態度でいることにヴァラルルは調子を崩された。

「おい、ガルム。こいつはあの黒龍なんだよな？俺が想像していたのと随分違うようだが」

思わずガルムにたずねてしまった。

「まあな。それでも最初会ったときは結構気が立ってたけどな。だがそれも当然だろう、あいつ含めて百体もいなかったんだからな」

ガルムと会う前のエンシエント・ドラゴンたちは常に命を狙われ続けていたそうだ。その身に秘める強大な魔力を手にしようと次から次へと襲われたのだ。ヴァラルルが眠りについた後も世界は争いに満ちており、彼らも生き残りをかけて必死に戦っていたという。

けれど、度重なる襲撃により徐々に追い詰められ、さしもの黒龍であるマルサスも満身創痍の状態だったらしい。

そのため、ガルムのことを最初見たときは人間だと勘違いし、躊躇いもせず襲い掛かったのだそうだ。

「ああ、今思うと最低な出会いだったな」

「すまないガルム殿。あのときは同胞を守るために死ぬ物狂いだったのだ」

どうやらマルサス自身、元々争いを好まない性格であり彼から積極的に戦いを仕掛けることはなかったのだという。けれど、黒龍ということで命を狙われ続け、それを返り討ちにしてきたことで不本意な名前までつけられたとのこと。そしてガルムと出会い、仲間と共にこの地へやってきて現在に至るそうだ。

「フィリスもそうだったが、マルサスたちも随分と苦労してきたんだな」

「アイリスも言ってただろ、アルカディアにいる連中はそういう奴らばかりだって。それよりもフィリスに会ってたのか。後で驚かせようと思ってたのに」

「余計なことはしなくて良い。それよりもエドを手伝うぞ、少し大変そうだ」

ヴァラルは近くに落ちていた鉱石を拾い、エドの手伝いをし始めた。ガルム、マルサスも加わったことで予想以上に鉱石集めは早く終わり、とりあえずひと段落した。小屋は新たに立て直さなければならぬが、それはまた後日ということになった。

「すまないな、わざわざ手伝ってもらって」

エドはヴァラルに礼を言った。

「何、武具を作成してもらった。これぐらいどろどろということはない」

「後はマルサスにやってもらおう。元々あいつのせいなんだ、きつちり働いてもらわないとな。ところで、おぬしはこれからどこへ行くつもりだ？ここにはメクビリス山脈しかないぞ？」

「あの山へ登るつもりだ。ガルムの住処へ行くことになっているからな」

「何と！……成る程、おぬしならあの山を登ることなど造作もないだろうな。しかしガルムの住処へ……珍しいこともあるもんだ」

「そんなに珍しいのか？」

「そりゃそうだ。実際に見たことがあるのはセランとアイリスぐらいしかないらしいからな。まあ楽しんできな」

「ああ、そうするよ」

そういつてヴァラルは工房でエドと別れた。外ではガルムを待たせていている。少し急がないとな。

工房を出ると、ガルムとマルサスが話していた。二人の間で積もる話でもあるのだろう、何やら楽しそうだ。

「おう、終わったか」

「まあな、二人は行かないのか？」

「俺の場合エドといつも喧嘩になるし、マルサスは怒らせたばかりだ。今回はパス」

「全く…… それで？この後はガルの住処にどうやって行くつもりだ？さすがに道案内してもらわないと俺が困る」

「その前に少し歩くか。マルサス、お前も来るか？」

「良いのか？今回はガルム殿とヴァラル殿でまわる予定だったので
は？」

「別に俺は気にしない。別に一人二人増えても変わらないだろう」

「ヴァラルがこう言ってるんだ。気にするな」

「……感謝する」

こうしてヴァラルとガルム、そしてマルサスは歩き出した。歩幅が違うため、後ろでは地響きを起こしてゆっくりとマルサスは歩いていた。なんとも不思議なことを五分ほど続け、ヴァラルたちは周りには何も無い荒野の大地に立っていた。

「ここなら問題ないだろう。マルサスの二の舞にはなりたくないからな。それにここからは徒歩だと時間がかかりすぎる。ということ
でヴァラル、ちょっと待て」

ガラムはそういつと同時に人の姿を解き放った。

青く、輝くような魔力の奔流が凄まじい勢いでガラムを中心に渦巻く。あまりの眩しさにマルサスは目を開けていられず、竜巻が発生したかのような風をヴァラルはその身に受けて、ガラムはその姿を人から龍へ変貌させていった。そうして長いようで短い時間は終わり、彼は本来の姿を見せた。

白銀に輝く龍鱗、岩をも切り裂く鋭い爪、何者をも粉碎する巨大な顎、そして見るもの全てを圧倒する翼。聖獣バハムートとよばれる存在がそこにはいた。

聖獣は四体存在する。水のリヴァイアサン、炎のイフリート、地のタイタン、そして天のバハムートだ。

バハムートはドラゴンと呼ばれる種族の頂点に君臨するため、聖獣の中でも屈指の実力を持つ。そのため、アルカディア内でも彼の真の姿で一对一で戦うことができるのはフィリス、アイリス、セラ、ヴァラルの四人だけだろう。

また、ガラムは聖獣であるにもかかわらず特定の聖地をもっていなかった。それ故、最後までヴァラルと行動を共にした唯一の聖獣でもある。

「ガラム殿の本当の姿……何時見ても凄いな……」

マルサスが感動に打ち震えているその横でヴァラルは

「何度見てもでかいな。やっぱり人の姿のままなのが正解だな」

そんなことを言っていた。

「ヴァルまでそんなこと言うのかよ……それよりも早く乗れ」

ガルムは急かした。

「良いのか？」

ヴァラルは確認した。彼は背中に何かを乗せるのがあまり好きではないのだ。

「今日は俺が案内役だといったらう？ほら、さっさと乗った乗った！」

ヴァラルはガルムの背中に乗った。それを確認した彼は翼をはばたかせ、一気に急上昇した。そうしてヴァラルたちはメクビリス山脈へあるというガルムの住処へ向かった。

「こうしてガルの背中に乗るのも千年以上前のことなのか」

眼下には断崖絶壁の山岳地帯が広がっている。確かにこんなところを歩こうとするのは自殺行為である。けれど、こうして空を飛んでいる彼らには全く関係のないことだった。

「そんなに経ったのか。だが俺の背中に乗せた奴は今までにアイリスとセラフ、そしてヴァルだけだな。光栄に思えよ」

ガルムはふふんと鼻を鳴らした。

「はいはい、どうもありがとうございますがむさま。これで良いか？」

「感謝の欠片もないお礼をどうも。そんなことより、そろそろ着くぞ」

軽口を叩き合っている間に到着したようだ。さすがはガルム、これほどの距離をあっという間に移動するとは。バハムートの名は伊達ではない。そうして彼は自分の住処へ着地し、ヴァラルも滑り降りるようにしてその地へ立った。その後やや遅れてマルサスが到着した。

「おいマルサス、着地はもつと丁寧にしろ」

ぎこちなく着地した彼は、ガルムの住処に訪れていることでもかなり緊張していたようだ。無理もない、聖地へ行くことが許されるのは聖獣に信頼されたほんの一握りの者たちだけだからだ。尤も、ガルムはそんなことを微塵も考えていないだろうが。

ここはガルムの住処である霊峰、所謂聖地である。以前は聖地を自分の手で造ることを考えもしなかった彼だが、フィリスがアルカディア内で海底神殿を造り始めたのを直に見て、対抗心に火がついたようだ。幸いにも時間は大量にあったため、彼なりに試行錯誤を経たていつい最近完成したという。

辺りは霧がかかっているがなかなか見えてこなかったが、不思議なことに草木の香りがした。すると、ゆっくりと霧が晴れ、その答えがわかった。

草原が広がっていたのだ、周囲一帯に。まるで空中庭園のようだ。蝶が舞い、多種多様な花があちこちで咲いている。仮にもここは荒々しい崖が立ち並ぶメクギリス山脈。そこはドラゴンのような強靱な生命力の持ち主が生きること許される過酷な場所なのだ。

それなのにここだけは違っていた。砂漠でオアシスを見つけた遭難者もきつとこんな気持ちになったのだろう。信じられないと。

「どうだ？ まだまだアイリスのユグドラシルには及ばないが、それでも何とかここまで出来たぜ」

得意げにガルムは二人に自慢した。

「十分すごい。ガルムにこんな才能があったとは……別の意味でびっくりした」

「というかこんな場所を放置するとは……何を考えているんだ、ガルムは。」

「このことは龍達の間で長く語り継ごう。ガルム殿の住む場所はまるで桃源郷のようだな」

「そうだろう、そうだろう。っておい！ マルサス！ お前はそこまでしなくて良い！」

「何を言うのかと思えば。ガルム殿、ここへ呼んだということはお私にここを長く語り続けとそういうことではないのか？」

「違う違う、おれはただ……」

二人はそうして言い争った。その間、ヴァラルは辺りを散策していたが、しばらくして戻ってきて彼らはまだ言い争っていたので止めに入るうとした。しかし、どうやって割り込もうと考えたとき、ヴァラルはあることを思いついた。

「なあ、ガルム、マルサス。実はお願いしたいことがあるんだがちょっと良いか？」

「ヴァラル殿か。なんだろう、私に頼みごととは？」

「何だ？ヴァラル」

マルサスとガルムがこちらへ向いた。ヴァラルは二人にあることを口にした。

すると、二人は驚いていた。やはりまずかっただろうか。

「そんなことか？別に俺は良いぜ」

当然といわんばかりにガルムは返事をした。

「良いのか、ガル？俺としては有難いんだが……」

「おう、他でもないお前の頼みだ。問題ない」

ガラムのほうは簡単に了承してもらえた。本当に有難い。

「マルサスはどうだ？嫌なら遠慮なく断ってくれ」

「私も大丈夫。むしろ光栄の極みだ」

こちらも許可が取れた。しかし、こんなに簡単で良いのだろうか？
ヴァラルは拍子抜けしてしまった。

「まあ、別に良いか」

こうして、ヴァラルはウトガルドの探索を終えた。大きな収穫を得て。

王の乱心

ヴァラルが目覚めてから三日目、彼はビフレスト区画の一角にある地下施設に来ていた。セランもヴァラルに見せたいものがあるようだ。また、アイリスやガルムが聖獣や古代龍のことを事前に話さなかったのはセランの入れ知恵だろう。彼のこういうところは本当に意地が悪いのだ。

そうしてセランに聖獣や古代龍のことを詰問し、悪びれもしないセランと共に二人は地下を目指していた。

「全く、森に山にとどめは地下か。どれだけアルカディアは広いんだ」

どこまでも伸び続ける地下通路をひたすら歩き続けていた。あちこちには扉があるが、セランを見失うとここで迷子になってしまいうだ。

「伊達に千年かけてませんよ。ユグドラシルは地上では最大の大きさを誇りますが、地下を含めればビフレストもそれに匹敵します」

なんでも、アルカディアの地上部分が制圧された場合のことを考え、地下要塞を建造中のこと。さらに、セランは幾つかの防衛策を検討中だとのこと。さすがに怖くて聞けなかったが。

「はあ、そこまで行くともう呆れるしかない」

ヴァラルはため息をつき、地下通路、いやすでにダンジョンと呼んでも過言ではない階層をいくつも潜り抜け、ようやく目的地にたどり着いた。

そこは訓練場のような所だった。けれど、あまりにも広すぎて奥が全く見えない。これは千人規模で演習を行う場所なのだとセランは言った。演習？何の？ヴァラルは質問する前に彼から爆弾発言が飛び出した。

「主に言い忘れていましたが、一応この国にも軍はあります。とはいえまだ一万ほどですが」

そう言うと同時にどこから現れたのか、黄金の甲冑に身を包んだ騎士たちが一斉に二人の前に集まりだした。様々な武器や盾、杖を持った彼らがあつという間に整列する姿は圧巻の一言だ。

一万ほど？馬鹿を言うな、一人一人の錬度と魔力量が段違いだ。こんな奴らをどこから連れてきたのか、そしてセランは一体何と戦うつもりなのか、疑問は尽きない。

「ガラムによると、ここ三百年の間にアルカディアの外では国がいくつか成り立ち、戦が行われるようになったそうです。その報告を受けて、私達もこの国を守るため軍を編成することにしました」

こんな大事なことをあつさりこの悪魔は言う。……そうか、外の世界も国が出来たのか……ヴァラルは感慨深くなった。

「とはいえ、メクビリス山脈を力づくで越えられるのは今のところ

エンシェント・ドラゴン
古代龍位しかないないので特に心配はしていませんが」

昨日あの山々を眺めたヴァラルもその意見に同意した。あれは徒歩で登るものではない、最低でも飛竜を連れないと無理だ。それでも不可能に感じてしまう彼であったが。

「そういえば、前に見た黒騎士達は何なんだ？ここにはいないようだが」

ここにいる騎士達は全員黄金の甲冑を身につけている。贅沢、いや悪趣味というか、セランが考えつきそうなことだ。けれど、玉座の間にいた漆黒の甲冑を身につけた騎士達は見あたらなかった。

「彼らは主直属の部隊で、主の命令なら何でも従います。実力はここにいる騎士たちよりも上で、言うなれば精鋭部隊のようなものです」

成る程、そういうことだったのか。そんなやりとりで済む彼ではなかった。

「おいおい、まさか死ぬと言えば死ぬのか？さすがに冗談だろう？」

思わずヴァラルは尋ね返してしまった。

「死にますよ？試しに一人連れてきましょうか？」

さらりととんでもないことを言うセラン。冗談じゃない、そんな馬鹿なことで死なせるわけにはいかない。慌てて彼はセランを止めた。

「そんなことしなくて良い！セラン、何当たり前のことを言ってい

るんだという顔をしないでくれ、わかったから！」

思わず彼の肩に手を置いて必死になっていたヴァラルだった。

「分かれば良いのです。それと、これを渡しておきますね」

セランはヴァラルに黒い宝石を手渡した。これで彼らを呼びだしただり、命令することが出来るようだ。使いどころは十分に考えよう。そう言っただけはその宝石を”しまった”

セランは黄金の騎士達にヴァラルを紹介し、訓練を始めるよう命令した。何故セランが地下に施設を作ったのかが今になってようやくわかった。彼らの訓練は外でやるには余りにも危険なものだったからだ。こんなことをやればビフレストはあつという間に壊滅状態になってしまつたろう。それほどまでに訓練は苛烈なものだった。魔法が飛び交い、剣戟が衝撃波を巻き起こす。何時犠牲者が出るのか冷や冷やしていたヴァラルだった。

その後二人は地下の訓練施設を後にしてローレン城の巨大な倉庫へ足を運んだ。ここはかつてヴァラルが三人のために色々を残しておいたところだ。食料や衣類、様々な魔法アイテム等、生活に必要なものをここへ保管していたのだ。

「何だ、全く減っていないじゃないか。三人とも使わなかったのか」
倉庫を見たヴァラルが言った。ぱっと見る限り、千年前と全く変わっていないかったのだ。

「いえ、勿論ある程度は使わせていただきました。けれどアルカデアが出来てから意外にこの国は豊かになったので、使った分はきちんとお返ししようと思ったのです」

「何だ、そんなことだったのか。変なところで律儀だなセランたちは」

「けれど、主に見ていただきたいところはここではないのです」

すると、宝物庫の先に扉が現れた。所謂隠し扉だろう、その扉をセランが開け、ヴァラルを案内した。

扉を開けると長い通路が二人を待っていて、その左右には堅牢な扉がいくつもあった。奥にもまだありそうだったのでかなりの数になるだろう。

そして、セランがその扉の一つを開け、ヴァラルをその中へ入れた。

「……………何だこれ？」

さすがのヴァラルも言葉を失った。彼の視界を覆うほどの金銀財宝の山、山、山。部屋自体がかなりの大きさなので、それを覆い尽くさんばかりの量というのは想像だにしないだろう。後ろでニヤニヤしているセランにヴァラルはやつとおもいで声を掛けた。

「……………これは何だ、セラン」

「主のものですが」

「そうじゃない！これをどうやって手に入れたのかを俺は聞いてい

るんだ！」

「先ほども言ったように、この国はそれなりに豊かになったんです。けれど、さっきの宝物庫だけでは入りきらなかったので新たに作っただんですよ」

セラランがそう答えた途端にヴァラルは部屋から飛び出し、次から次へと扉を開いていった。ある部屋は宝石に近い輝きを放っている鉱石が山のように積まれた部屋、またある部屋は貴重な魔法アイテムがぎゅうぎゅう詰めされた部屋、またある部屋は稀少な秘薬や幻とも言われた霊木が所狭しと置かれた部屋だった。

そうしてヴァラルは通路にへたり込んだ。さすがにこれは彼の心に相当のダメージを与えたようだった。少しやりすぎたか？セラランはそう思いながらヴァラルに近づいていった。

「しっかりしてください。主はこの国の王、むしろこれくらいは当然なのです」

慰めのような、そうでないような励まし方でヴァラルを元気付けた。

「……………俺はな、ここを皆の一時的な隠れ場所として造ったつもりなんだ。ここで傷ついた心と体を休めて、それから外の世界で再び頑張れるようこの城を造ったんだ。それがどうだ？起きてみれば、周りは王様が目覚めたと騒ぎ立てる。セラランも知っているだろう？俺がした過ちのことを」

ヴァラルの口調が暗いものになった。しまった、これはさすがにまだ早かったか？セラランは急いで二人に連絡した。

「ですからあれは」

「似たようなものだ。あれは俺がしたのも同然のことだ。皮肉だな、俺はお前達の同族を大量に見殺しにしてきたんだぜ？世界を救うという名の大義名分で。それを救世主のように崇める奴らを見ると笑えて来るよ」

こうなったヴァラルはしばらく手がつけられない。千年前も彼の自己嫌悪モードが何度かあったが、今回は少し、いやかなりまずい。

「……………」

「最初はさ、ここにいる奴らが幸せそうなのを見て、それでもいいかと思っていたんだ。だが、俺を見る目はどいつもこいつも結局似たようなものばかりだ。当然だよな、世界を救ったんだから。だが、そいつらはその結果だけしか見ようとしない。過程を省いてだ。俺の血なまぐさい冒険譚を聞かせたらきつとドン引きするぜ？」

「……………」

「そういうわけで、俺は辞めさせてもらおう……………後はお前たちで好きにしな。世界を征服するもよし、ここで一生暮らすのもよし、だが俺は眠らせてもらおうよ。今度は誰も入れないようにするがな」

「……………言いたいことはそれだけか？」

セランに似つかわしくない男の声が響いた。突然、ヴァラルは殴られ、長い廊下を転がるようにして吹き飛ばされた。よろよろと起き上がるとそこにはアイリスとガラムがいた。どうやらセランが急遽彼らを呼び出したらしい。

「はあ。全くヴァルの奴がここまでへたれだとは思わなかったぜ。何が俺を見る目がくだ。あほかっつーの。そんなの当たり前だ。お前さんがどう思うとも世界を救ったという事実は変わらん。過程はどうであれそれは真実なんだ」

「それにですね、主。アルカディアの住人は主のやってきた血なまぐさい冒険譚とやらを全員知っています。知っているからこそ、彼らは貴方を崇拜するのです。誰が進んで火山の噴火口に潜るのですか？誰が地割れの中に飛び込むのですか？あのときの私達は自分のことしか考えていませんでした。自分さえ助かれればそれで良い。あの時代はそれが顕著でした」

「けれど主様はそのような中、自ら立ち上がり私達を滅びの道から救い出してくれました。過ちを犯したから？例えあの事実が本当だったとしても、私達にはそれを確認することは出来ません。そのことでまだ主様を糾弾する不埒な方がいるのなら私が許しません！消し炭にします！」

ガラム、セラン、アイリスが思い思いの言葉をヴァラルに伝えた。アイリスからは少々物騒なことを聞いた気がするが、あえて気にしないことにする。

「それにですね、主。外の世界では既に人間たちが溢れかえっているのです。そんな中、私達が外の世界で暮らそうとしたらどうなるか分かりますか？彼らは私達の力を恐れ、排除し、あまつさえ利用しようとするでしょう。最早私達の安住の地はここしかないのです。そこをどこをどうか理解していただきたいのです」

セランは真面目な口調で言った。こんな彼は久しぶりに見た。

「他の国を征服すること自体、ここの連中なら簡単に出来るだろう。だがその後は？人間達に無用な混乱を与えるだけだ。それに世界が崩壊する様を俺達は見てきたんだ。争いがいかに無意味であったか、このアルカディアに住む理解できない奴はいないさ。ま、そんなことも分からないで死んでいった馬鹿共は知ったこっちゃないが」

ガルムは世界が救われた後も戦い続け、滅んでいった者達をばっさり切り捨てた。

「それに主様、このアルカディアは外にあるどの国よりも豊かです。つまり、私達は外へ出る必要がないのです」

控えめなアイリスもこればかりは断言した。失われた魔法や技術を駆使し、千年かけて造り上げたのだ。そのため、この国は彼女の誇りになっていた。

ヴァラルは彼らの言葉を聞き、改めて自分がいかに愚かだったという事を思い知らされていた。罪滅ぼしだといって勝手に助けておいて、その後のことは放置する。彼らからすれば良い迷惑だ、だったら最初から助けなければ良かったのだ。つまり、世界を救ったのなら、その後にかかる責任もきっちり持てということなのだろう。

「すまなかったな……つい愚痴をこぼしてしまった。これからは気をつけるよ」

ヴァラルは反省した。そして、こんなことを二度と口にしなないと彼は誓った。

「いいえ、主様。私達のほうこそ主様の気持ちを考えずに自分たち

の考えを押し付けてしまいました。本当に申し訳ありません」

「いや、いいんだ。よく考えてみれば悪いことなんて全くないんだからな」

「一体俺は何をうじうじ考えていたのだ。王となり、その国は安泰そのもの。このどこに不満があるというのか。あの金銀財宝の山を見て俺は少々錯乱していたようだ。ガルムが殴ってくれて助かった。改めて正気に戻ることができた。」

「そういつていただけだけでも有難いです。それにしても……セラン！！いきなり主様にこれを見せるなんて貴方はどういう神経しているのですか？こんなもの、いきなり見せられたら誰だってびっくりします！！それにガルム！！主様をいきなり殴りつけるだなんて、何考えているんですか！！主様だから無事なもの、他の方だったらとっくに死んでますよ！！」

アイリスが切れた。

その後二人はアイリスにこっぴどく叱られていた。さすがの二人も一切の反論を許さず、ただ黙って頷いているしかなかった。これほど怒ったのはどうやら初めてのようで、二人は小さくなっていた。

……アイリスを怒らせないようにしよう。ヴァラル、ガルム、セランは心に刻み込んだ。

救われたもの

「で？どうしてこんなにあるんだ？」

「ええ、それはですね……」

セランによると、アルカディア内に流通する品物はヴァラル商会という組織が取り仕切っているのだという。最初は小さな店から始めていたらしいのだが、国が発展していくにしたがって徐々にその規模は拡大し、現在ではアルカディアで買い物をするならヴァラル商会が一番だと住人達から認識されているようだ。そのため商会のトップ、つまり総帥であるヴァラルにはこれだけの財産が溜まっていたのだという。

俺の名前を使って商売を始めたり、勝手に総帥になってたりと、色々突っ込みどころ満載の話聞いていたヴァラルだが、これまでのことを含めセランに一言言ってやりたかった。

お前、やりすぎ。

所変わってここはビフレスト区画にあるヴァラル商会の本店。

木造五階建ての建物はアルカディアと共に歴史を積み重ねてきたかのような貫禄を放ち、通りを歩いているものなら知らないものは誰もいないと言えるほど知名度の高い所だ。その商会の扉の前にヴァラルとセランは訪れていた。アイリスとガルムはそれぞれやることがあったようで、ユグドラシルとウトガルドへ戻っていったのだ。仕事を放り出してまでわざわざ駆けつけてくれる二人にヴァラルは別れる際に礼を言った。二人は当然のことをしただけだと当たり前のように答え、そのまま帰っていった。持つべきものは友だな。ついさっきの出来事を回想しながらヴァラル達は商会の扉をくぐった。

セランが急に訪れたということでは商会は大慌てになった。なにせ、ビフレストの責任者である彼が何の断りもなしにここへ訪れるのは極めて珍しいことだからだ。これで主も姿を現したらどんなことになるのでしょうか、と小声で言った彼を黙らせ、急遽通された応接室で二人はヴァラル商会の代表を待っていた。

「しかし、よろしかったのですか？わざわざ主自ら出向くことはなくとも」

セランがヴァラルに尋ねた。

「何を言っているんだ。城の宝物庫を見ただろう。あれほどの財を築いてくれたんだ、俺が礼を言わないでどうする？」

そう、今回ヴァラルがここへ訪れた理由は城にあった大量の財宝を寄贈してくれた人物へ感謝するためだ。あれを知った以上、そのまま放っておくわけにはいかない。二人はこの後の予定を全てキャンセルし、ヴァラル商会へやってきたのだ。まあ、その予定とやらもほとんど思いつきで決定したようなものばかりだったとセランは後

に語っていたが。

すると、小走りでこの応接室に近づく気配があった。きっとヴァラル商会の代表なのだろう。急な訪問だったが、この場所で仕事をしていたようだ。そしてあつという間に部屋の扉が開かれ、その人物が顔を見せた。

深紅と呼ぶにふさわしい赤い瞳、かつてこの地域を覆っていた雪原のような純白の髪、吸血鬼ヴァンパイアの男がセランたちの前に現れた。

ヴァンパイア。夜の闇に紛れ、生き血をすすり、様々な生き物に恐怖を撒き散らす存在。だが、この場にいるヴァンパイアは一般的に伝えられる存在と一線を画していた。

それもそのはず。遙か昔、存在が確認されていただけでも僅か数体だけという、ヴァンパイアの中でも特に稀少とされる存在、吸血鬼ヴァンパイア・ロードの真祖なのだから。

ヴァンパイアロード。夜の王と呼ばれている存在は、ヴァンパイアの突然変異種だと考えられている。なぜなら彼らは生き血をすする必要が無いからだ。また、その身に秘めた魔力も桁外れのもので、同族から畏怖の対象となっていた。そのため、彼らは必要以上にその存在を秘匿し、現世との関わりを断っていたのだ。

「セラン殿、急にこちらへお越しくださるとは珍しい。何か私達に依頼でも？」

椅子に座りながらセランに尋ねるヴァンパイアの男。ヴァラルにはまだ気づいていないようだ。

「いえ、ヘスラー。こちらの方が貴方に是非礼を言いたいとのことです。私はその付き添いです」

セラランが言ったのを確認して隣にいたヴァラルが姿を現した。突然現れた男にヘスラーというヴァンパイアは一瞬身構えたが、その髪と瞳のを見て驚愕の色をあらわにした。

「はじめまして、だな。俺はヴァラル。城にあった宝の数々がお前さんのおかげだということをしつき知ってたな。改めて感謝をしに来たんだ。もしかして都合が悪かったか？」

自己紹介をして彼は目の前の吸血鬼を見た。……ヘスラーとはどこかで会ったような気がする。しかしそれはいつのことだったか……ヴァラルはつい考えていた。

「いえ、決してそんなことは！お目覚めになられたとは聞き及んでいましたが、こんなに早く訪れていただけとは思っていませんでした。……それよりもヴァラル殿、私達からも礼を言わせてください！」

「礼？一体何のことだ？」

もしかして見覚えがあることと何か関係があるのか。ヴァラルはつい尋ね返していた。

「私達は貴方に命を救われたのです」

そういつて、ヘスラーは語りだした。

かつて、吸血鬼には幾つかの派閥があった。ヘスラーのような真祖

に対して好意的な感情を向ける擁護派、それとは逆に彼らを恐れ、排除しようとする過激派に大きく分かれていた。擁護派といっても真祖の力を利用し、自分達の道具にしようと呼策する吸血鬼が大勢いたため、実状としてはどちらも似たり寄りだっただろう。

その頃、彼は家族と共に人里はなれた小さな村で雑貨店を営んでいた。そこまで儲かる仕事ではなかったため、生活は貧しいながらもひっそりと暮らしていたのだという。けれど、大災厄が起こったことで状況は一変した。

どこから彼らの存在がばれたのかは分からなかったが、過激派が攻め込んできたのだ。統制の取れた動きを見せていたため、入念に準備してきたのだろう。彼らの動きに無駄はなかった。

大災厄の影響により、吸血鬼とヘスラーの双方は思うように戦うことは出来なかった、それでもヘスラーは真祖であるがゆえ、数で勝る彼らに妻と二人で互角に渡り合えた。

娘が人質に取られるまでは。

まだ幼く、力を上手く扱うことが出来なかった彼女は、物置に隠れていたところを過激派の一人である吸血鬼に見つかってしまったのだ。

それからは一方的に彼らの為すがままだった。四肢は折られ、体に

は無数の傷をじわじわとつけられた。ここで、強靱な回復力を持っていたことが仇になった。怪我が治ると同時に四肢は再び折られ、体を傷つけられていったのだ。怪我が治るとはいえ、受けた苦痛までは癒すことは出来ない。しかも、ヘスラーの魔力も無限ではない。徐々に回復力は落ちていき、三日三晩つづいた拷問は終わりを迎えた。

彼の魔力は底をつき、今にも力尽きようとしていたのだから。

辛うじて妻や娘には手出しはなかったが、二人はヘスラーがいたぶられる姿を常に見せ付けられることで絶望に顔を歪ませ、心が折れかかっていた。

そして彼らに止めを刺される直前にヴァラルが現れたのだという。いきなり人質の見張りである吸血鬼たちを倒され、慌てる彼らを見ながらヘスラーは意識はそこで途絶えた。けれど、最後に見た漆黒の髪と瞳は今まで忘れたことはなかったという。

「目覚めると、妻と娘の二人からあの時どのようなことがあったのかを説明してくれました。彼らを倒し、私を治療した後は妻に安全な場所を教え、去り際にヴァラルという名前を言ってその場を去っていったそうです」

まるで英雄譚を話すかのようにヘスラーは語り終えた。深紅の瞳がさらに赤くなっている。感激のあまり泣いているのだろう。その一方、ヴァラルは別のことを考えていた。

当時の俺に言ってやりたい。どこのヒーローものだよそれ。という

か、あのとときの吸血鬼だったのか。

助けたときは幼さの残る青年のような感じだったが、今見ると印象が全然違う。男らしさが増したというか、ダンディーな紳士になったというべきか。涙で顔がぐしゃぐしゃになっていたが。

「そして、セラン殿が私達を見つけてアルカディアへ移住しないかと誘ってくださったのです。今は主が眠っているが、国を造ることに協力してくれないかと。その主の名前を聞いたとき私はびっくりしました。それはそうです。家族を助けてくれた方だったのですから」

涙を拭きながら、彼は語った。

その後、ヘスラーたちはアルカディアで再び雑貨屋を経営していったのだそうだ。ヴァラルに恩返しをするためなのか、見る見るうちに雑貨屋は成長していき、ここまでの大規模なものになったという。

「私達にとって、ヴァラル殿は世界を救ってくれた英雄でもありません。ですが、それ以上に家族を助けてくれた恩人なのです。あときは本当にありがとございました！」

その言葉にヴァラルは揺らいだ。世界を救ってくれたからではなく、家族を助けてくれたというごく当たり前の感謝の気持ちに。

こうした感謝を受けたのはこれが初めてではなかった。だが、そのときのヴァラルは罪の意識に苛まれていたため、その言葉が彼の心に響くことはなかった。けれどガラムに殴られ、セランとアイリス

から思いの丈をぶつけられた今はその言葉を真正面から受け止める
ことが出来た。

ああ、彼らが無事で本当に良かった……

ヴァラルは心の底からそう思うことが出来た。

一人の天才

その後、二人は商會を後にしてヘスラーの家へ向かった。是非家族にも会ってくださいと半ば強引に連れて行かれたヴァラルだが、特に嫌な気はしなかった。むしろ、あの二人がどうなっているのか気になっていた。

ビフレストにあるヘスラーの自宅もまた立派な所であった。侵入者を一切通さない巨大な門を通り抜けると荘厳な庭園が広がっており、ヴァラルを驚かせた。ヘスラーによると、これは妻のエイミアと娘イリスの趣味なんだとか。それにしてもこれほどの規模になると維持するのも大変そうだ。いや、これほど豪華な屋敷だ。使用人それなりにいるのだろう。

入り口の扉をくぐると、何十人もの使用人が三人を出迎えた。妻のエイミアと娘のイリスは外出中のようでこの場にはいなかった。エイミアは商會の副代表であるため取引先との打ち合わせ、イリスは魔法学院にいるのだそうだ。

「おいおい、ここに住んでる連中に学校なんて必要あるのか？」

思わずセランとヘスラーに尋ね返した。何せアルカディアの住人は魔法のエキスパート達が大勢いるのである。そんな彼らは今更学校に通う必要性があるのだろうか。ヴァラルは疑問に思った。

「主……勘違いをされているようですが、全員が私達のように魔法を扱えるわけではないのですよ？」

「ヴァラル殿、捕捉しておきますとセラン殿は魔法学院の理事長でもあるのです」

「そうだったのか！？おいセラン、ちゃんと教えられるのか？」

「私はたまたま学院のほうに顔を出す程度です。実質、イリスが責任者ですからね」

「……………おい、ヘスラー。娘のイリスは今学院にいるんだよね……………」

「はい、学院長としてですが」

「……………」

当たり前の話ではあった。あれから何年の時が経ったと思っているのだ。

「どうやら主には多大な誤解があったようですね」

セランはアルカディア内における魔法学院の解説を始めた。

ビフレストにあるメルディナ魔法学院は単位制を採用しているのだという。初等部、中等部、高等部、カレッジクラスと別れており、必修単位を取得した後、新たな科目を選択し、取得していくという形だ。

初等部から高等部までの間はアルカディアに住んでいる者ならば誰でも入学資格があり、カリキュラムも希望の授業料もほぼ無料とい

つても過言ではないくらい安い。真面目に取り組むことで卒業することも容易だ。この時点でアルカディアで生活する上で十分な知識技能、経験を得ることが出来るが、希望者にはさらにその先がある。カレッジクラスだ。

カレッジクラスは卒業という概念は無い。これは、単位ごとに卒業資格が設けられているためだ。けれど、一つの単位を取得するだけでも十年以上かかるものがほとんどである。さらに設置科目が無数にあるため、全ての科目を制覇するのは事実上不可能だといわれていた。

「いわれていた？」

「カレッジクラスの科目を全て取得した人がいるんですよ。一人だけ」

メルディナ魔法学院に存在する一人の天才、それがイリスだという。彼女はカレッジクラスに入学すると同時に、日常生活に支障を及ぼさない範囲で取れるだけ科目をとっていった。一年ごとに行われる試験ではそれらをことごとく優秀な成績でパスし、周囲を驚かせた。何せ十年かかる科目を一年で取得したのだ、それも複数同時に。

この事態にさすがのセランも驚きを隠せなかったという。そのため、彼はその日のうちにメルディナ学院の教授に彼女を推薦したのだという。

教授になってからも彼女はカレッジに設置されている単位を堅実に取得していった。そしてヴァラルが目覚める二百年前、彼女は前人

未到のカレッジクラスの全単位取得という偉業を成し遂げたのだ。それを機に、セランは学院長職をイリスに譲り、そのまま引退しようと思っていた。

けれど、彼女は天才に胡坐をかいていたわけではなかった。学院長に就任した直後に、教授陣を抱きこみ、セランを理事長として学院に引き留めたのだ。ヴァラルはセランのことを悪戯好きの性悪悪魔だと思っているが、アルカディア内の彼の評価はそのようなものではなかった。ビフレストをアルカディア一の経済特区に仕立て上げた彼の手腕は凄まじいものがあるのだ。また、魔法の知識も天才であるイリス以上と目されていたため、彼を逃すことは学院の大きな損失であると考えた彼女は決して彼を学院から逃がすことはなかった。

「やれやれ、一体誰に似たのやら。その強引さ、まるで主を見ているかのようでした」

「いや、どう考えてもお前だろう。すまないヘスラー。娘さんをセラんに預けたばかりに……」

「だったらもっと早く目覚めればよかったです」

「無茶言つな」

そんな二人のやりとりを見ていたヘスラーは苦笑していた。家族を助けてくれた王がこんなに気さくな人だとは思いつかなかったし、セランも彼と会話するときとはとても楽しそうにしているのを見てプライベートの彼はこんなに面白い人だとは想像できなかったのだ。

この国が発展し続ける理由がわかった気がした。王は民を想い、民

は王を思う。簡単そうに見えて非常に難しいことを彼らは為し続けているのだ。まだまだ自分も精進しなければ……ヘスラーは決意を新たにした。

さっきのやりとりを延々と廊下で繰り返していたヴァラルとセランは、ヘスラーに案内された豪華な客室で夕食が出来るまで待つことになった。その間、二人は今までのことを振り返っていた。

「それでどうでしたか？ユグドラシル・ウトガルド・ビフレストをまわった感想は？」

出された紅茶と茶菓子を楽しみながらヴァラルたちは話していた。さすがにアルカディアアの商人の屋敷に出てくるだけあって本当に旨い。夕食が出来るまでのつなぎとしか考えていなかったが、茶菓子があつという間に減っていた。これはまずい、ヴァラルは自重し、セランの問いかけに答えた。

「凄く楽しそうだった。ここに来る前はあいつら結構大変な目に逢つてたんだらう？それが嘘に感じる位だ」

事実だった。お忍びが功を奏したのか、どこの区画でも住人達の間には明るい顔をしていて希望に満ち溢れていた。千年経過しているのだから何かしらの問題が発生してもおかしくはないのに、それが全く感じられなかったのだ。アイリスたちのおかげなのだろうが、それ以上にアルカディアに住む住人たちのモラルが異常に高い。どれだけ優秀なんだこの国は。

「それでも最初の頃は結構大変だったんです。各区画同士のいざこざがあつたり、この国を乗っ取るうとする不屈き者がいたり。前者の方は話し合いで何とかなるのですが、後者は私達三人が直々に

手を下しました」

「ああ……それは気の毒だったな」

勿論、セランやガルム、アイリスたちではなく、謀反を起こした連中にある。

「そんなことが多々あってこの国はここまで来たんです。どうです？この国に対して愛着は沸きましたか？」

「愛着も何も、俺は眠るときからここでずっと暮らす予定だったんだぞ。それで多少守るものが増えたただけだ。何の問題も無い」

「それは良かった。これでもまだ沸かないようなら、もっと凄いことを考え付く所でした」

「勘弁してくれ……今日は結構頑張ったんだ。少しは主に対して労いの言葉があってもいいんじゃないか？」

「これくらいでへばってもらっては困ります。主にはもっと色々なことをしてもらおう予定なので」

「セラン……ずいぶん見ない間に性格が悪くなったじゃないか。というか、さっきアイリスに叱られたばかりじゃないか」

「それはそれ、これはこれ、です。私はこれでも悪魔ですから。主こそ随分と心が小さくなりましたね。以前はあれほど威厳に満ち溢れていたというのに、嘆かわしい限りです」

「あの頃の話を持ち出すな。元々の性格がこうだったんだ。それを

無理に捻じ曲げていただけさ」

「まあ、その性格は追々直していくとして……そろそろ時間なので行きましようか」

「何だ？何かあるのか？」

大体こういふときのヴァラルの勘は当たる。嫌な予感だけだが。

「主、城ならともかく、商会の総帥である貴方がそんな格好で夕食に顔を出すだなんて考えられません。ヘスラーにはもう頼んでいますが、主には身支度をしてもらいます」

「どうせそんなことだろうと思ったよ……分かった。もうどこでも好きに連れて行くがいいさ」

諦めた口調でヴァラルが言うと、入り口からヘスラーの従者たちが突然現れ、ヴァラルを連れ去った。彼は浴場と思われる場所で強制的に入浴させられた後、衣装室でセランが着ているような貴族の服に着替えさせられた。

こういふ服というのは、質は確かに良いのだが少々堅苦しくて苦手だ。ヴァラルは独りごちながらそう思った。

ヘスラーの従者が案内してくれた部屋では、既に役者がそろっていた。セランにヘスラーそして、その妻のエイミアと娘のイリスがいて、エイミアとイリスの印象はそれぞれ異なる雰囲気を持っていた。

エイミアはアイリスと同じ美しい金の髪を持ち、鮮やかな赤の瞳でヴァラルをじっと見ていた。外見の年齢で言えば二十台の後半とい

ったところだろうか。白いドレスが彼女には非常に似合っており、彼女のおっとりとした雰囲気がこの場を和やかにさせていた。

一方イリスは両親から受け継いだのか、プラチナブロンドの艶やかな髪だった。外見は二十台の前半でエイミアと対照的に黒いゴシックドレスを着ており、真紅の赤い瞳でヴァラルのことを興味深く観察していた。二人共、十人いれば十人とも必ず振り返るくらいの美女だった。それも恐ろしいくらいに。

「ヴァラル様、お久しぶりです。お元気でしたか？」

エイミアがヴァラルに声をかけた。再会できたのが何よりも嬉しそうだ。

「ああ。エイミアの方こそ元気そうで良かった。あんなことがあった後だ、色々心配したんだぞ？」

「おかげさまで。今はこうして家族と三人で過ごさせて頂いています。それよりも、娘を紹介させてください」

そういつてヴァラルの前にイリスを引き合わせた。

「ヴァラル様、以前は、お父様とお母様を助けていたいただいて本当にありがとうございました。紹介に預かりました、イリスと申します。どうぞお見知りおきを」

そういつて、ドレスの裾をつまんで優雅にお辞儀をした。

「よろしく。セランから話は聞いたぞ、何でもカレッジクラスを卒業したそうだな。すごいじゃないか」

「そんなことはありません。あのとき私のせいでお父様を失いかれました。あれくらい当然のことです。それに……」

「何だ？」

「……何でもありません。お父様、そろそろ食事が来る頃では？」

「おお！そうだな。ささヴァラル殿、セラシ殿、どうぞこちらへ」

そうして、夕食会が始まった。

ヘスラーがヴァラルたちに簡単な挨拶をした後、食事が運ばれてきた。

出されてた料理は、材料である肉・魚・穀物、野菜・果物はどれも超一級品であることを伺わせ、それらが調理されることで一品一品がこの世のものとは思えない程、極上の味だった。

さらに、ヘスラーとエイミアのビフレストで実際にあつた商談、イリスの魔法学院での出来事をそれぞれが面白おかしく語り、時間は瞬く間に過ぎていった。

そうして食後のデザートを食べ終えて一息ついた後、ヴァラルは改めて口を開いた。

「それにしても、イリスが美人になったのは本当にびっくりした」

イリスと出会ったときはまだ十歳にも達していなかったはず。けれど、目の前にいるのは妖艶な美女。あまりの成長ぶりにヴァラルを

ひどく驚かせた。

「ヴァラル様、私達も成長するのですよ。ヴァラル様こそ、昔と全く変わっていないのでは？私としてはそちらの方が驚きです」

「俺はただ寝てただけだからなあ……それならセランの方が凄いいんじゃないのか？」

「主、今まで黙っていましたが私には小じわが出来ているのです……」

「へえ、どれどれ……って単に眉をひそめただけじゃないか！勘違いさせやがって！」

そんなやりとりを微笑ましげに見ていたエイミアが時間を確認するとヴァラルに尋ねた。

「ヴァラル様、セラン様。今日はもう遅いですし、こちらへお泊りになってはいかがですか？」

「おお、是非そうしてください！」

ヘスラーも続けて言った。

すっかり夜も吹け、外では星が輝いている。確かに、外へ出るのを躊躇う時間帯だ。けれど、

「ああ、大丈夫。俺達はそろそろお暇させてもらおうよ」

ヴァラルは断った。あくまでこれは視察なのだ。ユグドラシルやウ

トガルドでも城に戻って休んだため、ビフレストだけ鼻屑するわけにはいかない。

それに……イリスからなにやら変な感じがするのだ。ヘスラーとエイミアは善意で言っているのは間違いない。けれどイリスはそれを見越していたのか、ただ静かに紅茶を飲んでいた。

「そうですか……それでは迎えのものを出します。少々お待ちください」

ヘスラーは残念そうに部屋を出て行き、エイミアもまた二人に土産を持たせてくれるようで、そのまま厨房へ向かっていった。セランもヴァラルの服を回収しに行った。

そして部屋にはヴァラルとイリスの二人きりになった。

まるで誰かが仕組んだかのように。

「ヴァラル様、どうして断ったのですか？」

「分かってるくせに何を言っているのだから」

「あら残念。泊まっていただければそれは良い夢を見ることが出来ましたのに」

「生憎千年眠っていたのでね。夢はもう飽きるほど見た」

「ならまたの機会にしますか。幸い私達は寿命というものは存在しないみたいなので」

「そうしろそうしろ。子供はもう寝る時間だ」

「もう……そうやって子ども扱いして……もしかして、そちらのほうがお好みとか？」

「違うわ！」

結局のところ、イリスはヴァラルと二人っきりで話をしたかったようだ。何せ幼い頃に颯爽と現れたヒーローだ。憧れが時が経つ内に惹かれるのも仕方が無い。そのため、セランたちに少し時間をくれるよう頼んだらしい。全く、そんなまどろっこしいことを。ヴァラルは女心とやらを全然わかっていないのであった。

短い会話の時間は終わり、迎いの馬車がやってきた。ヴァラルの着ている服はそのまま進呈されることになり、いよいよヘスター達との別れが近づいてきた。挨拶を済ませ、これから出ようとするときにイリスがヴァラルにずっと近づき、

「また来てね、ヴァラル」

耳元で艶めかしく囁いた。

……イリスのやつ、最後まで猫かぶっていやがった。

ヴァラルの決意

ビフレストを訪れた数日後、ローレン城の玉座の間はかつてない熱気に包まれようとしていた。千年の長き月日を経て新たな王が誕生するのだから、盛り上がらないはずがない。

そしてその中にはヴァラルたちの見知った顔もあった。

「アイリスとヴァラルはまだ来ないのか」

老剣士の姿をした彼は聖獣リヴァイアサンのフィリス。彼もまたこのローレン城へ招待されていたのだ。しかし彼はイライラしていた。彼は他の者達とこうして会うのはどうも苦手なのだ。

「フィリス殿、落ち着きなされ。彼らが来るまでまだ時間はある。急いだところでどうにもなりませんまい」

「……うむ、そうだな。すまなかつたなマルサス」

フィリスは謝罪し、腕を組み、目をつぶることでじっと彼らが来るのを待つことにした。

落ち着いた男の声でフィリスを諭したのは古代龍エントウのマルサス。騎士の格好をした彼は内心、動揺していた。

ガラムと話すことは何度もあったのだが、同格の存在であるフィリスとこうして会話するのは初めてのことだったのだ。

「フィリスにそういいながらマルサス、お前さんも随分きよろきよ

ろしているようだ？」

マルサスの心を読んだかのようにエドが話かけた。彼もまた、ドワーフの代表の一人として呼ばれていたのだ。

「そ、それは……」

「安心しろ。わしも震えておるわ。考えてもみろ、アルカディアは千年の歴史を持ちながらもいまだ正式な王は誕生していなかったのだ。それに、ユグドラシル、ウトガルド、ビフレストに存在する種族が一同に介しているのだ、緊張しないほうがいい」

そういつてエドはマルサスを目で促した。すると妖精王セイランと幻獣の長フェンリルがヴァラルについて語り合っていた。アイリスが見込んだ男だとか、フィリスと旧知の仲であるとか、一つ一つの内容が途方も無いものだが大体あっているとところがまた凄い。

基本的にユグドラシル、ウトガルド、ビフレストの住人は最低限の交流する機会はあるのだが、このような大規模なものはいままでなかった。アイリスやガルド、セランが有能すぎるため、彼らを仲介することで大抵のことがどうにかなってしまうのだ。

ここにいる種族は人の姿を取っていて一見分かりにくいけど、それでも一人ひとりが強大な力や魔力を持っていることはすぐに分かった。

空気がまるで違うのだ、ここは。

「随分と大物達が集まっているのだな……」

マルサスはそれらを呆然と眺めていた。

「しつかりしろ、マルサス。お前さんだって相当注目されているぞ？舐められないために、もっと堂々としなければ。仮にもエンシェント・ドラゴンの王なんだぞ」

エドはマルサスを叱咤激励していると、魔族の男に声をかけられた。その男はビフレストの魔法研究所に勤める職員のように、エドの鍛冶技術の高さに興味を引かれ是非話を伺いたいとのことだ。エドもまた、男の語る内容に好奇心を刺激されたのか、二人はそのまま会話に没頭した。

「さすがだな、エド。私も見習わなければ」

マルサスの視線に気がついた妖精王と幻獣の長がこちらに近づいてきたのを見て彼は気持ちを切り替えた。

「いやはや、これはまた……」

ヴァンパイア・ロード
真祖のヘスラーとエイミアもまたこの光景に驚く一人であった。大勢での会食を幾度も経験していた彼だったが、それでもここまでのものとなると気後れしそうになった。

こうして全区画の種族の代表が揃うのは本当に久しぶりだ。尤も、その頃は国としての体裁がやっと整ったときの話で、人数も大分少なかったが。

「あなた、セラン様がお見えになっていないようですが」

「エイミア、セラノ殿はきつとヴァラル殿の所へいるのだろう。何せ、今日は彼の夢が実現する日なのだから」

「そうでした。よく考えてみれば当たり前のことでしたね」

そう、元々アルカディアという国造りはセラノが最初に提案したのだとアイリス、ガラムから以前聞かされていた。セラノは冷静沈着な性格だが、目的のためならあらゆる手段を用いても成し遂げようとする情熱的な面を持つ。その彼が願った夢なのだ。時間はかかったが、ようやくその夢が叶おうとしているのだ。ここへいるはずが無い。

セラノは物事を一人で解決しようとする癖がある。そのためヘスラは危なっかしい彼を影ながら支えてきた協力者の一人なのだ。

「おや、そういえばアイリスはどこへ行ったのだ？」

「あなた……」

少し抜けたところはあるが。

ヴァラルたちは城の一室に集まっていた。これから始まる式典のた

めの最終確認を行っていた。後は準備が整うのを待つだけである。

「しかし、国の王様ねえ。俺は別に良いんだが、他の種族はどうなんだ？出会った連中は皆良い奴だったが、平気なのか？」

「私達が長年主様のことを語り続けてきたので、その辺りは大丈夫です。むしろ主様に興味津々といったところでしょうか」

「ヴァルは言わば生きた伝説だからな。俺もよく質問攻めにあっただぜ」

「御伽噺に出てくるような英雄がこの世に現れるだなんてさすがに想像できませんからね」

確かに、千年前の男が目覚めるといふのは信じがたい話だろう。

「それを成し遂げる辺り、ヴァラル様はさすがといたしますか」

アイリス、ガルム、セラン、そしてアイリスが口々に言った。

あの日からアイリスは毎日この城へ来るようになった。まだ数日しか経っていないのだが、すっかりこの場に馴染んでいた。仮にも各区画の責任者、それを正面から相手取るとは早々出来ることではない。さすがだな、アイリス。

けれど、たまにセランが二人いるような錯覚に陥ることがヴァラルにはあった。そのため、気苦労も加速度的に増えていく彼であった。

「お前たちの方がよっぽど化け物じみている気がするけどな……」

ヴァラルにとっては千年生き続けていることの方が信じられないことではあった。だが、アルカディアの住人の多くが半永久的な不老不死に達しているため、ヴァラルの認識と彼らの認識にずれが起きているのだ。

「っとそろそろ時間じゃないのか？」

ヴァラルが時間を確認した。そろそろ四人は戻ったほうがよさそう
だ。

「時間が経つのは早いですね主様。それでは一旦失礼します」

「ああ、また後で」

「ヴァル、緊張してびびるなよ？」

「お前がな、ガル」

「黒騎士が出迎えに来ます。逃げないでくださいよ？」

「分かってる。何回目だ、このやりとりは」

「ヴァラル様、私達家族も楽しみにしていますね」

「イリスもな。こんなことはそう何度もあるものじゃないからな。ヘスラーたちにもよろしく言っておいてくれ」

アイリスたちはヴァラルと簡単なやりとりをした後、部屋を出て行った。

後に残されたのは、ヴァラル一人だけ。彼は短い時間だが、これまでのこと、そしてこれからのことを考えていた。まだ目覚めてから十日もたっていないが、ここがいかに素晴らしいところだということろを改めて実感していた。そしてこの国のために一体自分は何が出来るのだろうかとヴァラルはずっと考え続けていた。

アルカディアの王として。

そして一つの決意が彼の中で生まれると同時に部屋の扉が開かれ、黒騎士と共に部屋を後にした。

玉座の間へ到着すると視線が一斉にヴァラルに集中した。しかし、誰一人騒ぎ立てる者はおらず、厳かな雰囲気にもまれていた。ヴァラルは視線をやりすごし、そのまま玉座へ歩いていった。

戴冠式は滞りなく進行した。セランたちが綿密に計画していたおかげなのか、アクシデントの一つも起こらなかった。そして、ヴァラルの前にドワーフたちの持ちうる全ての技術を投入した世界でただ一つの王冠が差し出された。

そのとき、ヴァラルは言葉を発した。

「皆の者！私はかつてこの地で眠りについた！そのとき、ここは草の根一本生えていなかった不毛の大地であった。けれど、長年の眠りから覚めるとそこはアルカディアという名にふさわしい所だった！これほどの国を造り上げことに心から感謝をする。だがこれで終わりではない。私が目覚めたからには、さらにこの国を発展させることをここに誓おう。そして歴史の闇に消えた黄金の時代を再び取り戻し、皆には未来永劫の繁栄を約束しよう！」

そう語り終わるとヴァラルは王冠を被った。一瞬の静寂の後、割れんばかりの歓声が沸き起こった。凄まじい彼らの魔力を当てられ、気絶するものが続出したほどである。

失ったものは取り戻せば良い。そう結論付け、ヴァラルは過去の自分と決着をつけた。

この日を持ってアルカディアに新たな王が誕生した瞬間でもあった。

ここはビフレストにあるセランの屋敷。屋敷というよりも宮殿に近い広さを誇っているが、中は意外と質素だった。セランが豪華にすることを嫌ったのだろう。城もそのままにしておくよう指示しておけばよかったと、ヴァラルは今更ながら後悔した。

その後はとにかく大変だった。三人の仲介があったとはいえ、延々と各氏族の長たちと話すことになり、途中で休憩をする余裕など一切無かったのだから。

結局ヴァラルが一息つくことが出来たのは、屋敷で行われた晩餐会が終了してしばらく経った後のことで、彼は現在テラスに出て一休みしていた。夜の風が彼の熱い体を冷ます。ヴァラルはこうやって外に出るのが好きだった。

すると、アイリスとガラム、セラン、そしてイリスが駆け寄ってきた。少し心配をかけてしまったようだ。五人はテーブルの近くに設置されている椅子に座り今日の出来事を振り返った。

「主様、いかがでしたか？このアルカディアの皆さんは」

「ああ。良い奴ばかりだった。少々畏まりすぎなところがあったけどな」

「当然だろう、あんなことを言ったんだからな」

「私もびっくりしましたよ。いきなり言い出すのですから」

「ですがヴァラル様、私はとても感動しました」

「ありがとな、イリス。それにお前達ばかりにお膳立てさせるわけにはいかないからな、驚いてくれただけでも俺は満足だ」

「まんまと乗せられたわけですか……それで？主はこれから如何なされるのですか？私達としてはこの後色々やっていたただきたいことがあのですが」

セランが切り出してきた。いい機会だ、四人には話しておこう。

「俺はアルカディアを出ようと思ってる」

旅立ち

ヴァラルがそう答えた途端、四人は愕然とした表情を浮かべた。

「ヴァラル様……何かこの国に不満があるのですか？」

イリスは苦々しく言った。

「いや、むしろ逆だ。満足しているからこそ、国の外を見てみたくなかった」

この国は既にヴァラルがいなくても十分に機能している。今日の晩餐会で様々な種族の王や長と話し合ったが、それぞれが自分の役割をきちんと果たし、それをイリスたちが纏め上げることで強固な体制を築いていた。つまり、留守を安心して任せられるのである。

「そんな！どうしてわざわざ主様が行くのですか！？私たちが代わりに行けば済む話ではないですか！」

……自分のいつていることが理解できているのだろうか？この娘さんは……

「アイリス、仮にお前が外に出たとする。だがユグドラシルはどうなる？セイランやフェンリルから聞いたぞ、随分慕われているじゃないか。そんな彼らをどうするつもりなんだ」

「そ、それは、誰か代わりの者を……」

アイリスは戸惑うように言った。

「どうやって選ぶ？ハイエルフの中から選ぶのか？だが、そうなる
と他の種族が黙つちやいないぞ。彼らも皆優秀だ。それを無視して
ハイエルフだけ優遇するわけにはいかないだろう」

それに、誰かから選抜したとしても上手くいくとは思えない。国造
りに大きく貢献したアイリスだからこそ、ここまで支持されている
のだ。不老不死に近い存在のため、老いて仕事をやめるということ
も無い。セランのときもそうだった。アルカディア、いや、優秀す
ぎるがゆえの弊害だった。

「う……ううう」

やばい、アイリスが睨みつけている。ちょっときつく言い過ぎたか
？だが、ここで引くわけにはいかない。アルカディアの未来がかか
っているのだから。

「俺からもいいか？ヴァルの言いたいことは大体分かった。アルカ
ディアを発展させたいというあの言葉が嘘じゃないこともわかった
だが、外に出る必要があるのか？この国に残っていても色々なこと
ができるんじゃないか？」

ガラムが真面目な顔でヴァラルに質問した。いつになく真剣だ。

「俺はフィリスと話していて一つ疑問に思ったことがある。リヴァ
イアサンであるフィリスがいて、何故アルカディアにイグニスとケ
イルがいない？」

イグニスとは聖獣イフリートのことで、ケイルとは聖獣タイタンのことだ。

「それは……外の世界の聖地で暮らしているんじゃないのか？」

「だが、フィリスの昔住んでいた聖地はなくなっていたそうじゃないか。それでここに来たと」

「なら、俺達みたいに新しく聖地を作ったんじゃないか？」

それは考えにくい。この場所はかつての聖地以上に魔力が満ちているのため、聖獣である彼らならいずれこの場所に気づいたはずだ。

「なあ、セラン。外の世界で聖地を作り上げるまでにどれぐらいの時間がかかるんだ？」

「そうですね……フィリスはここで三百年かかって作りましたから、外の世界ではその五倍以上かと。それに魔力孔を探すだけでも相当時間がかかるかと」

魔力孔というのは魔力が間欠泉のように噴き出しているところだ。けれど、地表に流出しているだけでもごく僅かであり、その大半が地中、海中奥深くに存在するため、見つけ出すにもそれなりの苦労がある。

「聖地を作るのにはこれだけ時間がかかるものなんだ。ガラム、前はどれくらいかかった？」

「アドバイスを貰ってだからな……四百年くらいだ」

「アルカディアでさえこれだけ時間がかかったんだ。外の世界で聖地を作ったのは考えにくい。それなのに、この場所にはいない。ということとはだ、二人の身に何かあったのかもしれない」

「おい、さすがに考えすぎじゃないのか？だってあいつらだぜ？そう簡単にやられるとは思えないんだが」

「そういう意味で言ったわけじゃない。だが、それなりの理由があるはずだ。それを俺が確認しに行くんだ」

そして、出来ることならアルカディアの発展のため二人をこの地に引き入れたい。それが彼の本音だった。

「……」

ガルムは目をつぶり何かを考えているようだ。

すると、セラン・イリスの二人から反論が上がった。

「主の言いたいことは分かりました。それならば聖獣の捜索のため、軍や私の部下を派遣しましょう」

「そうです。ヴァラル様が直接動く必要はありません。ここは私達にお任せください」

そう来たか……

「セラン、イリス。勘違いしないで貰いたいのだが、俺は何も二人を探すためだけに外に出るわけじゃないんだ」

「何故です？では一体何のために行くのですか？」

セランは尋ね返した。

「その前に確認だ。外の世界に出たのは一体何時が最後だった？」

「三百年ほど前です。第一に同胞達がアルカディアには集まったこと。第二に外の世界で戦が確認されたためです。そして最大の理由が、ここが発見されることで主の眠るアルカディアが荒らされないようにするためです」

三百年か……結構長いな。

「分かった。それじゃあ、俺の意見を言わせてもらおう。まず、第一に軍やセランの部下を動かすほど切羽詰っていないからだ」

三百年経っても外の世界から使者の一人も来ない以上、この国はまだ見つからないというのが妥当だろう。それならば、アルカディアのことはできるだけ秘密にしておきたい。

「第二の理由として、アルカディアの王として直接外の世界を見るためだ。視察といったほうが良いのかもしれないな。今はここが見つかっていないから何もなくても大丈夫なのかもしれない。けれど、いずれ誰かが俺達の存在に気づくはずだ。そのときになって考えるよりも。今のうちに見聞を広めようと思ったただけだ」

そう、今のうちに外の世界を見ておくのが彼の最大の目的だ。彼はアルカディアがさらに発展するために外の世界との交流が不可欠になると確信していた。そのため、セランの部下からではなく、直接自分の目で確かめたかったのだ。

「そつですか……」

「……」

四人は鎮痛な面持ちでヴァラルを見ていた。

少しまずいな……ヴァラルはフォローに入った。

「俺が目覚めるまでここを守ってくれたんだろう？本当にありがたいと思ってる。なあに、戦争をするわけじゃないんだ。危なくなったら逃げて帰ってくるさ」

「主様を倒せる者がこの世界にいるとは考えられません！！」

アイリスが

「ヴァラル様を傷つけるのなら、私が直々に引導を渡してあげます……」

アイリス、怖い。

「というかそいつら死ぬんじゃないのか？ヴァルを本気にさせたらかなりやばいし」

「主はそういうところ、本当に容赦ないですからね……やりすぎないでくださいよ？」

ガラムとセラも俺のことを何だと思っているんだ……

結局四人は渋々ながらも納得してくれた。

ヴアラルの決意を皆に話した後の一週間は国を挙げてのお祭り騒ぎが続いた。ユグドラシル、ウトガルド、ビフレストの各区画の種族が入り乱れ、その結果ヴアラルも目を回すほど忙しくなり、他のことを考える余裕は一切無かった。

そしてその二日後、ようやく一段落したところで、彼は準備を始めた。

「ウトガルドにて」

「エド、邪魔する」

ヴアラルはエドの工房に足を運んでいた。武具の材料が揃ったためだ。

「おお、お前さんか。話は聞いたぞ。外の世界へ出るそうだな」

「ああ。だからその前にエドに作ってもらおうと思ってな」

祭りの最終日、ヴアラルがこの国を出ることを皆に伝えた。大混乱が予想されるかと思いきや、意外にもあっさりと受け入れられた。後で聞いた話なのだが、四人が事前に根回しをしてくれたようだった。本当に凄いな、お前達。

「ほう、それでは材料を持ってきたということだな」

「ああ、これだ」

そういつてヴァラルは彼に見せた。

「……これは……よく手に入ったな、こんなもの」

エドが驚いた顔でしげしげと眺めていた。

「まあな、持つべきものは友というやつだ。それで？何とかなりそうか？」

作って欲しいものは事前に伝えてある。後は、エドがこれらを扱えるかどうかだ。

「当たり前だ、わしを誰だと思っておる、一ヶ月待て。その間に最高のものを作ってみせるわ」

彼は自信満々にそう答えた。

「期待してる、エド」

「おう、楽しみにしておけ」

詳細を二人で話し合った後ヴァラルはエドの工房を後にした。今日中にビフレストとユグドラシルも回らなければならないため、彼は少し急ぐことにした。

くビフレスト・ヘスターの屋敷にてく

「……ふむ、わかりました。それで、いつまでに用意すれば？」

ヘスターは羊皮紙に書かれてあるアイテムリストを見ながらヴァラルに尋ねた。

「そうだな、ここを出るまで一ヶ月以上あるからそれまでに頼む。金は宝物庫にある奴で大丈夫か？」

「いえ、御代はいただきません」

何を言っているんだ。書かれてあるものはアルカディアで流通している一般的なアイテムばかりだが、数が多い。そのため、合計するとかかなりの金額になる。それを受け取らないとは何を考えているんだ？

「おい、俺が総帥だから気を使っているのか？それは商人としてかなりまずいんじゃないか？」

「いえ、そういうわけでは。ただ、私個人としてお願いがあるので」

「なんだ？」

「娘を貰ってやってください」

「おい」

「とういのは冗談で」

「脅かすなよ」

彼は口ではそういつていたが、ヴァラルはそれが冗談に聞こえなかった。とういかセランに影響されすぎだ、ビフレストの連中。

ヘスターは語りだした。かつて彼には魔族の友人と家族ぐるみの付き合いをしていたという。けれど、彼とは大災厄の日以降会えないという。セランにそのことを相談し探してもらったのだが、結局見つからなかったという。そのため、ヴァラルには出来る範囲で良いので彼らの安否を調べて欲しいそうだ。

「わかった。善処することにする。ところで、その魔族の名前は？」

「彼の名は……」

「ユグドラシル」

「なあ、これってかなり貴重なものじゃないのか？」

ヴァラルはあの後、ユグドラシルを訪れていた。アイリス曰く、渡

したいものがあるとのこと。そこで彼はアイリスから稀少なハイエルフの霊薬を大量に貰っていた。これはアルカディアに出回っている回復薬のエリクシルよりも数段効果が高いものであり、聖獣のガラムやフィリスが重傷を負ってもすぐに完治するというという優れたものだ。とはいえ、エリクシル自体もそれなりの回復力を持つのだが。

「主様の身に何かあるほうが問題です！」

「そ、そうか。なら有難く受け取っておく。すまないな、あんまり長くいてやれなくて」

「そういうことなら今すぐここへ残るよう言っして下さい！」

「それは無理だ」

「うう……」

アイリスが呻いた。最近このようにしてやたらとヴァラルを引きとめようとしている。すまないな、アイリス。お前の気持ちは嬉しいが、それでもこれは俺にしか出来ないことなんだ。

「その代わりといっては何だが、明日は空いているか？よければ二人でどこか出かけないか？」

ヴァラルは彼女のご機嫌取りをすることにした。

「本当ですか！？……はっ！いけない！こんなことで騙されませんよ、私は」

「そうか…ならイリスでも誘うことにするか」

「まっ待つてください！行きます！行きますから！」

アイリスは陥落した。

くとある日のローレン城にて

「ねえヴァラル、本当に行くの？」

窓が開けられ、ツインテールの彼女の髪が風に揺れている。その一本一本が輝きを持ち、まるで絹のようだ。

「ああ、もう決めたことだ」

ヴァラルは断言した。

「お願い、私も連れて行って。もうあの頃の足手まといだった私じゃない。きつと役に立ってみせるから」

イリスは旅の同行を申し出た。彼女のようなこと以前にも何度もあった。それもアルカディア中から数え切れないほどに。しかし、ヴァラルは断った。一回その申し出を受けてしまうときりがなくなるからだ。それにイリスの場合、メルディナ魔法学院の実質的な責任者だ。アイリスたちのようにおいそれと連れ出すわけにはいかないのである。

「駄目だ。そんなことよりさっさと家へ帰るんだ」

「また子ども扱いして……私ってそんなに魅力ない？」

イリスがまたとんでもないことを言い出した。

「違う。イリス、今何時だと思っている？」

しかし、ヴァラルはそれをスルーした。

「一時でしょ？」

「夜の一時だ。親父さんたちも心配しているだろう、早く戻るんだ」

「お父様とお母様の許可は取ってある」

「……」

ヘスターめ、やはりあれは本気だったのか。

「というわけで……むぐ」

ヴァラルは獲物を狩るようにじりじりと寄ってきたイリスの顔にクツションを押し付けた。

「仕方ないな……ほら、何もしないのならここで寝ても良いぞ。何かしたら叩き出す。さてどうする？」

「分かった。今日のところはおとなしく引き下がることにする」

「それと朝になったらすぐに帰ること、良いな？」

「んふふく分かった」

そうしてヴァラルのベッドに彼女がもぐりこんできたと思ったたら、あつという間に眠りこけてしまった。

やはりまだまだ子供だな。ヴァラルはそう思って静かに眠り始めた。

そしてついに出発の準備が整った。

ヴァラルが目覚めてから二ヶ月の月日が経った頃のことである。

早朝、アルカディア内に設置されている転移魔方陣の前で五人は集まっていた。

「ヴァラル様、何かあれば連絡を。すぐに駆けつけます」

「分かったよ、イリス。そうならないよう気をつけることにする」

「ヴァアル、あんまり暴れるなよ？」

「主の持つその強大な力を利用しようとする者が必ず現れるでしょう。」

そのことに注意してください」

「了解。ガラムにセラノ、忠告受け取っておく」

「主様、これを」

「これは……ケリユケイオンなのか!？」

アイリスが差し出したのは一本の杖である。かつて、ヴァラルが愛用していた杖で、とうの昔に魔力を失っていたはずのものだ。

「私たち四人からの贈り物というわけです」

「そうだけ。全く、直すのに苦労したぜ」

「……こんなときにまで驚かせるとは」

ヴァラルはその杖を大事に大事に”しまった”

そして彼が転移魔方陣の上に移動すると、魔方陣が眩く輝き始めた。

「必ずここへ帰ってくる!留守の間ここをよろしく頼むぞ!」

光が辺り一面を覆い、それが徐々におさまったとき、ヴァラルはアルカディアから姿を消した。

アールヴリール大陸に新しい時代の風が吹いた瞬間だった。

絶対強者

アールヴリール大陸には現在、四つの国が存在している。

冒険者ギルド発祥の地ともされるトレマルク王国。

魔法研究において最先端を誇る魔法皇国ライレン。

広大な領土を持ち、軍事力では他国を圧倒するバルヘリオン帝国。

数多くの信徒を抱え、各国に多大な影響力を持つ宗教国家アルン。

その他に、魔物や亜人の生息が確認されている暗黒の地ニーベンスがある。

トレマルク王国にあるフェンバルの森、そこにヴァラルはいた。

「アルカディアの周りはこういう場所だったのか」

彼は周囲を確認した。朝露が草に滴り落ち、木の香りが森の全域を濃密に包んでいる。アルカディアとは全く違うところであると彼はしみじみと実感していた。

フェンバルの森は冒険者の中で迷いの森として恐れられている。そ

れは、奥へと進んでいった者たちがまるで神隠しにあつたかのよう
に二度と戻ることが無いからだ。その実態はこのあたりに住む魔物
がひととき強く、大抵の者ではあつという間に殺されてしまうから
であるのだが、死体を確認するものが誰もいないため、神隠しに遭
うと誤解されているのだ。

尤も、この森を抜け、メクギリス山脈を越えることが出来たのなら、
そこは理想郷アルカディアが広がっているのだが。

けれど、それはあくまでも奥地に進んだ場合のことであり、比較的
浅い場所であるならば良質な薬草が採取できるところでもある。そ
れでも魔物には十分気をつけなければならぬが。

「ここはメクギリス山脈を覆う森というわけか。成る程、こつも深
いと誰も寄り付かないわけだ。さてと……」

ヴァラルは袋から地図を取り出し、これからどうするかを考えてい
た。この地図はセランの部下たち作成したもので恐ろしく詳細に書
かれていた。暗黒の地であるニーベンスまでは無理だったものの、
ヴァラルにとってはかなり重要なものだ。さすがはセラン、抜かり
が無い。

「近くに村があるな……とりあえずそこまでいってみるか」

彼は進むべき方角を確認しフェンバルの森の近くにある小さな村を
目指すことにした。

「しかし、こつも生い茂つているとどこにいるか分からなくなるな」

森をかき分けて移動中にヴァラルは呟いた。

当然ではある。彼がさっきいたところはメクビリス山脈と森との境界部分、いわば最深部になる。そこから森の外へ出ようとするのだ。地元の人間が聞いたらびっくりするだろう。

「ま、こうして自然が元に戻っていることを確認できるし、それはそれで良いんだが」

そうしてヴァラルは歩き続けた。森の外へ出るために。

けれど、旅はそう上手くいくものではなかった。常に何らかのアクシデントが発生するのが当たり前なのだ。

「うわあああ！！！」

ヴァラルが森の木陰で休憩をしていると、悲鳴が聞こえてきた。男の声で、なにやら穏やかではない事態が発生しているようだ。

彼はすぐさま辺りの気配を確認した。すると、近くで二つの気配があった。恐らく、その一方がさっき悲鳴を上げた男のものなのだろう。

「よし、確認するか」

彼はそういつや否や声が聞こえてきた場所へ急ぐことにした。

ヴァラルがそこに到着すると、一人の男が大きな猪のような魔物に襲われていた。

男はここへ薬草を取りにきたのか大きな袋をもっており、腰を抜かしていた。短剣を持っていたがそれを握り締める手はぶるぶると震えている。恐らく、今までこのような魔物と遭遇したことが無いのだろう。

猪の魔物の方は大きな二本の牙を持ち、頑丈そうな毛皮を持っている。男の持っている武器では傷一つつけることは出来ないだろう。さらに、その魔物の目は血走っており、フーフーと荒い息を立てて今にも襲い掛かってきそうだ。目の前の人間を完全に敵とみなしているようだ。

「おい、大丈夫か？」

ヴァラルは魔物を一瞥しながら男に近寄り、話しかけた。

「ひっ！あ、あんたは！？」

男は森の中から急に現れたヴァラルにびっくりしていた。けれど、同じ人間がいるということでも少し安堵したようだ。

「俺はヴァラル。あんたの悲鳴が聞こえたからここへ来た。それよりも立てるか？」

そういつて男をグイと引つ張り上げ、無事を確認した。特に目だっ

た怪我は見当たらない。多少すり傷があるが、走ることに問題ないだろう。

「お前はとりあえずここから逃げる。魔物は俺が何とかする」

「あ、あんた冒険者の人なのか？」

冒険者とは何だ？聞きなれない単語にヴァラルは首をかしげたが、今は尋ね返す暇はない。

「……まあそういうものだ。とにかく早く行け、こいつをこれ以上刺激するな、できるだけそっと逃げる」

「す、すまない」

男はその場からよろよろと立ち去っていった。何とか森の外へ逃げてくれれば良いが、ひとまずは目の前の魔物をどうにかしないと行けない。

「……さて、目覚めてからこういったことは初めてだからな。体が鈍っていないか少し心配だ」

男がいなくなると彼はスイッチが切り替わったかのように態度を豹変させた。

ヴァラルは腕を片方ずつ回し、目の前の魔物と対峙した。けれど腰に差している剣を引き抜くことはせず、そのまま立っていた。どうやら素手で相手をするつもりようだ。そしてかかってこいとばかり

りに猪の魔物に指で挑発した。

舐めるなど魔物はヴァラルへ突進していった。四本の強靱な足で彼に迫り、大きな二本の牙が彼に襲い掛かった。周辺の木々をなぎ倒すその威力は、巻き込まれればただではすまないだろう。しかし、衝突すると思われた瞬間、唐突に魔物の動きは止まった。魔物は四肢を踏ん張り懸命に前に進もうとする。だが、その努力もむなしくその体はびくともしなかった。わけの分からない出来事に混乱していた魔物はその光景に驚きのあまり目を見開いた。

ヴァラルが猪の魔物の鼻先を片手で受け止めていたのだ。

その場から一步も動かずに。

魔物は信じられないかのように激昂して牙を振り回した。こんな馬鹿なことがあるか、と。しかしヴァラルはその瞬間、間合いからふっと離れた。手ごたえが感じられなかった魔物は再び彼をにらめつけていた。さっきの怯えた男のことはすっかり忘れ、目の前のヴァラルに向けて敵意を叩き付けた。生かしては帰さぬと言わんばかりに。

「おいおい、こんなものなのか？」

その一方、猪の魔物の敵意を軽く受け流しヴァラルは呆れの混じったため息を吐いていた。彼にとってもこれは計算外だったようだ。

魔物のあまりの弱さに。

再び猪の魔物がヴァラルに向かって突進してきた。さっきよりもさらに速いスピードだ。けれど彼は難なくそれを避け、かわされた魔物はすかさず方向転換をして再び襲い掛かった。すると今度はまた片手で受け止められてしまった。ふと、ヴァラルの顔は一瞬訝しげになった。本当にこれが全力なのかと確認するかのように。

そんなことが何回も行われることで猪のような魔物も、目の前の男が明らかに異常な存在であることに気がついたようだ。自分がまるで試されているかのような、そんな錯覚に陥るまでに。

けれど、その錯覚は正しかった。

そもそもヴァラルは目の前の魔物を殺そうと全く思っていないのだから。

そしてヴァラルは魔物の力量を把握し終えたかのように目の前で伸びをした。ウォーミングアップは終わったようだ。

「うん。さてと、ちょうど良く体も暖まったことだし、今度はこっちから行かせてもらおうぞ」

突然、魔物の目の前にいたはずのヴァラルの姿は掻き消えた。そして彼は疾風の如く走り出し、魔物との距離を一気に縮め、鼻っ柱に拳を叩きつけた。

それはまさにつかの間の出来事であり、魔物の命は一瞬にしてかき消された。

そのとき、何かが爆発したかのようなすさまじい轟音が森全体に響き渡る。森全体が震えたかのようなその衝撃はヴァラルと魔物を中心に広がっていき、丁度森の外にたどり着いた男の耳にも聞こえてきた。

「なっなんだ!?!」

あわてて男は森の方へ振り返った。すると、鳥達がギャアギャアと騒がしく一斉に空へ羽ばたいていった。

「一体、何があったんだ……」

男は呆然と森の奥を眺めていた。

「しまった……やりすぎた……」

ヴァラルは後悔していた。

目の前に広がるのは物言わぬ死体と化した猪の魔物だ。けれど、その死体には大穴が空いていた。それは大型の大砲を至近距離でぶつけたかのような巨大なものだった。

ヴアラルは目の前の魔物を気絶させようと思い、こつんと殴りつけたつもりだった。けれど、その結果は見ての通り大惨事になっていた。

「すまん、といつても聞いちゃいないか……」

ヴアラルはひとまず目の前の死体を片付けることにした。この惨状を誰かが見たらまずい、彼の直感はそう告げいそいそとその魔物を土の中へ埋めた。

十分ほどでその作業は完了し、猪が暴れまわったあとに残った切り株の上で彼は休憩をとることにした。

「しかし、これは予想外だ……外の世界の魔物とやらは皆こういうものなのか？」

ヴアラルは戸惑っていた。彼自身、それなりに強いと思っている。万全の装備ならアイリス、ガラム、セランを三人同時に相手に出来る程度には強いと自負している。イリスが加わるとちょっと厳しいが。

またこの冒険には国の命運がかかっているため、万全の態勢で望んだつもりではあった。

なにせ戦争が確認されてから三百年が経っているのだ。外の世界の實力が未知数である以上、アルカディアの住人に危険な目に遭わせるわけにはいかない。そのため実力者である自分が出向くことで万が一の事態にも対応できると思ったからだ。

けれど、思わぬところでつまづいてしまった。

以前、ガラムが世界を支配できると言ったことがあったが、ヴァラルは冗談だと思いき流していた。戦争というものは結局のところ数で決着が着くので、いくらアルカディアでも外の世界を丸ごと相手に出来るとはこれっぽっちも考えていなかったのだ。

……まあ、あいつはこのあたりで一番弱いものだったということにしよう。うん、そうしよう。

って何を俺は考えていた！？たかが一体の魔物ぐらいで何調子に乗っているんだ！俺はまだ他の魔物や人間達の実力をまだ知らないんだ。慎重に行動しなければいつか足元をすくわれてしまう。しっかりしなければ！

彼は気持ちを切り替え、倒した証拠である魔物の牙の欠片を持ってその場を後にする。

しかし、ヴァラルは気づかなかった。

この世界に彼と並び立つ者など誰一人存在しないということに

冒険者

ヴアラルが森の外へ出ると、猪の魔物に襲われていたさっきの男に会った。あの時からだいぶ時間は経っていたが、彼はヴアラルの身を案じて待っていてくれたようだった。

「おお！無事だったのか！」

男は助けしてくれたヴアラルに駆け寄り声をかけた。その顔は驚きと笑顔が入り混じったものだった。

「お前も森の外に出られたんだな」

彼もまた男の無事を確認して一安心した。逃げた後で再び他の魔物に出会ったりしたら元も子もないからだ。

「さっきは助かった、おかげで命拾いしたよ。それでさっきの魔物はどうした？なにやら凄惨な音が森の中から聞こえてきたんだが、もしかして何か関係あるのか？」

「ああ、魔物が大岩にぶつかって勝手に勝手に自滅したんだ」

ヴアラルは平然と事実と異なることを言っただけ、その証拠として魔物の牙の欠片を男に見せた。

彼としては本当のことを言っても良かった。だが、気絶させるつもりで殴ったら魔物に大穴が空いたと懇切丁寧に説明しても一体誰が信じるだろう。ヴァラル本人でさえあれには驚いたのだ、いたずらに彼を混乱させるわけにはいかない。それにあの場にはこの男はいなかったのだ、いくらでも言いようはある。

というわけで、ヴァラルは適当に誤魔化すことにしたのだ。

「そ、そうか。まあとにかく無事で何よりだった。ヴァラルといったな。このあとはどこかに用事でもあつたりするのか？」

男はヴァラルの言葉に少し疑問を感じていたが、助けてくれたことには変わりはない。しつこく聞いて彼の機嫌を損ねるのもまずいだろう、そのため話題を変えることにした。

「とりあえず、この森の近くにある村に行こうと思っている」

時間はちょうど夕暮れ、何とか日が沈まないうちに森から出る事が出来た。折角外の世界に出たのだ、人々がどんな生活をしているのかヴァラルは気になっていた。

「ならちようどいい。俺はその村から来たんだ。まだ宿は決まっていないだろう？今日はうちに泊まっていつてくれ。ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名前はカウン、よろしくな」

まだ若い男はそう名乗った。

「ああ、「こちらこそ」

二人は森を後にして村を目指して歩き出した。その途中、カウンが

これから向かう村について色々と教えてくれた。

テトスの村。トレマルク王国デパン伯爵領にあたるこの村は総勢百人ほどの小さな村だ。森に程近いこの村は辺境の地として知られ、あまり人が訪れることはない。いたとしても村自体ではなく、フェンバルの森に用がある者達がほとんどだ。またテトスの村の産業は農業を主体としているおり、ここで暮らしているカウンも幾つかの野菜を育てているのだという。

そして、カウンを襲った魔物についても説明してくれた。

猪の魔物はボボルと呼ばれ、このあたりで農作物を荒らし、時には人を襲う凶暴な魔物である。二本の牙はとも頑丈なため武器の製作に用いられることもあるのだとか。そのため、村中総出で討伐をしようと計画しているときに運悪く遭遇してしまったのだと。薬草を手に入れるため、うっかり欲張って奥まで進んだことを彼はしきりに反省していた。

ヴァラルはカウンが凶暴な魔物であるボボルについて語っている姿をみて複雑な気持ちになった。

ボボルは人を襲う。村にとっては脅威だったろう。けれど、その一方でフェンバルの森の奥地に入ろうとする者も襲っていたはずだ。つまり、彼らは間接的にはあるがアルカディアを守っていたことになる。そんなことを言っていたらきりがないのだが、それでもヴァラルは外の世界で初めて殺した魔物に対してもう一度心の中で謝った。

それなりに整備された道を歩き、ヴァラル達がテトスの村へついたのは日が丁度沈みきり夜になったときの頃だった。入り口には柵が

設けられており、その前には見張りが立っていた。カウンが見張りの村人に事情を説明し、村へ入る事を許可されたヴァラルはカウンの家に向かった。

「さあ、上がってくれ。とはいっても何も無いところだけだな」

「邪魔する」

ヴァラルはカウンの家上がりこんだ。小さな家だったが、きちんと整理整頓されていてこぎれいな感じのものだった。几帳面な性格なのだろう、彼は。

ヴァラルはテーブルに座りしばらく待っていると、カウンが薬草を煎じたお茶と野菜を煮込んだスープを振舞ってくれた。どちらも素朴な味だったが、ヴァラルはそれを文句の一つも言わず食べた。彼に好き嫌いはないのだ。

二人の腹が膨れたところで、カウンは口を開いた。

「さて、改めてヴァラルには礼を言う、本当にありがとう。それでヴァラルはこれからどうするつもりなんだ？良ければ聞かせてくれないか」

「とりあえず数日はこの村に滞在して次のところへ行こうと思っ
ている。俺の目的は世界を見て回るからだからな」

「へえ、それじゃあ旅は始まったばかりなのか。…待てよ、ここ以外では近くに村はなかったはずだ。それなのにどうしてフェンバルの森にいたんだ？」

カウンは前々から疑問に思っていたのだ。何故こんな辺境の地にヴァラルがいることについて。

やはり聞いてくるか…

ヴァラルは少し真面目な顔をしてカウンに語りだした。

「……俺の故郷は随分と人里離れたところにあつて、そこから俺は出てきたんだ。世界のことをあまり知らずにいるのはさすがにまじいと思つてな。その途中、あの森でお前さんの声が聞こえてきたから駆けつけたというわけだ」

アルカディアから来たと言えばどんなに楽なことだろう。けれど、ヴァラルはまだ見つからない彼らのことを素直に話す気にはなかった。仮にも一国の王なのだ。軽々しく口にすべきではないことくらい彼には分かつていた。

嘘とも本当とも取れる話をして、助けたことを前面に押し出す。少し強引だがいけるか？

「そうだったのか……すまないな、変なことを聞いてしまつて」

カウンが申し訳なさそうな顔で謝罪してきた。戦争によって故郷を失った者達が暗黒の地ニーベンスで集まり、集落を形成しているというの聞いたことがある。ヴァラルもまたその一人なのかもしれ

ない。そうなるにつらいことを思い出させてしまったな…

カウンは盛大に誤解していた。

「いや、そう思うのも当然だろう。気にすることはない」

彼の勘違いに気づくことなくヴァラルもまた安堵した。

何とかそらすことが出来た……

だが、今は凌ぐことが出来ても、この先はどうなるかわからないな……

ヴァラルは自身の身分を証明する手段を見つけようと思った矢先、

「てっきりヴァラルは冒険者だと思ったんだが……」

あの聞きなれない単語を耳にした。

「その冒険者というのは一体何だ？」

ヴァラルはすかさず質問した。この話を聞き逃してはいけない。そう咄嗟に判断したからだ。

「ああ、そうか。ヴァラルはまだ知らなかったのか。じゃあその説明をしないといけないな」

冒険者。

魔物を狩り、未開の地を探索し、貴重なアイテムを手に入れる等、アールヴリール大陸において欠かせない職業の一つである。トレマルク王国が発祥の地とされ、客からの様々な依頼をギルドと呼ばれる組合を通して受けることで生計を立てている。

そもそもこの職業が誕生したのは、王国特有の事情が絡んでいた。

三百年前、バルヘリオン帝国とニーベンスに住む魔物の間で戦争が勃発した。そのとき、トレマルク王国はまだ弱小国家であり、他の国に比べ戦力が圧倒的に不足していた。そこで、武勇に優れた者を戦争の期間中雇っていったのだ。つまるところ傭兵のようなものだったが、これが冒険者の始まりとも言える。その後彼らはギルドという組合を結成し、戦争の援軍だけにとどまらず、様々な客からの依頼をこなしていった。そして、その利便性が評価されあつという間に大陸全土へと拡大していった。

冒険者がここまで広まった理由にはその自由度にある。冒険者となるときにギルドに一定の金額を納めることで身分を保証されるのだ。それが国々を渡り歩くための証明になり、自由に国ごとに起こっている様々な依頼をこなすことが出来るのだ。そして冒険者の間で有

名になると、各国から破格の待遇で迎えられたり、そのまま信頼できる仲間と共に冒険の日々に明け暮れることだって可能なのだ。

とはいえ世の中は当然そんなに甘くはない。身分を保証されるとはいえ衣食住にかかるお金は自分の腕で稼がなければならぬし、トラブルが起これば基本的に当事者間で解決を迫られる。そして依頼の失敗は死を意味することが多々あるのだ。事実、このアールヴリール大陸では数多の冒険者が死亡、もしくは再起不能状態となっている。つまり、冒険者稼業は自身の持つ実力がそのままステータスになるのだ。

「成る程……」

ヴァラルにとって冒険者というのは非常に魅力的な職業に感じた。何せ金さえ払えば国々を自由に回れるのだ。これほど今の自分に適したものはないと心の中で笑みを浮かべた。

「冒険者に興味を持ったみたいだな。そういえば、この村にも冒険者が一人いたはず。引退したらしいが、それなりに有名な人だったらしい。ヴァラルはまだこの村にはしばらくいるんだろう？寝泊りはここでして、村を見学したり、彼の話聞いてきたらどうだ？」

「良いのか？ここに滞在しても？」

「何を言っているんだ。ヴァラルがいなければ今頃魔物の腹の中だったんだ。気にするな」

そうしてヴァラルはしばらくの間テトスの村に身を寄せることになった。

忍び寄る影

次の日、ヴァラルは村長の家に呼ばれ彼からも礼を言われた。カウンを助けてくれたこと、そして魔物を倒してくれたことに対してだ。この村はそこまで貧しいわけではないが、冒険者達を雇ってボボルを倒すほど金銭的に豊かではなかった。そのため、村中総出で倒すとなると村人からかなりの死傷者が出ることが予想されたのだが、偶然とはいえヴァラルがそれを未然に防いでくれたことになる。

村長との話が終わったあと外に出ると、カウンが待っていた。彼によるとローグという元冒険者の男は街に出かけていて、今日の夕方には帰ってくるのだそうだ。そのため、ヴァラルはそれまでの間カウンと共にこの村を見て回ることにした。

テトスの村の特徴として村の周囲の水路があちこちに引いてあるところだ。これは水源まで足を運ばずに水を得ることが出来、そのおかげで効率的に作物が育つよう工夫がなされていた。ヴァラルはその光景を眺め、外の世界の人々の営みにいたく感動していた。千年前、メクビリス山脈を越える前にここに立ち寄ったことをヴァラルは覚えていたが、そのときはテトスの村など存在せず、ただ荒地が広がっていただけなのだ。改めて世界が救われたのだということを確認に実感していた彼だった。

そして夕方、二人は村の酒場に訪れていた。広場の近くにあるこの酒場は集会場としても村人達に利用される活気溢れる場所である。そのため、元冒険者のローグとはここで待ち合わせることになって

いた。

ヴァラルとカウンは酒場に入ってテーブルに座り、彼のことを待った。しばらくすると、酒場の入り口から一人の人物が現れた。使い古された皮の鎧と鉄で作られた剣を持った熟年の男が二人に近づいてきた。

「よう！あんたがこの村に来た冒険者かい？俺はローグ。昔は冒険者をやっていた者だ」

ローグはヴァラルと握手を交わした。ゴツゴツとした力強い手だ。それなりに有名な冒険者だったというのはあながち嘘ではないようだ。

「俺はヴァラル。まだ冒険者にはなっていないけどな」

「何言ってるんだ、カウンから話は聞いたぜ。偶然とはいえあいつを倒したんだってな。冒険者に必要なのは腕っ節の強さも大事だが、運も重要なんだ。ヴァラルには素質あると思うぞ。ま、いずれ俺が倒していたけどな」

「ローグさん、そんなこと言ったら俺はここにはいませんよ…」

カウンは少し呆れたようにローグに言った。だが彼の言葉遣いから、ローグがこの村でいかに尊敬されているのかがわかる。

「おおっと、そうだったな。すまんすまん。とりあえず俺からも礼を言っぜ。すでに聞き飽きたと思うけどな」

そういってローグもまたヴァラルたちと同じ席に着いた。因みに、

今回は村長の厚意で彼らの酒代は無料となっていた。せめてこれくらいは礼をさせてほしいとのことだ。

三人は杯を交わし、互いに飲みあった。出された料理は味が濃いものも多く、酒との相性もばっちりだ。

「それで？ヴァラルは俺に何を聞きたいんだ？」

ローグは酒を飲み、口元をぬぐいながら尋ねた。

「とりあえずどうやってたら冒険者になれるのかということを知りたい」

「わかった。といつても冒険者になること自体、今はそんなに難しいことじゃない。昔はいろいろと決まりみたいがあつたらしいがな。とにかく金さえギルドに払えばそれで冒険者を名乗れるぞ」

冒険者になるためにはまず各地に点在するギルドの館に足を運ぶ必要がある、テトスの村からだとセクリアの街が一番近く、そこで登録すれば良いとのこと。他の街でも登録は出来るが、これといって差異はないらしい。

「何だ、なるのは意外に簡単なんだな」

ヴァラルは拍子抜けしていた。どこかの学校を卒業したりとかそういうことは無いみたいだ。あつたのならそこへ入学してでも冒険者になろうと決意するほど意気込みを増していた彼だったが、とんだ思い違いをしていたようだ。

「まあな、だがのし上がるのは大変だぞ？俺は引退するまでにたく

さんの冒険者が倒れるのを見てきた。俺自身も相当危ない橋を渡ってきたと思っぜ？この世界は本当に実力のある者しか生き残れない」

基本的に冒険者として有名になるためには何よりも強さが大事だ。ギルドではテトスの村のように魔物の討伐依頼が割合として多いため、それをこなしていくことで各国に顔を売っていくのだそうだ。けれどその道半ばで倒れた者は数知れず、ローグ自身も何度も命の危険に晒されてきたのだという。

もちろん、貴重なアイテムを入手したり、秘境を探索することで名を上げることが出来る。けれど、そういった依頼は強力な魔物や亜人と遭遇することが多く、結果として高い実力を求められる。むしろ討伐といった単純なものとは違い、アイテムや秘境に関する知識も重視されるため依頼を受けるものはかなり少ない。

それでも結局あいつらには勝てないけどな……

ローグは何かを呟いたと思った。たら急に明るいう口調になった。

「それでも、やりがいがあることには間違いない。依頼は結構金になるものが多いし、たくさんの知り合いが出来る」

「奥さんのことですよね、それって」

カウンがいきなり変なことを言い出した。

「ばっ、馬鹿言ってんじゃねえ！俺はそういうことを言ってるわけじゃなくてだな……」

「へえ、もしかして引退したのもそれと何か関係があるのか？」

ヴアラルも興味があるのか話に乗り出してきた。

「そ、それはだな…」

恥ずかしいのか、ローグは少しずつ語りだした。

冒険者時代、魔物の討伐依頼を受けて彼はとある村に立ち寄った。そのとき魔物に襲われそうになった娘を助けたことで彼女に惚れられてしまい、それ以降彼女との付き合いが始まったそうだ。そして、結婚を機にローグは引退を決意し、その後はこの村で子供とともに暮らしているという。彼によると、冒険者をしているところに出会いはたまにあるようだ。生涯の友を得たり、男女の冒険者同士が死線を潜り抜けて恋に落ちることになったり、極端な例では貴族のお嬢様に見初められるといったこともあるのだとか。

「だが、そうなる前に大抵のやつはくたばっちゃう。俺はたまに運が良かったんだ。あるときだって村人達が加勢しに来なければやられていた。だからなヴアラル、冒険者は臆病なくらいで丁度良いんだ。決して焦っちゃ駄目だ。とにかく生き残ることを最優先にするんだぞ、先輩からのアドバイスだ」

「助言感謝するよ。何事も慎重に行動するのは俺も同意見だ」

ヴアラルは思ったことを素直に伝えた。というよりも身に覚えのあることだらけだった。けれど、千年後でもさすがにそんな出来すぎた出会いはないとそのあたりは冗談半分に聞き流していたが。

「…随分と物分りが良いな。これからなろうとする奴らは大抵我の強い連中が多いんだけどな…まあ、俺からはこんなところだ。さら

に詳しいことはギルドの館に行つて聞いてくるといい。俺も引退してから結構時間が経つから、何か変わっていることとかあるかもしれない。他に何かあるか？」

酒場も閑散とし始め、恐らくこれが最後になるだろう。ローグはヴアラルに促した。

「ああ、そうだ。冒険者のこととは別に聞きたいことが一つあった」「何だ？」

「この村は一体何に怯えているんだ？」

「…どうしてそう思ったんだ？ヴアラル？」

ローグのかわりにカウンが質問した。

「昨日見張りの男を見てから疑問には思っていた。俺を必要以上に警戒していたし、村長の顔もどこか影を帯びていた。何より村の雰囲気暗い。不作というわけでもないし、一体何があつたんだ？」

そう、彼は不思議だったのだ。何をそんなに怯える必要があるのかと。フェンバルの森から魔物が畑を荒らすことがあるようだが、それでもこの怖がりようはどこか異様だった。まるで魔物ではなくも

つと他のものに怯えているような……そんな感じがした。

「やはり分かるか…これでも心配させないように隠していたんだけどな…」

諦めたかのようにローグはため息を吐いた。

彼によると最近このあたりで何者かが村を襲い、次々と壊滅しているのだという。それもテトスの村よりも規模の大きい村が次々と。村から金品が無くなっている事から盗賊団の可能性があるという。

けれど、今回の盗賊団は何かが違う。ローグは壊滅した村々をまわっているうちに気づいた。その盗賊団の異常性に。

通常、盗賊団は金品を奪う他に女・子供を攫っていくのを目的としている連中だ。彼も冒険者時代、そのような輩と何度か戦ったこともある。そのため、残された死体は大抵男がほとんどだった。けれど、壊滅した村に横たわる遺体の数々を見てローグは驚きをあらわにした。

男だけでなく若い女や子供、そして老人までもが、

消し炭となって見つかった。

別に焼死体が珍しかったというわけではない。短剣で殺されたものもいたし、矢傷で倒れたものもいた。ただ、逆にあまりにも多かったのだ、黒焦げで見つかった遺体の数が他のものに比べて。

そのためテトスの村はすぐに、この地域を統治している伯爵に討伐部隊を派遣してもらえるよう嘆願書を出した。けれど、盗賊団は結局発見されることは無く討伐隊は成果も上げられないまま引き返すことになった。それも当然だろう、目撃者が誰もいないのだから。

そのあとも、繰り返し要望したのだが、トレマルク王国は帝国や魔物との小競り合いが続いているため、なかなかこちらにまで手が出せずにいた。

また、冒険者たちを雇おうにもこの村にはそこまでの余裕はなく、結局村を巡回する人数を増やすのが精一杯なのだという。

「そういう不吉な奴がこのあたりをうろついているからな。出来るだけ心配をかけたくなかったんだ」

カウンはローグが語り終わると、ヴァラルに補足をした。

「それにしてもよく気づいたな…やっぱりヴァラルは冒険者の才能があるようだ。期待してるぜ、後輩」

そう言ってローグはグイと酒を飲み干した。

アザンテ盗賊団

それから数日間は瞬く間に過ぎていった。ヴァラルはこの辺りの自然を調査しつつ、村の畑仕事などを手伝っていた。彼が確認したところテトスの村周囲の自然は千年前とは見違えるほどに回復しており、これを調査し終えた段階でこの村から出ていっても良かったが、村人たちは旅人がこんな辺境の地に来ることが珍しいのか連日連夜ヴァラルを酒場に連行していった。

またある日の晩、ローグの家に招待されたこともあった。

「ヴァラルか、今日はよく来たな」

「邪魔する。それとカウンから差し入れた」

ヴァラルは彼が趣味で作っているという果実酒をローグに渡した。カウンは今日見張り役のため、ここへは来られないのだ。

「ああ、悪いね。カウンの酒はこの村では結構人気なんだぜ。食後にどうだい？」

酒瓶を持ちながらヴァラルを誘った。彼もカウンの酒のファンであるようだ。

「それは良い。楽しみにしてる」

ローグの家族はライとレイという双子と妻のサリスを入れての四人

家族だ。

双子の男はまだまだやんちゃな盛りで近所の子供達と一緒に冒険者ごっこをして、よく怪我をして帰ってくる。それをサリスが咎め、ローグが子供達のフォローするということが日常茶飯事なのだそうだ。

妻のサリスは三十代後半の女性だ。ローグの年齢が五十手前なので、なかなかの年の差である。そのため付き合いだした当時は村の男達から相当冷やかされたらしい。何せサリスは村一番の人気者だったため、彼女の心を鷲づかみにしたローグは彼らから尊敬と嫉妬の念を一身に受けたのだ。

最初の頃はローグも彼女と付き合い合えたことが嬉しかったようだ。けれど冒険者をしている以上自分はいつ死ぬか分からないし、もしもことがあつたらきつと彼女を悲しませてしまう。この場所に滞在するのも限界があるし、何よりも彼は生粋の冒険者だった。簡単に今までの生活を捨てられなかったのだ。

そのとき、村の人たちは無理を承知で彼女と一緒に連れて行ってくれないかとローグに頼み込んだ。別れが近づいていることを悟っていた彼女は口には出していなかったが、だんだんと表情が暗くなっているのが彼らには理解できたのだ。本当はこの村に留まって貰いたかったが、そんなことを恩人である彼に頼めるはずも無かった。

ローグは村人達の決意を聞いて、サリスに一年だけ待つて欲しいと頼んだ。冒険者の自分と決着をつけてくるとそう言い残して。要はプロポーズである。

そして一年後、テトスの村に新居を構えたローグは彼女を迎え、現

在に至るといふ。

「ローグも色々とおったんだな…というか、昨日はそんなこと全然言わなかったじゃないか。…もしかしてこれで酔ったのか？」

カウンの酒は質が良い分、酔うのも早かったようだ。

「…ああ、そうかもな。いや、ヴァラルのように何でも話せる奴には久しぶりに会ってな。本当は先輩としてアドバイスしたかったが、逆にこうして身の上話につき合わせちまってる。俺も年をとったな…」

「不安なのか？例の盗賊団のことで」

「まあな。村の連中には尊敬されているが冒険者は随分昔のことだ。彼らを相手に今の俺がどこまで出来るか正直わからない…」

ローグもまた不安だったのだ。あのような不可解に壊滅した村々を見て、正体不明の盗賊団に対抗できるのかどうか。

「けどな、ここには俺の妻や子供達がいる。そう簡単にはやらせるつもりはないぜ」

そう言っただけのけたローグの目は力強いものだった。

そしてその翌日、その言葉を待っていたかのように事件は起こった。

早朝、ローグの家に泊まっていたヴァラルは不穏な気配を察知して目覚めた。なにやら村が騒がしい、そんな気がしたのだ。

「どうしたんだローグ。何かあったのか？」

外に出ようとしたローグをつかまえ、事情を聞いてみた。

「ああ、ヴァラルか。村の外に巡回しに行っていた連中が戻らないんだ。だから搜索隊をこれから出すところなんだよ」

「もしかして、カウンが？」

「いや、あいつは途中で交代したからこの村にいるはずだ」

ローグがそういうと同時に、外から叫び声が上がった。

「何だ！？」

急いで家を出ると村のあちこちに火の手が上がり、いくつかの家が燃えていた。まるで誰かがこの村を襲撃したかのような…まさか！？

「ローグさん！！」

村人達が必死な面持ちで彼に近づいてきた。何かから逃げてきたのか体中は汗だらけで、彼らは相当慌てていた。

「どうしたんだ!! 一体!」

「あいつらが来たんですよ!」

その言葉を聞いた瞬間、ローグは村人達に指示を出した。

「男達は女・子供、老人連中を急いで非難させるんだ!! 戦闘があるかもしれない!!! 決して一人で行動するなよ!!!」

彼は大声で怯える村人に檄を飛ばした。その言葉にはつとしたように彼らは散らばっていった。伊達に彼が尊敬されているわけではないのだ。何度も村から魔物を撃退してきたローグだからこそ村人達は彼を深く信頼していたのだ。

「ヴァラル、お前も妻や子供達と非難するんだ。まだ冒険者にもなっていないんだろう? お前はまだ若い。それにこの村の客人に危なっかしい真似をさせることはできないしな」

「だが、村を見る限り敵は大勢いるみたいだぞ。一人で大丈夫なのか?」

「村の男達は人を殺す覚悟なんて出来ちゃいない。訓練はしたんだが正直言っただてにならん、無駄死にさせるだけだ。それにヴァラル、言っただろう? 冒険者ってのは臆病なくらいでちょうど良いとちゃんと覚えておけよ?」

そういつて彼は駆け出していった。

村の中心部にある広場は既に大変なことになっていた。逃げ遅れたと思われる村の男たちは盗賊団と思わしき集団と戦っていたが、腰が据わっていて頼りなかった。ここが辺境の地であるため、人間相手に戦うということの経験が彼らには圧倒的に足りなかった。

実際この村で実戦経験者はローグだけなのだが、それでも村を守ろうと必死に農具を振りまわし抵抗していた。

けれど、盗賊団は彼らの必死な姿を嘲笑うかのように短剣を操っていた。最初は単調な突きを繰り返して慌てふためく村人をからかい、徐々にそのスピードを上げて皮膚を切り裂いて恐怖心を煽る。そして命乞いを散々したところで殺す。

アザンテ盗賊団。総勢五十人に及ぶこの集団は、このような残虐な手口で村人達を襲っていた。この近隣で暴れまわっている盗賊団は彼らだったのだ。

「やめろお！！！！！」

そのアザンテ盗賊団の一人が飽きて村の男を殺そうとしたとき、大声で盗賊を怒鳴りつけ一人の男が割り込んできた。

ローグである。

「なんだあ？お前何邪魔してんだよ」

気分が削がれたように盗賊は目の前の男に言った。

「これ以上はやらせん」

ローグは怒気を込めて盗賊を睨めつけると同時に剣を構えた。

「へえ、武器の構え方くらいは知ってるのか」

盗賊もこいつは素人ではないなと考え、短剣を構えなおした。

一瞬の沈黙が二人の間に流れ、戦いの火蓋がきつて落とされた。

「ハアッ！」

先に仕掛けたのは盗賊の方だ。素早くローグの懐に潜り込み短剣を繰り出して、彼の命を絶とうとする。

「フンッ!!」

けれど彼はその攻撃をサッと横に回避し、お返しといわんばかりに剣を横に薙ぎ払った。

「!!チイッ！」

思わぬ抵抗にあった盗賊は慌ててそれを避けた。一瞬でも遅ければ彼の命は無かっただろう。それくらいローグの一撃は鋭いものだった。

「…さっきまでの奴とは随分違うじゃねえか？お前、冒険者か？」

盗賊は思わず尋ねてしまった。こいつは明らかに戦い慣れしている、そう判断したからだ。

「それがどうした？無駄口を叩いている暇は無いぞ」

ローグは盗賊に向かってすぐさま斬りかかった。まだ村の連中が残っている、急いで片付けなければ彼らの命が危ない。そう思い彼は目の前の敵を倒すことに専念した。

盗賊もまたやられっぱなしではなかった。ローグの放った斬撃を避け、彼もすかさず短剣を振りかざした。

それからは一進一退の攻防が続いた。盗賊が次々と短剣で突いてくるのを、ローグはひたすらそれを避け、剣で弾き、隙あらば薙ぐようにして斬りつけ、反撃に転じていた。

「くそっ！！」

盗賊は苛立っていた。これだけ攻撃しても、盗賊はローグに目立った外傷を負わせることが出来ないでいたからだ。目の前の彼が息一つ乱れていなかったのも盗賊の心に焦燥感をもたらしていた。

埒が明かないと見て盗賊は一気に勝負に出た。真正面から短剣を構え、盗賊が出せる最速の一撃を放った。けれど、そんな正直すぎる攻撃が当たるはずも無い。ローグはその攻撃を弾き、バランスを崩した盗賊に対して袈裟懸けに斬りつけた。

「ぐっ！？」

全身から血を流して盗賊は地に倒れこみ、そのまま二度と起き上がることは無かった。

「大丈夫か!？」

盗賊が死んだことを直接見たローグはすぐさま駆け寄り、男の無事を確かめた。

「あ、ああ。すまないローグさん……」

その男はカウンだった。体のあちこちに怪我を負っていたが、幸い命に別状は無さそうだ。けれど、ローグが駆けつけてこなかったら物言わぬ死体になっていただろう。カウンは助けられたことでその恐怖が蘇り、身震いをしていた。

「ここは俺に任せておけ。お前は避難しろ。場所は分かるな？」

「本当にすまない…ヴァラルやローグさんといい、俺はいつも誰かの脚を引っ張ってばかりだ…」

「泣き言は後にしろ。……ほら、とりあえずこれで歩けるだろう。早く行くんだ!」

簡単な手当てを施した後、ローグは他の村人を助けるため再び戦いの場へ戻っていった。

それからのローグはまさに獅子奮迅の働きを見せた。先ほど戦った盗賊がそれなりに強かったのもあったが、それでもあつという間に五人を立て続けに斬り伏せた。

彼は冒険者を辞めて十年経とうとしているが、毎日の鍛錬を欠かすことは無かった。そのため、今でも第一線で活躍できるほどの力量を彼は保持し続けていた。ただ弱いものだけを相手にしていた盗賊とは強さの質が違うのである。

そうして六人目となる盗賊を倒したところに一人の男が現れた。ひよろりとした体格ではあったが、その周りには手下と思われる盗賊たちがいた。

「随分とやってくれたじゃないか？ええ？」

全身から肉の焼けたにおいを発している彼の名はアザンテ。この盗賊団を率いる男である。

「お前がこの盗賊団の親玉か」

「そうだ、一人の男に次々とやられたというの報告を聞いてな。けど、どんな奴かと思っただけの老いぼれ冒険者じゃないか。一体何やってたんだあいつらは…」

死んでいった盗賊たちを小馬鹿にした彼はローグの姿を見て呆れていた。

「油断するのは勝手だがな……あまり俺を舐めるなよッ!!」

ローグは一気に駆け出した。人数が多いとはいえ、目の前の男さえ倒せばその後はこちらのものだ。そう思い、彼に向かって叩きつけるかのように斬り下ろした。その瞬間、

「お前がな」

ローグは燃えた。

「あああああああ！！！！！！！！！！」

ローグはいきなりの出来事にパニックになった。アザンテがローグの前に何かを突き出し呟いたかと思うと彼の体は瞬く間に燃え上がったのだ。

盗賊たちが目の前にいるにもかかわらず火を消そうと転げ回るローグを見て、アザンテを含む盗賊たちはげらげらと笑っていた。

熱い熱い熱い

イタイイタイイタイ

なりふり構わずに彼は近くにあった水路に飛び込んだ。

バシャアと大きく水しぶきが舞い、全身が水に浸かることで火はよ

うやく消えたが、水路から出てきた彼は重症だった。全身の皮膚はただれ、息も絶え絶えで体から肉の焦げたにおいを発していた。

「ま…魔法士か…」

彼の手には一本の杖が握られていた。

「そつだよ。気づくのおせーよ」

魔法士。

スペルマスターとも呼ばれ、魔力を操りそれを様々な形でこの世界に具現化させる者のこと言う。

そう、トレマルク王国で相次いだ焼死体はアザンテの仕業であった。

「な…なぜこんなことを…」

ローグの疑問ももつともである。魔法士はどこへ行っても優遇される。冒険者ギルドや軍、貴族の護衛など、彼らはあるとあらゆる場所でも重宝されるのだ。ローグも何度か魔法士と出会ったことがあるが、誰もが高い地位を得ていたのだ。

そんな雲の上の存在がなぜこんな盗賊をやっているのか。彼には理解できなかった。

「そんなの決まってるだろ？お前みたいな奴を見るのが楽しいからだよ。どいつもこいつも最初は俺のこと見下しておいて、俺がちよつと本気を出すと泣いて謝りだす。ほんと笑えるわ」

再び盗賊団たちはドツと笑い出した。まるで殺しを楽しんでいるかのような声が辺りを包んだ。ローグが地べたを這い、彼らはそれを上から見下す。

弱者と強者がここにはつきりと分かれたときだった。

「く……狂っている……」

彼らの下品な笑い声をきいてローグは呻いた。

そんな、そんなことのためにこの村は無くなるのか。

妻と子供、そして村の人たち。

貧しい中でも知恵を出し合って生活してきたのだ。

それがこんなにも呆気なく……

「あー面白かった。さてと、俺達はまだやる事が山ほどあるからな。そろそろ死んでくれ」

ひとしきり笑ったアザンテは杖をローグに向けた。距離は三メートル、決して外すことは無い。魔力が杖の先に集中し、

すまない……サリス、子供達……

まさに魔法が発動しようとしたとき、

「ちょっと待て」

燃えさかる炎の中から悠然と

ヴァラルが現れた。

狩るものと狩られるもの

「あ？」

盗賊達は突然の出来事に戸惑っていた。それはアザンテも同様だった。いきなり炎の中から男が現れたのだ。それだけでも彼らの気を引くには十分だった。

黒い髪に黒い瞳、腰に帯びた古びた剣と鎧。剣士なのだろうが、アザンテたちを見て物怖じを一切していない男の雰囲気はどこか異様だった。

「おいローグ。しっかりしろ」

「う、ヴァラルか……村の連中はどうした？」

「大丈夫、お前のおかげで皆無事だ。後はお前だけだ。それと喋るな、傷に触る」

ヴァラルはローグに近寄り、どこからともなく瓶を取り出して中に入っている金色の液体を飲ませた。

その瞬間とんでもないことが起きた。

みるみるうちにローグの体が治っていくのだ。大火傷を負った皮膚は瞬く間に再生し、その光景を目の当たりにした盗賊たちからも動揺の色が広がっていた。

「ヴァラル、こ、これは、一体…？」

自身に起きた突然の変化にローグは思わず尋ねていた。当然だろう、鎧がぼろぼろになっているとはいえ、体には傷一つついていなかったのだから。

外の世界での使用は問題ないみたいだな…

「少し休んでいろ、後は俺が引き受ける」

「そんな、無茶だ！あいつらは魔法を使う！俺達じゃ勝てない！」

「魔法？ああ、そういうことか。だが問題ない。それよりもローグ、お前は離れてろ。少し邪魔だ」

有無を言わさぬその声に、熟練の冒険者であった彼はさすがにごとごと奥へ引き下がった。彼の言葉は少々不躰だったが、どこかローグを気遣うような気持が込められていた。

さっきの光景を見ていたアザンテは顔には出ていないが、盗賊たちと同じように戸惑っていた。

この世界では傷を癒すためには、数種類の薬草を調合した傷薬か、ポーションとよばれる魔法アイテムで治すのが基本である。前者は安価で手に入るが傷口を癒すくらいのもので、後者は骨折程度の怪我を直すことが出来るが高値で取引されている。さらに言うならどちらとも即効性ではなく半日から数日かけて治す遅効性のものだ。

魔法士でも治癒魔法を使えるものはいるが、それでもこの回復速度はありえない。全身の大火傷を治すためには、治癒魔法に長けた魔法士が数時間つきつきりでかけ続けなければ治らないのだ。

「お前、一体誰だ？」

アザンテは怪訝な目でヴァラルを見た。さっきのやりとりから見ていると二人は知り合いのようではあったが…

「俺はヴァラル、冒険者だ。まだ登録はしていないけどな」

「嘘をつくな！！それにさっきの変な液体、あれは一体何なんだ！！」

アザンテは吼えた。こんな奴が唯の冒険者であるはずが無い。しかも登録も済ませてないだと？断じてありえない！

「本当のことだ。それとさっきのものはエリクシルといって魔法アイテムの一種だ。しかし、ここにはエリクシルは無いのか…」

ヴァラルは残念そうに呟いていた。

一方、アザンテは彼が何を言っているのかさっぱりわからなかった。

アザンテも魔法士だ、人並み以上に魔法の知識はある。それでもエリクシルという言葉自体、今日初めて聞いたものだった。

「っと、そんなことを言ってる場合じゃなかった。お前達、いくらなんでもこれはやりすぎだ。この村に何か恨みでもあるのか？あつたとしても度が過ぎることには変わりないがな」

「っはははは！いきなり何を言い出すかと思えば！こんな辺鄙な村に恨みなんてあるわけないだろ？俺達はやりたいたいことを自由にやっているだけだ。ヴァラルといったか？エリクシルとやらの魔法アイテムを含めてお前には色々聞きたいことがある。すこしつきあってもらうぜ」

こんなときに説教を垂れるとは目の前の男はどこがおかしいようだ。辺りは火の海だというのにこの能天気さ。それなりの冒険者と思っただが、どうやら違うみたいだ。こいつは唯の馬鹿だ。

アザンテたちは臨戦態勢を取った。

「…つまり、俺に喧嘩を売ってるわけだな？良い度胸だ…相手になつてやる」

ヴァラルは盗賊たちに挑発するように言った。

「……やれ。生きてさえいればいい、とっとと始末しろ」

アザンテは手下たちに指示をした。こちらは四十人以上いる。それに対して相手は一人、どう考えても負ける要素は見当たらなかった。

盗賊たちは一斉に走り出した。元々いたぶるのが得意な彼らだ。腕

や足をとることに何の躊躇も無い。しかも相手は武器を構えてさえいない。

これはやれる。

そうしてあつという間に三人がヴァラルに肉薄し、短剣を突き出したとき、

ヒュンと、

何かが風を切るような音がして、

盗賊たち三人の首が宙に舞った。

ドサツドサツと襲い掛かった盗賊たちの首が子気味よく地面に落ちると同時に辺りは静寂に包まれ、彼らは目の前で起きた出来事に思考が追いつかないでいた。

そして仲間だった彼らの首を呆然と眺めて盗賊たちが次にヴァラルを見ると、

白銀に輝く剣を手に持ち、黒光りする鎧に身を包んでいた。

何だよ…あれ…

誰かがぼつりと言った。

さっきまでは古ぼけた剣と鎧だったはずなのに、いつの間にかそれは一変しており誰もが息を呑んでいた。

盗賊たちは美術品の価値など一切分からない。

宝石ならまだしも名のある彫像や絵画を奪う際、それらを見ても心を振るわせたことなど一度もない。彼らはをただの金としか見ておらず、まして剣や鎧でそんな感情を抱いたことはなかった。

けれど、目の前にある剣と鎧はそんな彼らの固まった価値観を一瞬にして吹き飛ばした。

それほどまでに綺麗だったのだ、目の前に存在する武具は。

「おい、何ぼうつとしてるんだ」

ヴァラルは目の前で惚けている彼らに声をかけた。

仲間が三人も死んでいったはずなのに盗賊たちはただ突っ立っただけだった。まるでそのまま殺してくださいといわんばかりに。

その言葉にはつとした彼らはヴァラルを再び見た。けれどさっきの威勢はどこにいったのか、盗賊たちは戸惑いの色を浮かべていた。

「来ないのならこっちから行くぞ？」

ギヨロリとヴァラルは盗賊たちを見まわした。その目はまるで命を狩る死神のような目であり、誰もがその場に立ち竦み、一斉に怯えだした。

「おいおまえら！たかが一人に何ビビッてるんだ！しっかりしやがれ！もし逃げ出したりしたなら…分かってるんだろうな？」

アザンテは自身を鼓舞するかのようには盗賊たちを怒鳴った。さすがはリーダーだけあってヴァラルの軽く飛ばした目線に怖気づくことはなかったようだ。

「ひっ！！」

そして誰かが小さな悲鳴を上げると同時に

ヴァラルは歩き出し、

一方的な虐殺が始まりを告げた。

「あ、あああ……」

盗賊の一人は思わずうめき声をもらしていた。

いきなり三人が死んだと思ったら武具は変わっており、そのあと風を切るような音が聞こえたかと思うと対峙していた盗賊たちが一人また一人と死んでいく。

男は彼らを次々と斬り伏せていく。男は別に何かをしたわけではない。剣の動きが早すぎて見えないのだ。

深く斬り込んだと思えば短剣を持っていた腕を斬り飛ばされ、後ろをとったと思えば、まるで頭の後ろに目があるかのように振り向きざまに相手を薙ぎ払う。

命乞いをしようとしても、言葉を発する前に頭と胴体は分断され、声を発することが出来なくなっていた。

四十人以上いた盗賊たちはその数を瞬く間に減らされた。逃げ出した盗賊もいたがそんなことをアザンテは許さず、杖を彼らに向け、死んでいった。

どちらにせよ、盗賊には既に逃げ場はなかった。

「ひ、ひひひひ……」

最後の一人となってしまうた盗賊はがちがち歯を鳴らしながらヴァラルと対峙していた。

こんな辺鄙な村にたった一人で何十人も相手をする事ができる冒

険者がいたなんて誰が想像できただろうか。変な魔法アイテムや武器を所持している者がいるだなんて誰が思うだろうか。

そして、ヴァラルの目が盗賊の目と合った瞬間、

彼の命は消えた。

「さて、何か言い残すことはあるか？」

ヴァラルは盗賊の最後の一人を始末すると、アザンテに向かってそう言った。

けれど、アザンテは笑っていた。手下が全員死んだというのになんて奴だ、ヴァラルはそう思いつつも彼に期待した。

盗賊たちは武器を持っていたが、一人ひとりの技量を見る限り最初に戦った猪の魔物の方が強いことを肌で実感していた。

彼は盗賊たちと戦っていたとき、久しぶりに使った剣の動きを確認するかのようには振るっていたのだが、彼らはヴァラルの剣筋がまるで見えていなかったようだ。

だから、アザンテの繰り出す魔法を心待ちにしていたのだ。

「へへっ、これほど強い奴を見たのは初めてだぜ。だがな、冒険者風情が俺に勝てるはずがないんだよ！」

杖をヴアラルに向けて魔力を集中させ、必殺の魔法を放った。

『ファイア・ボール』

メラメラと激しく燃える火の玉が男に襲いかかる。

《ファイア・ボール》自体、魔法士なら誰でも使うことができる。だが、アザンテの作り出した火の玉は直径一メートルほどの巨大なものであり、鎧を身につけていても中の人間ごと焼き尽くす強力なものとなっている。

アザンテの恐ろしさは初歩ともいえる魔法を殺人の域まで高めることで、魔力の消費を抑え、素早い詠唱を可能にしたことだ。その恐ろしさのため、魔法皇国ライレンでは彼に多額の懸賞金をかけた。

そんな彼の魔法が男を焼き殺そうとする。アザンテはエリクシルのことを聞き出せないことを後悔したが、死んだ後に彼の持ち物を漁れば良いかと気持ちを改めた。

だが、そんなことは起こるはずもなかった。

「こんなものか」

そういつて男は無造作に剣を振ると、火の玉はその瞬間、虚空に消え失せた。

「……は？」

アザンテは間抜けな声を漏らした。

「どうした？もう終わりなのか？」

「何だ……」

アザンテはすかさず『ファイア・ボール』を放った。だが、ヴァールが白銀に輝く剣を振るう度に火の玉は消えていった。彼はどんどん近づいてくる。

「何なんだよ！！お前は！！！」

アザンテは目の前で起きていることが理解できなかった。水の魔法を使った防護魔法を張っていたのならまだ分かる。だが、炎を斬ったのだ。剣を振っただけで炎が消えるという馬鹿げた現象をいまだに信じられずにいた。

彼がそう思うのも無理は無い。

ヴァラルの持っている剣は『真龍の剣』と言う。

聖獣バハムートの白銀に輝く鱗から作り出されたその剣はヴァラルの魔力に呼応して真の姿を現す。

その特徴はヴァラルの意志に応じて威力を変化させることができる所にある。あらゆるものを『断つ』ということに特化され、最大威力はヴァラルが千年前に使っていた『レーヴァテイン』に匹敵する。

そのため、こちらに向かって放たれた魔法を『断つ』ことなど造作も無い。

ドワーフのエドはヴァラルに対して武具を破格の条件で作りに出したのにはわけがある。

彼はヴァラルの使っていた武具に心惹かれていたのだ。アルカディアに来た当初は自分の作り出すものが最高のものだと思っていた。彼だったが、ヴァラルの使っていた剣や鎧を見て自尊心を打ち砕かれた。

力を失っても尚、当時のローグが作り出した最高傑作を上回るものだったからだ。

そのため彼はヴァラルの持つ武具を超えようと研鑽の日々を続け、ガラムたちの協力があつたとはいえ、ついにその領域に手を伸ばすことが出来たのだ。

お前が俺の使っていた武具を目指していたのは知っていたが、ここまでのものとは…流石だな。

だがな、エド、

これはやりすぎ

そうこうしているうちに、ヴァラルとアザンテとの決着が付こうと
していた。

アザンテの魔力が尽きたのだ。

いくら燃費に優れた魔法でも、詠唱を続ければあっという間に魔力は尽きてしまう。また、アザンテ自身の精神的な動揺も大きく影響しているのだろう。彼はヴァラルに恐怖し、その場にへたり込んだ。

「な、なあ。俺と手を組まないか？二人で協力すればあっという間に」

「断る」

「お、おまえがリーダーをやってもいい。い、いやむしろあんたがふさわしい。さ、さっきまでのことは謝る。だから、」

「何のメリットもないし、お前が俺に殺意を向けた時点で既に殺すことは決めていた。だから諦める」

「そ、そんな……た、頼む、許してくれ……」

「そうやって命乞いをした他の村人達も殺してきたんだろう？駄目だ」

「う、うわアあああああ！」

彼は杖を振るい、彼は反撃を試みたが、

「五月蠅い」

ヴァラルはアザンテを斬何の躊躇もなく伏せた。

「馬鹿な奴だ」

ヴァラルは一人呟いた。

「これからのこと」

メラメラと炎があたりで燃え盛る中、足音が聞こえた。ヴァラルがアザンテを打ち倒し、こちらへ向かってきたのだ。

はっと我に返ったローグは彼に聞きたいことが山ほどあった。けれど、気持ちとは裏腹に体は全く動かなかった。

全身が恐怖しているのだ、目の前の圧倒的な存在に。

ローグも人を殺したことがある。その中にはアザンテのような下衆な者が殆どだったが、それでも必ずといっても良いくらい気持ちが悪く落ち込んだり、怒りに燃えていたりもした。

けれど、ヴァラルは何十人も倒した直後だというのに顔色一つ変えずにこちらへ近づいてくるのだ。

まるで同じようなことを何度も経験してきたかのように。

同じ人間であるはずなのに、どうしてここまで何食わぬ表情でいられるのだろうか。そんな彼を前にして、ローグは今まで張り詰めていた緊張の糸がついに切れ、そのまま意識は闇の中に沈んでいった最中、

「…それが当然の反応だ」

ヴァラルが何か口にしたような気がした。

彼が目覚めたのはそれから三日後のことだった。

「…う、ここは…?」

「おお、気がついたようじゃな」

ここはテトスの村にあるローグの家。アザンテ盗賊団の襲来によってこの村にある家の殆どがなくなったが、ここだけは無事だったらしい。いま、サリスと子供たちはローグのかわりに村のあちこちで手伝いをしているようだ。

「村人達は!？」

「まて、そうあせるでない。順番に説明する」

村長に話を聞くと、見張りの二人以外は全員無事で、カウンもローグと分かれた後、彼らと合流できたそうだ。

生死の境を彷徨った村人が何人もいたのだが、彼らは全員ヴァラルの持っていたエリクシルを飲むことで一命を取り留めたらしい。

肝心のヴァラルはアザンテに懸賞金がかかっていたことを知ると、その金を村の復興に使ってくれ、それと引き換えに、ここで起こったことはできるだけ秘密にしておいてくれといった後、その日のうちこの村を出て行ったようだ。

「まるで嵐のような男じゃった…」

村長はそう語り、話を締めくくった。

ローグは村長の話を聞きつつ、三日前に起こった出来事を回想していた。

エリクシルと呼ばれる魔法アイテム、盗賊たちを瞬く間に制したヴアラルの卓越した剣技、そして白銀と漆黒に輝く剣と鎧。

全てが彼の常識を覆してしまった。

特にアザンテの魔法を打ち消したあの剣。

魔法士の才能がない彼でも、ヴアラルの持つ武器が強力な力を秘めていることが分かってしまった。

そもそも前提からしておかしかったのだ。どこの世界にあんなものを持った冒険者見習いがいるというのだ。はつきりいって相当目立つ。

だが、そこまで思考をめぐらせることで彼はふと気づいた。

だからあの二つは最初古ぼけた剣と鎧に見えたのか…

アールヴリール大陸での魔法の武具は非常に貴重なものとして知られる。そのどれもが国宝や貴族のコレクション、有名な冒険者の手に渡り市場に出回ることがほとんどないためだ。

つまりヴァラルは貴重な魔法の武具を二つも所持していることになるのだが、それでは当然注目されてしまう。

それらの目欺くため、見るものを誤認させる効果があつた武具には付与されているのだらう、そう推測をした。

しかし、彼は魔法の知識がないため気づかなかつた。

世界中の魔法の知識を総動員しても再現不可能だとされる失われた過去の遺物であるということに…

「どうしたものか…」

テトスの村を去つたヴァラルはその日の夜、セクリアの街に向かう途中の草原で腰掛けながら大いに悩んでいた。

この世界では魔法士という存在がいて、彼らがローグのような冒険者達に恐れられているのは分かつた。

だが、ヴァラルとしてはあの程度の魔法で怖がられてしまうのなら、それをいとも簡単に破つた自分は一体どうなってしまうのだ。

彼としては出来るだけ目立つことを避けたかつたのだが、またもや出だしからつまずいてしまった。

エリクシルがまだこの世界には存在しないこと、エドの武具が予想以上のものであったこと、そして外の世界の人々との力量差。

ヴアラルにとって良いことなのか悪いことなのか分からないほど踏んだり蹴ったりの出来事だった。

盗賊団が現れた時点で逃げても良かった。だが、ヴアラルはテトスの村の村人達をあのまま見捨てるわけにはいかなかった。少しの間だが世話になった村だ、彼らを見殺しにするほどヴアラルは薄情ではなかったのである。

そのため、先程の出来事を踏まえ、これからの行動をどうするか改めて考えていた。

どうもこの世界に来てから別の意味で調子が狂うな…

とりあえず、頭を一旦整理し、現在の状況を確認した。

目的は冒険者を隠れ蓑にして外の世界を知ること。そして聖獣たちとヘスターから頼まれた魔族の男の行方を探ること。とりあえずこの三つだ。

そして、最悪の事態はヴアラルの素性、またはアルカディアが知られてしまうということだ。

アルカディアに関しては特に心配はしていない。あの四人にはきつく言い渡してあるし、何よりメクビリス山脈がある。フェンバルの森付近も辺境の地ということもあり、そうそう人は寄り付かないだろう。

ヴァラルの素性の方もあまり問題がないように感じる。冒険者という職業は出自を気にしないことが多いという。彼らに求められるのは力だ。さらに毎日多くの冒険者が生まれ、そして死んでいく。要は使い捨てる存在であるため、彼らの出生を調べるだけ時間の無駄なのだ。

後は誰かから強制的に喋らされたり、自分から打ち明けたりすることだが……

前者は考えるまでもない。そんなことを考えた不埒な輩を正面から捻り潰せば良い話だからだ。

後者も…今のところないだろう。聖獣はともかくとして魔族の男には打ち明かす必要があるが、基本的に昔の知り合いはアルカディアにいるはずだ。打ち明けるにしてもヴァラルの信頼に足る人物、つまり過酷な旅を承知の上で共に旅する新たな仲間がこの世界にいることが前提条件だ。

アルカディアに招いても良いと彼が思うくらいに。

「そんな奴がそうそういるとは思えないけどな…」

そこまで考えるとそれなりの余裕があることに気がついたが、

「結局なるようにしかならないか…」

そう言って、よくわからない結論に達した彼はその場所で野宿の準備を始め、眠りについた。

セクリアの街

日の光が夜の闇を照らし出す頃、ヴァラルは目を覚ました。外の世界に来てからというもの、彼は夜明けと共に行動するようになった。その理由は朝日を拝みたいというごく単純なもののだが、それでもアルカディアの王城で見るときとはまた別の感動があるのだ。

「よし、今日もまた頑張るとするか」

ヴァラルは簡単な身支度を済ませ、朝食の干し肉と果物を食べ終わると次の目的地、セクリアの街へ向かった。

途中、コボルドという犬のような魔物と何度か遭遇したこともあったが、ヴァラルの拳と剣の前にあっけなく沈黙することになった。

「このままでも十分いけるな」

ヴァラルは自分の装備を確認した。何の魔力も秘めていない古びた剣と鎧。テトスの村での出来事から、彼は徐々にだが相手の力量に合わせて戦うことが出来るようになってきた。

最初のうちはボボルと同じように相手の体に大穴が出来たり、体がパツクリと二つに分かれるというグロテスクなことがあったのだが、それも今では良い思い出だ。

また、ヴァラルは毎朝トレーニングをするようになった、主に肉体面ではなく精神面のもののだが、彼の身に渦巻く膨大な魔力を上手くコントロールするよう心掛けた。

ローグが倒れた際、ヴァラルは彼に魔力を無意識のうちに当てていたようで、そのせいで気絶してしまったことが後でわかった。これから様々な人と出会う中でいちいち気絶させてはまずいので、セイラムの街に着く前に習得する必要があったのだ。

「ガラム、セラノ。お前達の苦勞が少し分かった気がする…。」

ヴァラルはアルカディアにいる仲間との距離がほんの少し縮まった。

その日から街道を歩き続けること五日間、日が徐々に傾き始めた頃、ヴァラルはついに目的地にたどり着いた。彼の力を持ってすればあつという間に到着することが出来るのだが、そんな野暮なことはいなかった。彼はゆっくりと辺りの風景を眺めながら旅を楽しみたいため、あえて徒歩で移動していた。

「ここがセクリアか。結構立派なところなんだな」

セクリアの街。

デパン伯爵が治めるこの地はトレマルク王国の中でも特に発展が著しい街として知られている。

このセクリアの街は最初、テトスの村のように寂れたところであったという。けれど伯爵がこの地を拠点にして改革を始めたのをきっかけに、大きく変わり始めた。

この地に蔓延っていた役人への賄賂を徹底的に摘発し、新たな商店の参入を以前よりも緩やかなものにしてセクリアの街での取引を活性化させ、警備隊を常備しての治安の安定化を目指す等、人々にとつてデパンは理想ともいえる施政者であった。そのため、人々も彼の行いに報いるかのように伯爵領は発展し続け、現在ではトレマルク王国内でも有数の街としてここは知られている。

「ひとまず宿屋とギルドに立ち寄ってからこの街をまわるか」

街の入り口に設置されている案内板を見てこの後の予定を決め、街の中へ入っていった。

「そういうことならエンラルの宿がお勧めだ。この街は初めてなんだろう？ だったらそこが良い。中央の市場へも近いし、ギルドの館もそこからなら分かりやすい場所にあるしね」

「わかった、わざわざ引き止めてすまないな」

入り口にいた門番に礼を言い、値段とサービスが良いと巷で評判のエンラルの宿へヴァラルは向かった。

「いらっしやい。おや、見かけない顔だな。冒険者かい？」

十五分後、彼はギギイと古めかしい音を立てレンガ造りの大きな建物の扉を開いて中へ入ると、五十ほどの男がヴァラルに話しかけてきた。雰囲気からしてこの宿屋の店主なのだろう、

「ああ、ここで新しく冒険者をはじめようと思ってな。これで宿を一週間ほど取りたい。空いているか？」

ヴアラルは腰に下げていた小袋から銀貨を七枚取り出し、店主の元に差し出した。するとあからさまに彼の顔は驚き、

「おいおい、こりや多すぎだ。何の冗談だ？」

銀貨をつきかえしてきた。

「そうなのか？すまない、その辺りのことはよくわかってないんだ。良ければ教えてくれないか？」

テトスの村では何だかんだいってただで泊まり、飲み食いし続けていたヴアラルであったため、この世界での物の価値がいまいちわかっていなかったのだ。

「ああ、良いよ。しかし、随分綺麗な銀貨だな。これをどこで？」

しかもヴアラルの出した銀貨は純度が相当高いようで、そのことも相まってか店主にだいぶ怪しまれた。

彼はなぜこんなものをもっているのか？それはセラランが予めアールヴリール大陸にある貨幣をこっそりと集め、それを元にアルカデア内の金貨等を鑄潰して作り上げていたのだ。そのため、ヴアラルは貨幣を持ちながらも、その価値については良くわかっていないという不思議な状況になっていた。

「気にするな。それよりも話を聞かせてくれ」

店主はヴアラルのことを貴族の子息だと勘違いしたようで、この国での貨幣価値について親切に教えてくれた。

このアールヴリール大陸には金貨・銀貨・銅貨があり、銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨十枚で金貨一枚と同じ価値を持ち、これはどの国でも大体同じなのだとか。アルンではさらに教会が特別に発行する聖鍔金貨というものがあるらしいが、なかなかお目にかかれない代物で、金貨五枚の価値があるという。

一般的な宿屋は銅貨十枚で泊まること出来るのだが、エンラルの宿は安さを売りにしているため銅貨八枚で泊まれる。つまり、ここで銀貨七枚というのは明らかに多すぎということだ。また話を聞く限り、アールヴリールでは銅貨が主流の通貨だということもわかった。

しまったな…あっちでの金銭感覚がまだ残っているのか。

一方アルカディアでは銀貨一枚で宿に泊まること出来る。もちろんぼったくりというわけではない、むしろ安すぎて怖いくらいだ。あそこでは銀貨が住人達の間で主流の通貨となっているし、宿自体も高級なホテルとも言つべき所なのだから。

そのため、宿屋を経営する者たちは基本的に趣味の一環としてやっていることが多いという。ヘスターもいくつか経営しているらしいのだが、お見せするほどのものではないとのこと。ヴァラルを案内してくれなかった。

まあ、銀貨一枚で泊まれる所のほとんどがお前さんの持ち物だったことは知ってるけどな。しかしどれだけ金持ってたんだ、ヘスターめ…

自分の宝物庫のことを棚に上げて彼に文句をつけるヴァラルであった。

「そついうわけだ。って聞いているか？」

おっと、物思いにふけてしまった。彼は気を引き締め、口を開いた。

「ああ、よく分かった。だが、これからはここで色々世話になると思う。一枚だけでも受け取ってもらえないか？」

「そうは言っても、そんなに金があるならもつと良いところがたくさんある。なんでまたこんなところへ？」

「知らなかったのか？」

ヴァラルはセクリアの街で一番人気なのがこの宿であることを店主に説明した。

彼は門番だけでなく、道行く人たちにもお勧めの宿屋はどこであるかということを探ねまわり、結果として十人中八人のお墨付きがあったためここに滞在することを決めたのであった。

「それは光栄なことだ。話を聞いたからには貴族の冒険者様だろうが断るわけにはいかなくなったな。おっと、自己紹介がまだだった。俺はケラク、この街のことなら何でも聞いてくれ」

本当に彼は知らなかったようだ。それにケラクは話の中で色々ヴァラルのことを誤解していたが、

「俺はヴァラル、こちらこそ宜しくな。しばらくの間世話になる」

訂正するのも面倒なので彼もそのまま名を名乗り、そして二人はが

つちりと握手を交わした。

ひとまず宿は確保できた、この後はギルドだけだな。そうだ、ケラクにいるいろんな店や酒場のことを聞いてみるか。彼なら良いところを知っているはずだ。

セクリアの街に着いてこれからのことに期待を寄せるヴァラルであった。

新たな出会い

ヴァラルはエンラルの宿で部屋を借りた後、再び外へ繰り出した。街全体が夕暮れに包まれ、人々の足はすっかり早くなっていた。けれど、セクリアの街はこれから夜になることで、昼間とはまた別のにぎやかさを取り戻すこととなる。

「酒場の場所も聞いたことだし、とつとつ済ませるか」

彼は街の一角にある冒険者ギルドへ足を踏み入れた。

「ギルドへようこそ！」

受付嬢と思われる若い女がヴァラルに向かって挨拶してきた。

冒険者ギルドはこの辺りで一番大きな建物であったためすぐに見つかった。木造の建物のホールに入ると、冒険者と思われる男達がちらりとヴァラルを眺めた。が、それらの視線をやり過ぎればさっきの受付嬢に声をかけた。

「冒険者登録をお願いしたい」

ヴァラルはここに来た用件を端的に伝えた。

「はい、わかりました。ギルドへ訪れるのは今回が初めてですか？」

「ああ、そうだ」

「分かりました。それではこちらへ案内します。着いてきてくださ

い」

二人はギルドの一室にある小部屋へ案内され、ヴァラルは彼女の話
を聞くことになった。

「それでは冒険者ギルドについて簡単に説明します。ここではお客
様からの依頼を受け、冒険者の方々に斡旋するということを行っ
ています。依頼内容は魔物の討伐や商人達の護衛、薬草・鉱石の採取
や魔法アイテムの作成、遺跡の調査といった様々なものがあります。
ここまでで何か質問はありますか？」

ヴァラルは比較的質の良い紙の束を手渡され、それを読みながら彼
女の話聞いていた。

「そうだな…まず、それらの依頼は冒険者なら誰でも受けることが
出来るのか？それとここでは金を払えば身分を保証してくれると聞
いたのだがそのところを詳しく教えてもらいたい」

「わかりました。まず、冒険者にはクラスがあり、AクラスからE
クラスまでの五段階となっています。冒険者を始められる方はEク
ラスからのスタートとなり、昇格試験をクリアするとクラスアップ
ということになります。E〜Dクラスはお一人でも十分こなせる内
容が多いのですが、Cクラス以上になるとパーティを組む必要が出
てきます。特にBクラス以上ともなるとそのほとんどがパーティで
の依頼ですね。」

ギルドではクラス制を設けている。これは新米の冒険者が己の力を
過信し、高クラスの依頼を引き受けてクライアントとのトラブルや
力量を超えたモンスターに殺されるのを未然に防ぐという役割を持
っている。いくら冒険者が使い捨ての存在とはいえ、勝手に出て行

つてそのまま死んでしまうのは非常に困ることなのだ。ここでは出来るだけギルド側としても損耗を大きく減らしたいという思惑が絡んでいた。

それでも依頼の最中何が起こるかわからないため、結局冒険者同士の実力の指標くらいにしか役に立っていないのが実状ではあるが。

昇格試験の内容は主に魔物退治なのだそうだ。Dクラスの試験は比較的楽だといわれているらしいが、それでも毎回死者が絶えることはない。冒険者は昇格試験で命を落とす場合も多いのだという。

そして、冒険者はCクラスから一人前の冒険者と周囲に認められる証でもあるらしい。この世界では十代で冒険者として動き出す者が多く、その彼らが冒険者としてEクラスからCクラスに上り詰めるまで数年かかるといわれている。ローグがいったようにこの世界で数年生き残るだけでも大変なことで、Cクラスに上がることが出来るのは年に二十人いれば良い方だと言われる。

なぜここまで難しいのか。それはCクラスからパーティでの依頼が急激に増えるためDクラスのうちに仲間を見つけ、彼らと連携をとる必要性があるからだ。しかもCクラスからは昇格試験の内容がパーティを前提に作られているため、Dクラスは仲間集めのクラスともいえよう。因みに、パーティは意思統一や経済的な側面から大体四人から五人で構成されることが多いのだという。

一旦話を区切り、再び彼女は説明を開始した。

「身分の保証の件についてですが、登録をする際、冒険者の方々に金貨を一枚いただいております。それによりカードを発行し、冒険者の方の身分証明にするというわけです。くれぐれも盗難には気

をつけてください。再発行手続きは時間がかかりますし、追加で金貨を払わされますから」

ギルドカードを狙ったの盗難もあるようだ。まあ、それも当然だろう。何せ身分を保証し、国々を回るパスポートのようなものだ、貧しいものにとってはそれなりに価値のあるものなのだろう。

「わかった、気をつけるようにする」

その後は報酬の受け渡し方法、依頼者とのトラブルに関しての対応等、諸々の説明を受けた。ヴァラルは金貨を支払い、さっきの紙のうち一枚に必要な事項を記入した。勿論出身地など、ばれたらまずいことは一切書かなかった。

そして二時間後、ヴァラルはついにギルドカードを手に入れた。

これで外の世界での身分は確保できた。後はこれからどうするかだが、ひとまず今日は後回しにしよう。

セクリアの夜の街を楽しむ気満々のヴァラルであった。

ギルドの館を出るところで彼女はヴァラルに声をかけてきた。

「ヴァラル様、これから頑張ってくださいね。私達が出来る範囲でお手伝いさせていただきますので、どうかお気をつけください」

「わざわざどうも。こっちも冒険者になった以上簡単には死ぬ気はないからな」

ヴァラルは彼女に礼を言っでギルドの館を離れた。

外はすっかり暗くなり道行く人は昼よりも減ったが、店のあちこちからは笑い声が聞こえてくる。

セクリアの街での夜が始まったのだ。

「ほう、そうか。さっき登録したばかりなのか」

ケラクと同じくらいの年の男は言った。

ここは中心街を少し外れたところにあるクレーヌ亭。名前にある通り、目の前の男クレーヌが営んでいる酒場だ。とはいっても席の数は二十にも満たない。けれど様々な酒を取り揃え、物静かな雰囲気。この場所はセクリアの街の知る人ぞ知る隠れた穴場となっている。

「まあな、案外簡単なものだったよ」

この時間帯になっても客はヴァラル以外誰もいない。繁盛している

のかしてないのか良くわからないこの酒場で二人は話していた。

どうやらここは紹介制の場所のようで、それなりの客しか相手にしていないみたいだ。最初ヴァラルがここへ訪れた際クレースは怪訝な顔をしたが、ケラクからの紹介だと伝えるとあっさり態度を変えた。

「しかし珍しいな、ケラクがこんな新米をここに寄こすとは」

ここにはヴァラルのほかには様々な冒険者が通っているようだ。しかも有名どころがそれなりに。そんなところへヴァラルはこのこと来てしまったようだが、当の本人は全く気にしていない様子だった。

「まあ、気にするな。とりあえず酒と食事、それとつまみを何品か頼む」

そう言って銀貨を数枚カウンターの上に置いた。

「ほう、ただの初心者というわけじゃないみたいだな。待ってる、今作ってきてやる」

そう言って、彼は食事を作りにも奥へと引っこ込もうとしたとき、

「クレース、今は空いているか？」

一人の冒険者がやってきた。

「見慣れない顔だ。知り合いなのか？」

美しくつやつやとした流れるような長い髪をしている彼女はクレース

スに尋ねた。

「ついさっき知り合っただばかりだ。何でも冒険者になったばかりだ
そうだ」

「ヴァラルだ、宜しく」

「ああ、そういうことか。私はセレシア。ヴァラルと同じように冒
険者をしている、こちらこそ宜しくな」

明るい茶色の髪と青空のような澄んだ青い瞳をした彼女は明るい声
でそういった。

機能性と美しさを兼ね備えた赤を基調とした服を着こなし、スカ―
トと長いロングブーツをはいている彼女は凛々しさと気品に溢れ、
冒険者というよりも高潔な騎士のようだとヴァラルは思った。

年は十代の後半だろうか。若々しさに満ちているがその一方でロ―
グと同じ、いやそれ以上の実力をもっているのだろう。物腰がとて
も優雅なのだが、全くの無駄がない。その年にしてどれだけの経験
をしてきたのか。彼女はまさに冒険者の憧れの存在だった。

「成る程、セレシアはバルヘリオンから来たのか」

カウンターの席で二人は隣同士で酒を飲み、料理を食べながら互い
に話をしていた。

彼女は修行の一環として冒険者をしているのだという。身元までは

分からなかったが、ヴァラルのように何らかの事情を抱えているのが冒険者だ。そんな野暮なことは聞かないというのが彼らの暗黙のルールとなっていた。というか、初対面なのにいきなり出身地を明かすセレシアはなかなか豪胆だと思った。ヴァラルは間違えてもアルカディアから来たなんて言えるはずがないからだ。

「だが、私が国へ帰ることになってな。その前に昇格試験を受けようと思ひ、トレマルクへ来たのだ」

セレシアは最後に仲間達との思い出として受けるとのことだ。彼女が実質的なリーダーだったため、そのままパーティは解散する予定だという。そんな理由で死者が多数出る昇格試験を受けようというのだから、彼女の仲間もなかなか肝が据わっていると感じざるを得ない。だが、それ相応の実力があるのだろう、仲間達を語る彼女の姿はどこか誇らしげだった。

そして、この夜の出来事がヴァラルとシアの最初の出会いだった。

二人の関係

二人が酒場を出たのは結局あれから四時間も経った後のことで、夜の闇はさらに深くなり通りにはヴァラルとセレシア以外誰もいなかった。しかし、時折笑い声が聞こえていることからすると、徹夜で飲み明かす者が結構いるのだろう。元気なことだとヴァラルは思った。

「そういえば、ヴァラルはどこへ泊まるんだ？ここへ来たのは初めてなんだろう？」

親しげに彼女は言った。最初会ったときとは違い、少し砕けた口調になっていた。

「ああ、ケラクという主人がやっているエンラルの宿というところに泊まる予定だ。人気のところだと聞いてな」

「そうなのか！いや、私もそこへ泊まっているんだ。あそこの店主とは顔馴染みでな、ここへ来る際はよく世話になっているんだ」

「ということはお仲間達も？」

「いや、彼らは別の宿に泊まっている。皆良い奴だ。日を改めて紹介させてくれ」

「楽しみだな、それは。…今更の疑問なんだが、どうしてここまで俺に良くしてくれるんだ？まだ会って一日も経っていないじゃないか」

「それは…ヴァラルは冒険者として登録をしたのが今日なのだろう？それに私は辞める身だ。いわば冒険者として最後のおせっかいというものだ。それに…ヴァラルからは何か不思議な感じがするんだ」

「不思議な…ね」

「い、いや。別に悪い意味ではない。ただ懐かしいというか安らぐというか…ああ、もう何を言っているんだ！私は！」

自分で言っていることが良くわからなくなってしまったセレシアは気が動転したようで、ヴァラルは苦笑しながらその姿を眺めていた。

そうして二人が宿へ到着する前にハプニングが起こった。

「お！さっきの兄ちゃんじゃないか！冒険者登録は済ませたのか？見知らぬ連中だ。しかし彼らの口調からするとヴァラルのあとをつけて来たようだ。どうもギルド内でちらちらとこちらを見ている奴らがいると思っただのだが、こいつらだったのか。わざわざご苦労なことで。」

「ああ、まあな。で？俺に何のようだ？もしかして依頼でもあるのか？だったらギルドの方を通してくれ」

依頼者は掲示板で募集するほかに、冒険者を直接指名する場合もある。だが、これは有名な冒険者ではないと使われないといわれる制度だ。何せ前金と報酬は相当高額になり、冒険者自身が断ることも出来るからだ。

それでも、大抵の冒険者は指名されれば喜び勇んで依頼を受けることが多い。金も勿論そうだが、自分達が認められているという証でもあるのだ。

「へへ、いやそういうわけじゃない。ちょっとあなたの持っているカードが欲しいだけなんだ。何、おとなしくしてれば危害は加えない。とつとと渡しな」

そういつて男達は音を立てて刃物を抜いた。辺りは薄暗いため、男達の顔は見えづらい。成る程、こういうことに手馴れているみたいだ。

「そこの嬢ちゃんも俺達に着いてきてもらう。かなりの上玉そうだからな、へへッこの後が楽しみだ」

早速トラブルに巻き込まれてしまった。どうやら人攫いを兼ねた泥棒の連中のようで、ギルドから注意されたことがあっという間に降りかかってしまった。

全く、人がいい気分だったというのに最後の最後でぶち壊した。軽く相手してやるかと思っていると、

「ヴァラル、ここは私に任せてくれ」

セレシアは前へ一步踏み出していた。

「ほう、威勢がいいねえ嬢ちゃん。だが、俺達は五人。そっちは二人。手を借りないとまずいんじゃないのかい？」

「ルーキーにそこまでの無理はさせられない。それに私一人でも十分だ」

「言ってくれるねえ。それじゃあお相手願おうかッ！」

男達は駆け出した。最初の二人が様子見とばかりにナイフを見せ付けながらセレシアの前に立つ。対する彼女は腰に下げていたレイピアををすつと彼らの前に突き出した。刃先が彼らを威嚇するかのようにピツと伸ばされることで、男達はウツと思わず声を漏らした。

じりじりとした緊張感があたりを包み込むと、その空気に耐えかねたのか前にいた男の一人がナイフを振りかざした。刃先が暗闇の中でキラリと光り、セレシアに向けて凶刃が襲い掛かる。しかしそれを冷静に見極めた彼女は相手のナイフが届くより先に、

男の手をレイピアで突き刺さした。

「い、イデエエエ！！！！」

男の一人はポロリとナイフを地面に落とし、庇うかのようにもう一方の手で負傷した手を押さえた。

「やってくれたなッ！！！」

仲間が傷つけられたのを見て男達は一斉に彼女に襲い掛かった。多

少バラつきはあるが、このままではあっという間に囲まれてしまう。だが、

セレシアは何と男達の方へ駆け出していった。彼女の予想外の行動に一瞬彼らの動きが硬直してしまった。しかしその隙を見逃すまいとして、セレシアは一気に近づき、

「はああああ！！！！！！！！」

彼女の手から超高速のレイピアが男達に繰り出された。

「これはすごいな……」

彼女の戦いを間近で見ていたヴァラルは思わず呟いた。

男達とセレシアが接触したと思ったとき、彼らはどさりと崩れ落ちた。しかし、彼らはうめき声を漏らしていたため、命に別状はないのだろう。四人の男を一瞬で制し、しかも致命傷を負わせることのない卓越した技量。彼女のその姿はまさに一流の騎士だった。

今のヴァラルも拳でなら無力化することは出来るだろう。けれど、セレシアと同じように四人を同時に武器を持って戦った場合、一人ずつ無力化することになるだろう。まだ武器での制圧に慣れていないヴァラルはそのまま彼らを殺してしまうからだ。

けれど、彼女は難なくそれを成し遂げた。セレシアのことだ、殺そうと思えば簡単に出来たのかもしれない。けれどあえてそれをしな

かった。

それほどまでに実力が違いすぎたのだ。

男とセレシアの間には隔絶した力量差がそこには存在した。

「ヴアラル、すまないが警備隊の人たちを呼んできてくれないか？」

レイピアをさっとしまった彼女は男達が持っていた縄で彼らを拘束した。自分で自分の用意した縄に縛られるのはいたく滑稽だったが、

「ああ、分かった」

そのままヴアラルは警備隊を呼びにいった。

「おお、これは…」

目の前の状況をみた彼らは目の前の光景に驚いていた。無理もない、女の冒険者が一人で五人もの男を捕縛したのだ。しかも騒ぎを聞きつけたのか、現場にはたくさんの野次馬がそこにはいた。

セレシアは盗賊たちが目に見える範囲で物陰に隠れていた。壁を背にして腕を組みながらヴアラルを待っていたようで警備隊の中に見えるのを見つけると、急いで駆け寄ってきた。

「どうだった？あいつらの様子は」

「私の姿を見るなり怯えていたよ。どうやら私の顔に見覚えがあっ

たようだ」

「ん？確かにセレシアは凄い腕を持っていると思ったが…、結構有名な人だったのか？」

「私が吹聴しているわけではないんだが、その、知らない間に…なさ、後は彼らに任せよう」

「おいおい、事情も説明せずに帰るのか？さすがにそれはまずいんじゃないのか？」

すると、野次馬達は騒ぎのことよりも急に現れたセレシアを見ていたようだ。彼女の方もどこか気まずげに辺りを見回していた。

何だ…？この雰囲気は？

「あの、もしかしてBクラスのセレシア・ミアエットさんですか？」

すると、警備隊の人がヴァラルの疑問に答えるかのようにそう言った。

冒険者はCクラスで一人前と呼ばれる。けれど、その上にも当然クラスは存在する。

ではなぜ、Cクラス以上の人間がここまで騒がれるのか。それはB

クラス以上の特殊性にある。

Bクラスからは人並み以上の努力は当然のこと、類稀な才能と運を両方味方につけた者達が集結しているからだ。そのため、Bクラス以上の存在はこの世界には百人もいない。アールヴール大陸全体の冒険者は十万人といわれているため、彼女は冒険者の中でもトップエリートとして名を馳せていることがわかる。

また、Bクラスのパーティには必ずといっても良いほど魔法士の存在がある。大抵彼らがリーダーを勤めているのだが、セレスシアの場合は違う。彼女はその実力でリーダーに上り詰めたのだ。というか、魔法士の方から自らパーティに志願してきたのだ。

そのため、Bクラスの魔法士からはいやに注目され、それ以外の冒険者達は彼女を憧れと畏怖のまなざしで見るとだ。

「なるほどね…」

あの騒ぎの後、ヴァラルたちはエンラルのロビーで話していた。と
いうかセレスシアが一方的に彼を連れ込んだのだ。

「いや、決して騙そうとかそういうことは思っていないんだ。ただ、
こんな風に喋るのは本当に久しぶりだったんだ…」

どうやら彼女は何も知らないヴァラルと普通に話すことがとても楽しかったようだ。周りの冒険者達は彼女に気を使い、仲間達もどこか遠慮しがちな態度でいるのだと。だから警備隊が来たらとっと立ち去るうとしたり、野次馬達にどこかそわそわしていたのは彼に

ばれないようにするためだったのだろう。

だったら彼らをそのままにしておけばよかったのだが、そこはやはり彼女としても見過ごせなかったのだろう。いずれにせよすぐに分かってしまうことなのに、ここまで意固地になってしまうということとは彼女も色々と苦労してきたのだとヴァラルは思った。

「別に気にしてないぞ。俺もセレシアと話せて楽しかったのは事実だからな」

「そうか…そう言ってもらえるだけで有難い…それでだな、ヴァラル。厚かましいと重々承知の上で言う」

「ん？何だ？」

「ヴァラルさえ良ければさっきと同じように接してもらえないだろうか？」

…本当に彼女は豪胆だ。つまり、人目のある中でEクラスの冒険者がBクラスの冒険者に対して対等に接して欲しいという。当然、そんなことになればヴァラルは他の連中から白い目で見られることは間違いない。下手すれば彼女の仲間達からも嫌な顔をされるに違いない。

「構わない」

だが彼はあっさりと承諾した。

「い、良いのか!？」

断られるとばかりに思っていた彼女は身を乗り出して思わず尋ね返した。

「だから良いといっているだろう。誰かに敬語を使うのはあまり好きじゃないんでね。俺にとっても実はありがたい提案だったりする」

「というか、彼は滅多なことでは敬語は使わない。ほんの一部だけ例外はあるが、彼の態度はたとえ王侯貴族が相手でも一切変わらなかつたりする。」

「す、すまない。少し動揺してしまった。しかし、ヴァラルの前だと私はどうも調子が狂う…本当にEクラスなのか？」

「言っただろう？ さつき登録したばかりだつて。逆にセレシアが変なだけだ。無礼千万で引つ叩くならまだしも、そのまま接してくれだなんて大抵のやつはそんなこと頼まない」

「ふふふ、そうか。だがヴァラルも十分おかしいと思うぞ？ 私のことを知ってもまるで驚くそぶりが見えないし、さつきと全然態度が変わっていないじゃないか」

「驚くのはもう慣れたしな…それにこれが俺の性格だ、まあ気にするな。それとセレシア、俺のことはヴァルで良い。親しい奴は俺のことをそう言うからな」

そう言っている者はアルカディア内でもごく僅かだった。堅苦しいのが苦手な彼は何度も言い方を直すようアイリスやセラランたちに言っただけで聞かせたのだが、まるで効果がなかった。それでもヴァラルはめげずに広めようとしていたのであった。

外の世界でのことだが。

「分かった、ヴァル。良かったら私のこともシアと呼んでくれ、私をこのように呼ぶのは本当に少ないんだ。遠慮なくそう言ってくれ」
何と、こんなところに奇妙な同士がいた。

「そうだな、改めて宜しくだな、シア」

「こちらこそ、ヴァル」

そういつて二人はロビーを離れた。もうすっかり遅い時間だ。早く寝なければ明日に差し支える。そう思ってヴァラルは自分の部屋へ移動していたのだが、

「ん？シアもこっちなのか」

「ヴァルこそ」

二人はそのまますたと廊下を歩いていくと、部屋にたどり着いた。しかし、

「なっ！隣だったのか！」

「そっちこそ！」

お隣同士だった。

二人の奇妙な関係はまだまだ続きそうだった。

初仕事

次の日の朝、ヴァラルはセレシアと共に朝食を食べ終えた後ギルドの館に向かった。彼女はヴァラルにメンバーを紹介したがっていたが、とりあえず今日のところはお引取り願った。

何せ今日は冒険者として初めて活動するのだ。アルカディアでヴァラルがそんなことをしようものならアイリスたちが大騒ぎしてしまうため、彼は年甲斐もなく心が高鳴っていたのである。

館に到着すると、昨日の受付嬢が同じ場所で仕事をしていた。熱中しているようで、こちらにはまだ気づいていない。

こんなに朝早くから勤勉なことだ、そう思いつつ今回の用件を彼女に伝えるため声をかけた。

「昨日冒険者登録をしたヴァラルだが、早速依頼をこなしたい。何か良いものはないか？出来ればやりがいがあるようなもので」

「ヴァラル様でしたか。こんなに朝早くからようこそいらっしゃいました。早起きなんですな」

「まあな。人は少ないみたいだし、時間があるのなら選ぶのを少し手伝ってもらえないか？まだ掲示板には慣れていなくてね」

「分かりました。それでは今あるEクラスの依頼を持ってきますので少々お待ちください。それと、無理に掲示板の方を利用しないで

も私に直接声をかけてくだされば色々アドバイスを差し上げられると思うので是非活用してくださいね」

「わかった」

そうして彼女は一旦仕事を中断し奥からEクラスの紙の束をドサリとおいて、ヴァラルと共に相談を始めた。

しかし紹介されたものを手に取って吟味していくうちに彼の顔は徐々に怪しくなり、三十分を経過した頃にはすっかり曇っていた。

「他にはないのか？例えば、古代遺跡の調査とか、ニーベンスの探索とか」

二人はカウンターでうんうん唸りながら目の前の問題に取り組んでいた。

「そんなのあるわけないじゃないですか、ヴァラル様。昨日初めて登録したばかりなんですよ？」

そう、ヴァラルは何の依頼を受けるかで悩んでいたのだ。

彼が言った内容は基本的にBクラス以上のパーティが受けるもので、Eクラスのヴァラルに受けられるはずもなかったのだ。

けれどヴァラルは諦めきれず、駄目もとで聞いてみたのだが、結局無駄だったようだ。

ヴァラルは冒険者登録をする際、一つの誤算が生じていた。それはニーベンスを含む未確認の地に足を踏むことが出来なくなってしまう

ったことだ。

冒険者は軽はずみな行動をしてはいけない。身分を得て、各国のパスを手に入れると同時に彼はクラスという枷に囚われた。

しかし、それもまた当然なのかもしれない。ニーベンスや、まだ十分に調査されていない秘境や遺跡にルーキーであるEクラスの冒険者を放り出したらどうなるか。

いわずもがな、彼らはあつというまに死んでしまうだろう。

ギルドは無駄死にさせるため身分を与えたわけではない。きちんと昇格し、それから向かって行って欲しいのだ。

しかも上記の二つは個人ではなく、国という大掛かりなもので、当然報酬も良い。そのため、Bクラスイジヨウのパーティでは毎回争奪戦が繰り広げられている程、人気なのだ。

「しかし、さすがにこれは…」

Eクラスは冒険者の中でも最低クラスである。依頼も魔物の討伐や秘境の探索ではなく、店の雑用や街の中の荷物の運搬等、日雇いの労働に少し毛が生えた内容となっていた。

故に、その多くがヴァラルルにとって物足りないものであった。

「えっと、ヴァラルル様のご要望は挑戦し甲斐のあるものということでしたかね？それではこの魔物の討伐依頼は如何でしょうか？」

「どれどれ…」

彼女が一枚の依頼養子を差し出し、ヴァラルに確認を取った。そしてそこに書かれていた内容は

”コボルドの討伐”

「これは却下」

「え〜！何ですか？」

「飽き…いや、気分が乗らないからだ」

「ヴァラル様、この依頼はEクラスの方々だったら結構苦勞するものなんですよ？Dクラスの方でも油断して失敗することだってあるんです。齒ごたえのある依頼が欲しいというから見せたのに…」

ぶーぶーと彼女は文句を言う。

というか、口調が昨日に比べ馴れ馴れしくなってきた様な気がするぞ…

しかし、このままでは言いあっていただけでは埒が明かない。そう思ったヴァラルは

「その紙を見せてくれ」

「あ、ちょっと！」

受付嬢から依頼用紙の束をひったくり、自分で調べることにした。

「ふむ…」

確かに魔物の討伐は良い物がない。と言うより、討伐依頼の数自体がかなり少なかった。

さすがにEクラスに頼めるほど簡単なものではないらしい。そうすると期待出来るのは採取依頼か？

ぺらぺらと紙をめくっているとヴァラルはとある依頼に目がいった。

”ハナメキ草の採取”

「これなんかはどうだ？」

「その依頼ですか…」

ヴァラルが紙を差し出すと、受付嬢は怪訝な顔をした。どうやら何かありそうである。

「難しいのか？」

「いえ、そういうわけじゃないんです」

彼女曰く、これはレニア溪谷に生えている野草をとってこいという依頼のようだ。採取自体は比較的簡単なようだ、

「時間がかかるんですね…」

「わざわざ引き受けてくださり本当にありがとうございます…」

「ヴアラルだ。今回は宜しく頼む」

この儂げな女性が今回の依頼者らしい。ギルドの館を出た後、今回の依頼を引き受けることをヴアラルは伝え、彼女の家で詳細を聞いていた。

「なるほど、病気の治療のためということか」

「はい…」

彼女には娘がいるらしい。その子が病をこじらせ、起き上がるのもやっとな状態だという。

冒険者をしていた父親は魔物に襲われて命を落とし、現在は彼女が娘の面倒を見てきたのだそうだ。

先程ヴアラルは眠っている彼女を見たのだが、悪夢でも見ているのか時折うめき声が聞こえてきた。

これは確かに具合が悪そうだった、心配するのも無理はない。

「薬草売りのお店をいくつも訪ねたのですが、どれも手が出せなくて…」

「それで銀貨一枚だったということか」

ハナメキ草は市場の安い所でさらに値切っても銀貨五枚はかかってしまうという貴重な薬草だったのだ。

そこで駄目もとでギルドに依頼を申し込んだところ、奇跡的にもヴァラルが来てくれたと言うことだ。

「事情は分かった。それでいつまでに持ってくればいいんだ？」

「出来るだけ早くお願いします。娘の体調がだんだん悪くなっていきます…あ、す、すみません！折角来て下さったのにこんな注文をつけるような真似をして…」

「別に良い。今回はあんたが依頼者だ。ある程度は意向に答えないと…」

そういつて、ヴァラルは彼女の家を出た。

「出来るだけ早くということだからな」

セクリアの街の郊外でパリリと地図をめくり、レニア溪谷の位置と彼女から貰ったハナメキ草の絵を頭の中に刻み込んだ。

「とつとと終わらせるか！」

そして、辺りに人の気配がないことを確認し、彼は一気に草原を駆け出していった。

「ヴァル。冒険者としての初仕事はどうだったんだ？」

「まあまあだったな。ちゃんと報酬も貰った」

夜、クレーズ亭でヴァラルはちゃりんと銀貨を指で弾きながらセラシアに言った。

あの後ヴァラルは昼過ぎに出発し、夕刻には戻ってきた。かかった時間は往復四時間。

四日かかるのを僅か四時間だ。

ヴァラルとしてはハナメキ草採取の依頼は悪いものだとは思わなかった。

確かに、四日かければかなり割に合わない仕事になるだろう。

だが、もし一日で達成することが出来たのなら？

一日で銀貨一枚だ。すると途端にEクラスの中でかなり割の良い報酬に早変わりとなる。

そしてヴアラルが行うことでもかかった時間は実質四時間だったため、破格の依頼に変貌することになるのだ。

彼が戻ってきたとき、夕食の準備をしていた彼女は大いに慌てた。もしかして何か大切なもの忘れてきたのではないかと。けれど、ヴアラルが袋から取り出したハナメキ草を見て彼女はさらに驚いた。

「こ、これをどこで？」

「ああ、行く途中で知り合いに会ってな。譲ってもらった」

さすがに四日かかるところを一日で済んだと言えなかったため、彼は適当にでっち上げた。

「譲ってもらったって…そんな」

「気にするな。何というか…そいつには貸してみたいなものがあったな。それでチャラということにしてもらった」

「それでしたらその方にも是非お礼を…」

「俺の方から伝えておく。それよりも、娘さんを待たせちゃまずいんじゃないのか？具合が悪いんだろっ？」

ヴアラルは話を打ち切り、ハナメキ草を強引に渡した。

「それと、依頼は四日後に報告しておいてくれ。変な風に思われたくないもんでね」

別にそのまま報告しても良かったが、後で余計に調べられるのもまずいので一応つじつまを合わせることにしたのだ。

冒険者ギルドはヴァラルの嘘のように自身の人脈を使つての入手も許容される。ギルドはあくまでも仲介役なのだ。依頼者と冒険者の合意があつたのなら基本的には干渉の立場をとっている。

殺人や脅迫といった犯罪行為を見つけた場合には問答無用で介入してくるが。

「分かりました。ヴァラルさん、今日は本当にありがとうございました」

母親は深々と頭を下げ、礼を言った。

とりあえず、無事に終わったかな…

「しかし、初の仕事で銀貨一枚か。一体どんな依頼だったんだ？」
ついさっきの出来事に思いを馳せていたヴァラルはセラシアの言葉で回想するのをやめ、彼女の質問に答えた。

「そこらへんに生えている薬草を集めて欲しいと言う何の変哲もない依頼だ。Bクラスだったら簡単すぎるものだぞ」

「む、あまりクラスのことを出するのは止めないか？私は対等に接したいんだ」

「ああ、悪かった。つい、な」

「全く…ヴァルはときたら…」

こうして彼の冒険者としての初の仕事は終わった。

ヴァラルは多少不便ながらもこうして細々と冒険者稼業を行いつつ、各地を巡る予定だった。

だが、過ぎたる力はどんなに隠してもいずればれてしまう。

そのことを彼が知るのもう間もなくのことであった…

Eクラスの冒険者

最初の冒険者としての依頼を終えた彼は、彼女がギルドに報告するまでの間セクリアの街の周囲の自然の調査をしていた。

調査と言ってもそんなに仰々しいものではなく適当にぶらぶらしていただけなのだが、彼は傷薬となる野草や料理に使う数集類のハーブを採取していた。

ちなみに、この採取はギルドからの依頼ではない。街中で見つけた店の一つに様々な野草を買い取ってくれる商店があったため、散策のついでに引き受けたのだ。

「よし、これ位で良いだろう」

ヴァラルは細かく分けられた籠にそれぞれの草を入れ、時間の許す限り摘んだ。この後、彼には用事があるのだ。

そうしてヴァラルは瞬く間にセクリアの街に到着し、買取をしてくれる商店に足を運んだ。

「いらっしやい、ってヴァラルか。どうだった？成果の方は」

「ほら、これだ」

彼はドサリと籠いっぱいに入った薬草やハーブの山を見せた。

「ほお、初めてにしては中々上出来じゃないか。どれ…」

店主は驚きながらも見積もりに入った途端商売人としての厳しい目つきになった。大抵最初に持つてくる連中はそこらへんに生えてい
る草を入れ、水増しをしてくる輩がいる。そのため最初は店主も警
戒していたのだが、徐々に満足げな表所になっていた。

「よし、いくつか違うのがあったが十分だ。…ほら、これが今回の
金だ」

「どうも。って少し多くないか？」

店主がヴァラルに渡した金は銀貨三枚。二枚程度だと思っていたが、
どうやら余分にくれたようだ。

「何、真面目にやってくれた礼だ。ここ最近はお前さんみたいな奴
はいなかったからな。ま、とっておけ」

「分かった。遠慮なく貰っておくことにする」

ヴァラルは店主の厚意を素直に受け取り、銀貨を懐にしまった。変
な遠慮はせず貰えるものは貰っておく、彼の心情の一つである。

「ははッ。そういう態度悪くないぞ。どうだ？この後一杯やらない
か？」

「すまんな。この後用事があるんだ」

「ほっ？女か？」

ニヤニヤしながら店主はヴァラルに尋ねた。

「その知り合いと会うだけだ」

所変わってここは街にあるマノドールの酒場。クレース亭ではなく、今回はここでセレシアと待ち合わせしているのだ。

中へ入ると冒険者や街の市民達等、様々な人たちでこった返している。クレース亭のような落ち着いた雰囲気ではなく、酔っ払っている客が多いのかここでは皆活気づいていた。

その喧騒のなかで一際目立つ集団があった。セレシアたちだ。彼女の美貌はどこに行っても非常に目立つようで、少し窮屈そうにしていた。

「あれがシアのお仲間というわけか」

テーブルには頑丈そうな鎧を着こなした男と、旅人のような男、そして魔法士と思われる女がいた。やはり彼女のパーティーメンバーだけあってそれぞれが一流の冒険者と言う貫禄を周りに見せ付けていた。

そして彼女はヴァラルが店に入ってくるや否や椅子から立ち上がり、スタスタと近づいてきたかと思うと、

「遅いぞ、ヴァル。待ちくたびれたぞ」

開口一番そう言った。好奇心な視線に晒されることでセレシアは少し

不機嫌なようだった。ヴァラルが来るまでそれを我慢していたが、つい噴出してしまったようだ。

全く、このお嬢さんときたら…

「悪い、次からは気をつける」

時間はそれなりにあったのだが、余計な口を挟まずとりあえず謝った。

それからセレシアはヴァラルの手をとって自分達のところへ連れて行った。その途中、酒場にいた客達は見知らぬ男の手を掴んでいる彼女に驚きをあらわにしつつも、とりあえず平静を保っていた。

このときはまだ。

そして彼女を含めた四人とヴァラルの合計五人が集まった。Bクラス冒険者四人の中にEクラスの冒険者が一人というなかなか奇妙な光景がここでは見られた。

「皆には事前に伝えたように私の隣にいるのがヴァラルだ」

「宜しく。セレシアから色々話を聞いている。皆凄いやつだな」

「へえ、ということはこの俺様の輝かしい武勇伝も知っていると言うことか？」

分厚い鉄の鎧を着たこの男の名はグレインという。その持ち前の巨体で数々の魔物をしとめた男であり、彼女のパーティ最前線を進んで買っている勇敢な男だ。

「勿論だ。クレーヌ亭の店主に酔っ払って突っかかった挙句、出入り禁止になったことも知っている」

「な！？それを言われるとこっちもつらい……」

途端に彼は口調が静かになった。

そう、今回ここで集まった理由はグレインにあるといっても過言ではない。彼のせいでクレーヌの店が使えなくなったため、急遽ここで集まることになったのだ。

グレイン抜きでやっても良かったのではとヴァラルは思っていたのだが、さすがにそれはかわいそうだとセレシアが言ったため、彼も交えての参加となった。

今はこうして不機嫌な彼女だが、何だかんだいって仲間思いなのだ。

「彼のことは放っておいて…始めまして、私はソイル。弓を専門に扱っています」

しよげているグレインを無視し紳士的な口調でこういったのはソイル・デニクス。彼はここトレマルク王国で貴族の地位を持つ男である。パーティの解散に合わせ、彼は王国の貴族のデニクス家からは非うちに来てくれないかと声を掛けられたのだ。

「ああ、こちらこそ。弓だけに限らず、森や山の知識も詳しいようだな」

「ええ。自慢じゃありませんが新たなところでは、私をそっちの方

で買っていただいてるようなので」

デニクス家の領地は自然豊かな場所である一方、デパン伯爵のように開発が上手くいっていない。そのため、彼の冒険者で培った経験と技能をもつ人材を欲していたのだ。

「それでもソイルさんのおかげで私たちはかなり助かっていますよ」

「何を！俺様だってばったばったと魔物を狩ってるぜ。ソイルのキザ野郎より、ここは俺様を褒めるところだろう！」

「ひゃっ！？す、すいません！」

いきなり復活したグレインにぺこぺこしている彼女は魔法士のエーニス。ヴァラルは最初魔法士と聞いたときアザンテのように傲慢な奴を想像していたのだが、目の前にいるのはびくびくしている少女が一人いるだけだ。

エーニスはその性格のため魔法士にもかかわらず他の冒険者達から良いように扱われてきたようだ。それを見るに見かねたセラシアが仲裁に入り、このことがきっかけでエーニスは彼女達と知り合いになったという。

目の前ではグレインがいつの間にかソイルと言い争いを始め、それをおろおろしながら見ているエーニス。そして仲裁に入るセラシアがいた。ヴァラルを紹介するこの催しは早くも崩れ去っていたが、彼は目の前で起きている光景をかつての自分達と重ねていた。

あのときは随分と馬鹿なことをやったもんだな…

彼はふと昔のことを回想していた。

「悪い悪い。つい調子に乗っちゃまった」

場が収まったところでグレインがヴァラルに謝った。酒が入ると悪酔いするというのは本当のようだ。

「別に気にしてない。似たような奴を見てきたからな」

こうして、再び彼らの話をヴァラルは熱心に聞くことにした。グレインは農民出の冒険者であること、ソイルがセレシアと出会う前の旅先での話、そして魔法皇国ライレン出身であるエーミアの魔法学院の出来事など、ヴァラルにとって興味深い話ばかりだった。

特に魔法学院の話は実に気になった。何せ知り合いが理事長と学院長だ、気にならないわけがない。機会があればこちらの世界の学院に訪れてみるのも良いだろう。ヴァラルはそんなことを考えていた。

「それにしてもヴァラルさんはグレインさんを見ても全然怖がらないんですね」

一通り話を聞いた後、酒を飲みながらつまみをもぐもぐと食べている彼にエーミアは言った。そもそもEクラスの冒険者がこの場にすつかり溶け込んでいるという異常事態が起こっているのだが彼女はそれに気づかずヴァラルを褒めていた。

「そうですね。大抵の人はグレインの強面で緊張する人がたくさんいるようですが、あなたはそうでも無さそうだ」

「誰が強面だ、ソイル。男溢れるダンディな顔と言え、馬鹿」

三人もまた口ではああ言いつつも何だかんだで強い信頼関係で結ばれているようだ。

そうでなければBクラスが勤まるわけではないということか…

「安心しろ、グレイン。ヴァルはちゃんとお前の事を見ている。現に私のことだって最初会ったときから態度は変わっていないからな」

「げ、セレスシアの姉さんがそんなことを言っただなんて…あんたまさか!？」

「ああ、シアと呼んでいるぞ」

その瞬間、酒場全体が一気に静まり返った。あんなに騒がしかった酒場が一瞬でだ。

と言うか全員さり気無く聞き耳を立てていたのか…

「かあ〜！羨ましいことだ。俺にはとても言えねえ」

そんな雰囲気など関係無しにグレインは言った。

「驚きました。まさかセレスシア殿をそんな風と呼ぶ人がいるだなんて…」

「私もです。本当にびっくりしました…」

二人もまた驚きの表情でヴァラルの顔をまじまじと見ていた。

セレシアはそんな彼らの反応にうんざりしたかの表情でため息をついていた。

…何だ？そんなにもおかしいことなのか？

「グレインも言えば良いじゃないか。同じBクラスだろう？シアも別に良いと言っていたぞ」

「そういうわけにはいかねえ。一応俺達のリーダーでもあるし、それに…」

「それに？」

「おっといけねえ、つい口が滑っちゃまった。ははッ、まあ忘れてくれ」

おいおい、それはないだろう…

話を聞く限り彼女にはBクラスの冒険者という肩書きの他に、何かがあるようだ。セレシアはヴァラルと会う前に仲間達に口止めしていたようで、ポロリと喋ったグレインを氷のような冷たい目でキッと睨んでいた。

…まあ良い。誰にでも秘密の一つや二つはある。いちいち問い詰めることもないだろう。

「分かった…ならこの話は一旦やめだ。ちょっと外に出てくる。少し飲みすぎたようだ…」

「大丈夫か？ヴァル、もしかして気分を悪くさせてしまったか？」

セレシアは心配した。さっきのことで彼に対して引け目を感じたのだろう、その顔はどこか物憂げだった。

「すぐに戻ってくる。心配するな」

そういつてヴァラルは酒場を出て行った。彼はただ飲みすぎで気分が悪くなったわけでもないし、セレシアのことに対して怒っていたわけでもない。

ただ煩かったのだ。周りからの視線が。

「…で、さっきから俺のことをじろじろと見ていたのはお前達か？」

酒場はヴァラルの爆弾発言の後再び喧騒に包まれたものの、相変わらずヴァラルを鬱陶しげに見ていた連中がいた。それが目の前にいる彼らである。その数は十人。セレシアのときとは違い数は倍で、しかも全員が冒険者達だ。

ここはセクリアの裏街道。唯でさえ人通りが少ないここは夜になることで人の姿はヴァラルたち以外は誰もいない。

「ふん、セレシアさんたちに言わなかったのは褒めてやる。けどね、少し調子に乗りすぎじゃないか？」

「大方彼女に気に入られたからこそまでいい気になっているのさ。本当は彼女達に敬意を持って接するべきなんだ」

口々に彼らは言う。どうやらCクラスの冒険者であり、セレシアのファンのような感じだ。態度がなっていない、もっと愛想良く振舞え等等など、ヴァラルにとってどうでも良いことを延々と語っていた。

「で、結局お前達は何がしたいんだ？」

彼はとつと話を進めるため彼らに言った。

「そうだな…とりあえず殴らせる。これはいわば新人への歓迎なんだ。おとなしくしてろよ」

「何だよ…そんなことのためにこんな長話に付き合っていたのか、なら早くしろ。あんまり心配させるのも不味いんでな」

「ふっ、ただで帰れると思うなよ」

指をボキボキと鳴らし彼らは徐々に近づいてくる。彼らは本当に痛めつけるだけのようで武器は使わないようだった。そうこうしているうちにヴァラルはあっという間に囲まれてしまった。

そして冒険者が一斉にヴァラル打ちのめそうとしたとき、

そのうちの一人がまるでぼろ雑巾のように大きく吹き飛んでいき、路地にあつた資材が大きな音を立てて彼の元へなだれ込んでいった。

「俺も反撃するけどな」

啞然とするCクラスの冒険者達をよそに、ヴァラルは淡々と告げた。

「お、お願いします！許してください！もうあんなことは言いませんから！！」

「駄目だ」

バキツつと何かが碎けるような音が響き、冒険者の男がまた一人崩れ落ちた。

一人が吹っ飛んだ後、ヴァラルは鬱憤を晴らすかのように次々と彼らを殴り飛ばしていった。ヴァラルはスローモーションで見える彼らの攻撃を避けては拳を繰り出すと言う単純なことを繰り返しており、その間ひたすら彼らを死なせないよう別の方面で全力を尽くしていた。

Eクラスの冒険者がCクラスの冒険者を一撃で倒していくのを見て、恐怖のあまり武器を持ち出すものもいた。けれどそんな愚か者に対してはさっきの男のように容赦なく顔面に拳をめりこませた。

「なんだよ、Cクラスとか言っておきながらこんなものなのか？Eクラスなんだろう俺は？」

呆れた口調でヴァラルは最後の冒険者の男に言う。

「あ、あんたがおかしいだけだ……」

震えながら彼に言った。辺りでは倒れた冒険者達がうーうーと苦しげにうめき声を漏らしていた。自分もこの後彼らの仲間になるかと思つとぞつとしていたのだ。

彼らは一流の冒険者を名乗るだけあつて幾多の魔物を狩り続けた。そのため、人間相手なら大抵の連中にも勝てると言つ自信があつた。しかも相手はEクラス、彼らが全員経験してきたのだから力量は大体把握しているつもりだった。さらに、この間も生意気な冒険者を痛めつけてきた。警備隊に聞かれたとしても目撃者は誰もいない。何の問題も無いはずだった。

けれど舐めた結果がこれだ。

「そうか？セレシア達は凄いと思つたんだがな……成る程、つまり彼女らは特別だったと言つわけか」

妙に得心が言つた顔でヴァラルは言つた。

その雰囲気はさつきまで冒険者を相手にしてきたものとは思えないほど軽薄なものだった。

「な、なあ。実は彼女の秘密を知っているんだ。長いことファンをやっていると、そういうことも分かるんだ。見逃してくれたのなら

それを教えても良い。どうだ？」

いきなり彼は変なことを言い出した。それはファンではなくストーリーカーなのではないかと思わず突っ込みを入れたかった位だ。

「結構だ。シアのプライベートを探る気なんぞ俺はさらさらない。あいつが話すまで気長に待つことにするさ」

「そ、そんな…」

「そういうわけでお前もとっと消えな。もう格下相手にこんな真似はするなよ。はつきり言って反吐が出る。そんなことをする暇があるならとっと自分の腕を磨きな」

スタスタと彼は近づいてくる。このまま見逃してもらえればどんなに良いだろうと男は思っていたが、ヴァラルの目はしっかりと冒険者の行動を見ていた。まるで何者をも逃がさないかのように。

「あいつの家はな、帝国のツ！？」

あまりの緊張にパニックになった男は何かを口走ろうとした。しかし、

「五月蠅い黙れ」

ヴァラルは拳を顔面に乗せてその口を強制的に黙らせた。

「十人もいて何をしているんだ…お前達は…」

暗い暗い夜の裏街道で、彼は嘆かわしげに言った。

「ヴァルか!？」

「おお、心配したぜ！」

「人騒がせな男ですね」

「よかった…」

四人が口々にヴァラルを見かけるなり急いで駆け寄ってきた。あまりにも遅いと言うことでセレシアが外に出たところ、酒場の周りには誰もいないことでかなり心配を掛けてしまったようだ。

もう少し遅かったのならば自分達で探しに行こうとしていたほどだという。どうやら少し時間がかかってしまったようだ。

これでもまだ十分も経っていないはずなんだが…どれだけ心配性なんだ…

だが、ヴァラルとしては不快な気持ちにはならなかった。むしろかなり嬉しかった。

そしてあの日からセレシア、グレイン、ソイル、エーニスの四人と行動を共にすることが多くなった。昇格試験までの間彼らはやるこ

とがなくて暇だったと言うこともあるのだが、ヴァラルに冒険者としての依頼に色々と付き合ってもらっていた。

ギルドでは原則としてEクラスがBクラスの依頼を引き受けると言うことは許されないが、その逆の場合は許可される。

これもまた依頼者と冒険者との間で解決すべきことと言うこともあるのだが、先輩冒険者が後輩の面倒を見ると言うことは度々あるようだ。

けれど、それもDクラスがEクラスの冒険者を教えるというのが精々だった。何せCクラスからはパーティでの行動が基本なため、個人の面倒を見ると言うことは基本的にありえなかったからだ。

だから、ヴァラルがギルドに彼女達を連れて行ったときは受付嬢に非常に驚かれた。

「えっと…セレシア様たちは本当にそれでよろしいのですか？他にも良い依頼がたくさんありますが…」

「気にしなくて良い。元々ヴァルに無理を言っついて来たのだ。私たちのことはそのおまけと思っってもらってかまわない」

「ですが、さすがにこれは…」

そう、今回の依頼は例の”コボルドの討伐”だった。本当はヴァラル一人だけでも十分、いやどう考えても絶対的な実力差があったのだが、そのことを知らない彼らはヴァラルが初の討伐依頼を無事に達成できるかどうか気になっていたようだ。

彼は普段通りの実力を出せないことに多少鬱陶しさを感じていたが、彼らが厚意で付き合っているのが分かっていったため余計な口は挟まなかった。何故なら、報酬はヴァラルが全額貰い受けることになっていたのである。

Cクラス以上の冒険者はパーティでの依頼がほとんどであるため、報酬もDクラスに比べると凄まじいものになる。結局それを分け合うことにはなるのだが、それでも一人頭の稼ぎは遥かによくなることは確かだ。

それがBクラスともなればさらに顕著だ。そのためパーティで下のクラスを受けない理由はここにある。

報酬が少ないからだ。

冒険者は命を金に換えて依頼を受ける。一度目の眩むような大金を目にすればもう戻れない。彼らの大半が貧民の出だ、ある意味それが必然でもあった。そのため、今回の出来事はギルドを大いに騒がせた。

ヴァラルとしては本当にそれで良いのかと彼らに念を押したが、もうすぐパーティは解散するのだから、そのときまでは好きにさせて欲しいと彼女らは言っていた。

命を掛ける冒険者を舐めきったその姿勢に他の者たちは激怒するだろう。けれどヴァラルはそんな彼らに感謝した。

この世界は過酷だ。実力のあるものはどんどのし上がるが、その一方で命を落とすものが後を絶たない。ゆえに、セレスシアたちのような存在はどれだけ稀少だということを身にしみて彼は理解してい

だからだ。

ヴァラルに絡んできた冒険者連中とは違い、Eクラスだということ
でヴァラルを決して見下したり蔑んだりしない。それどころか助け
の手を差し伸べる。彼以外にも助けられた者は大勢いるだろう、だ
からこそ彼らは実力と相まってここまで上り詰めたのだ。

お人よし過ぎるところがあるが、それでもセレシアの言った通り、
良い奴ばかりだな…

ヴァラルは改めて思った。

「君、ちょっと良いかな？」

ある日のこと、警備隊の一人にヴァラルは声を掛けられた。どうや
ら以前の冒険者達のことと話があるようだった。

あいつらめ、結局言ったのか…

彼はあの連中が何も言わないと思っていた。何せ一人に対して十人
がかりで痛めつけようとしたところを返り討ちにあったのだ。まず
プライドは折れ、そんな汚点を誰にも言えるはずはないと考えてい
たからだ。

けれど、彼らは恥も外聞も無かったようだ。面倒くさいなと思いつ
つヴァラルは適当に警備隊の質問に答えていた。

「言っただろう？あのときは酒場の外にいたが、俺はそんな奴らは知らない。誰かと間違えたんだろう」

「しかし、彼らが言うには確かに黒髪の男だったと言っていた」

「おいおい、考えてもみる。どうやったらEクラスの冒険者がCクラスの連中を痛めつけることが出来るんだ。俺はまだ冒険者になつて一月も経っていない新米なんだぞ？」

「それは……」

「どうしたんだ、ヴァル」

「ああ、シアか。丁度良いところに来た」

そこへセレスシアたちがやってきた。ついでに彼女達にも弁護してもらおう。

警備隊の話聞いたセレスシアは最初は真剣に聞いていたのだが、後からは怒ったような表情に変わった。

「何だそれは！ヴァルがそんなことをする男だと本当に思っているのか！」

「そうだが、大体理由も無いのにいきなり襲ってきたとか信じられないな」

「現実的な話をしてどうやって彼らを相手にできると言つのです。仮にもCクラスなのでしょう、彼らは」

「確かあのときは十分も経っていないはずですから…その間に彼らを倒すとなるとちょっと考えられませんか」

四人が口々に言う。こういったとき数の力は有利だとしみじみ思っていたヴァラルであった。

「彼女達の言った通りだ。逆に彼らのことをもっと調べたらどうだ？きつと何かがあるはずだ」

「わ、わかった。時間をとらせてすまなかった」

彼女達の気迫に気圧されたのか警備隊の一人はさすがごと引き下がっていった。

その後、男達は複数の冒険者達から私的な制裁を受けたとの報告が上がり彼らはそのままお縄となった。

いくら冒険者とはいえ、街の治安を守っているデパン伯爵には勝てなかったようだ。

とりあえず、何とかなつたか。こういうごたごたは勘弁して貰いたい…

そしてヴァラルたちはその後もEクラスの依頼を淡々とこなしていった。どれも非常に簡単な依頼だったが、それでも、報告するたびにヴァラルは周りの人たちから驚かされていた。何せ、Bクラスのセ

レシアたちと行動しているのだ。そのため良い意味でも悪い意味でもヴァラルは注目的になっていたのだ。冒険者として有名になると言うことはこのような好奇の視線を一身に集めると言うことを身をもって味わっていた。

そのため彼は彼女達と別れた後は、このまま気の向くままにEクラス
の冒険者としてのんびり世界を回ろうと考えていた。Aクラスの
冒険者だなんてもつてのほか、あいつらは一体どういう神経してや
っているんだと思いつつ一仕事終えたヴァラルなのであった。

ところが、そうも行かない事態が彼を待っていた。

「君、ちょっと良いかな？」

今日も彼女達と街の酒場めぐりをしようと思っていた矢先に宿屋の
前で一人の男に声を掛けられた。風貌からして以前の警備隊のよう
なものだろうか。だが、やたら立派な鎧を着ている。どうやらトレ
マルク王国の騎士のようだ。

「君がヴァラルかい？」

若い男の騎士が尋ねた。

「そうだが、一体俺に何のようだ」

訝しげに彼は言い返した。何か嫌な予感がする、本能がそう告げて
いた。

「いやなに、別に大したことじゃない」

騎士の男は本当に簡単なことを言うかのよつに一日間を置き、

「テトスの村でのことを聞きたくてね」

ヴァラルに淡々と言った。

そして、この日をもって彼の平凡な日々はガラガラと音を立てて終わりを告げた。

アザンテの正体

「伯爵が君の事を探していてね。テトスの村の出来事について詳しい話を聞きたいらしい」

エンラルの宿の前で騎士は飄々とヴァラルに言った。辺りは道行く人がそれなりにいるはずなのだが、何故か二人の周りには誰もいなかった。

「俺は何も知らない。事情を知りたいのなら、そのテトスの村人に聞いたらどうだ？」

ヴァラルはしらばっくれた。目の前の騎士にいちいち付き合っていたらきりがなし、無駄な足掻きだと思いつつ一応は抵抗した。

「それがもう聞いた後なんだよね。ローグだったかな？彼もこの街に来ているんだ」

「何だと？」

あいつがここへいるのか。だがありえないわけじゃない。テトスの村の住人ということなら彼がここへやって来るのもまた道理なのかもしれない。

「アザンテを倒したから引き取ってくれて報告があつてさ。だけどアザンテって結構有名な魔法士で、引退した冒険者一人でどうにかなる相手ではないんだ。詳しいことを話さないと懸賞金を渡せないと言ったら、ヴァラルという冒険者なら事情を知っている。だから彼に聞いてくれとの一点張りさ。そういうことが伯爵の耳にも

届いて、現在僕がここにいるというわけだ」

ヴァラルは舌打ちしたい気分になった。口止めとして懸賞金を渡しただすがこういうことになってしまつとは。しかもアザンテは魔法士の中でもかなりの使い手だったようだ。そのこともまた彼を重たい気持ちにさせた。

しかもトレマルク王国のデパン伯爵が直々に調べていたという。正直言つてこのまま逃げ出したかつた。

「分かつた…とりあえず伯爵に会えば良いんだな？」

けれどヴァラルは渋々了承した。先延ばしにしたところで結局は意味がないと悟つたからだ。

「すまないね。そうしてくれるとありがたい」

男の騎士は言った。

「シア、今回の酒場めぐりの件だが俺は遠慮させてもらつ。急に野暮用が出来たんでな」

先に宿へ帰っていた彼女の部屋の前でヴァラルは言った。

「ん？隣の男は…ってトレマルクの騎士じゃないか。ヴァル、一体どこで知り合つたんだ」

セクリアの街にも警備隊とは別に伯爵に仕えている騎士がいることは知っている。けれどその一人がヴァラルに用があることが信じら

れなかった。

「そこでちょっと色々とあってな。心配するほどのことじゃない、三人にもそう伝えておいてくれ」

「…わかった。くれぐれも気をつけて」

そんなやりとりをセレシアと交わした後、二人はデパン伯爵の住んでいる屋敷に向かった。

ヴァラルがその途中で色々伯爵のことについて質問したが、騎士の男の話を聞く限り、デパンはなかなかのやり手のようだ。

これは注意していかないと…彼は気を引きしめた。

伯爵の屋敷に到着し来賓用の客室に案内されると、そこにはローグがいた。すると彼はヴァラルを見るなり申し訳無さそうな顔を浮かべていた。

「元気そうで何よりだ、ローグ」

しよぼくれた表情をしていたが、この様子だと体の方に問題は無さそうだった。

「ヴァラル、すまない。村を助けてくれたのにこんな恩を仇で返すような真似をして…」

「別に良い。俺も危害を加えられたわけでもないし、あの村も金が必要だったんだろ？こうなった以上仕方ないさ。それよりも村の人たちはどうだ？」

「ああ、サリスや子供達、カウンも元気だ。村の人たちから、ヴァラルに会うことがあるのなら是非礼を言って欲しいと伝言を頼まれてな。確かに伝えたぞ」

「わかった。カウンたちにもよろしく伝えておいてくれ。…っと、そろそろ来るみたいだな」

二人が再開の言葉を述べていたその直後、ガチャリと客室の扉が開き、伯爵が中へ入ってきた。

デパン・ラーノイル。若干二十にしてラーノイル家の当主として、トレマルク王国に仕える貴族の一人である。彼は身分の差を問わず能力のあるものを次々と登用することで、みるみるうちに王国の中でも大きな発言力を手にした男である。しかもこの国の王子と学生時代に悪友として名を轟かせていたようで、今でも個人的な交流があるのだという。

こいつは油断ならない奴だ…

伯爵という地位に驕ることなく彼なりに努力してきたのだろう、才気あふれる彼の姿を見てヴァラルはそう思った。

「君がヴァラルか。私はデパン、この地域の領主をやっている」
人を不快にさせない落ち着いた態度で彼は言った。

「わざわざEクラスの冒険者を呼び出してくるとはね…随分と俺のことを買って頂いているようで」

皮肉にも似た口調でヴァラルは目の前の男に接した。最初に下手に出て舐められては元も子もないからだ。

「謙遜はいい。Bクラスの冒険者と共に行動する不思議な男がいると聞いていたけど、まさかテトスの村のことを知っているとは思わなかった。ローグからそのことを聞いてびっくりしたよ」

「もしかして俺はヴァラルという名を騙る違う奴かもしれないぞ。」

「そんなの、君の態度で大体分かるよ。大抵の人は私を見ると萎縮するみたいだからね。なのに君はものともしない。それに人を見る目はこれでも多少あるつもりさ」

チツ：分かつてはいたがどうもやりにくいな…

「わかったわかった。どうやらはぐらかすのは無理みたいだな。それで？伯爵自ら出向いて俺に聞きたいことは何だ？」

「話が早くて助かるよ。それでは単刀直入に聞く、君がアザンテを倒したのかい？」

このときばかりは真剣に聞いてきた。さっきまでとはまるで雰囲気が違う。さすがに伯爵と言う地位を持つだけのことはあるなとヴァラルは思った。

「質問を質問で返すように悪いが、それを知ってどうするつもりだ？」

彼もまたその間に疑問を呈した。答えによっては斬り捨てることもやぶさかではなかった。彼もまた真剣だったのだ。

「いやなに、別に君を利用しようとか始末しようとかそういうことじゃないんだ。ただ、このことはいずれ王国とライレンに報告しなければならぬことなんだ。だから正確な情報を把握しておきたいと言っのが本音さ」

しかし、今度はあっさりとした表情でヴァラルに答えた。本当にそれしか考えていないかのようにあっけからんとしたものだった。

嘘をついているようには見えない。しかも、ローグは本当に黙っていてくれたようだった、

…それなら少しくらい話しても問題はないか。

「お前さんにも事情があるということがわかったよ……ああ、本当だ。俺がアザンテを倒した。ついでに盗賊たちもな」

「ッ！どうやって？」

彼はまた真剣な表情になった。あまりにも呆気なく白状したことに少々驚いたが、デパンはすぐさま尋ね返した。

「別に何もしていない。ただあいつらの手下とまとめて相手してやっただけだ」

「…」

「…」

ヴアラルの言葉を聞いた二人は沈黙した。

デパンは何かを考えるような表情になり、ローグは得体の知れないようなものを見る目で彼のことを見ていた。

「…なあ、それって本当のことだよな？」

「何言ってるんだ、ローグ。お前も見ていたんじゃないのか？」

「いや…それは…」

彼の言葉で、ようやく以前の出来事が改めて現実として認識できた途端、ローグは尋ね返していた。

それからは一分ほど誰も喋ることはなく、こちこちと時計の音が応接間に響いていた。

「…何だ？言いたいことがあるならさっさと見え。あいつを倒したからって何か問題があるのか？」

ヴアラルは沈黙を破るかのように言った。さすがにこの空気がずっと続くのは勘弁願いたい彼であった。

「いや、すまない。事態を把握するのに時間がかかってしまった」

「おいおい、伯爵様とあるうお方がそんな真剣に悩むほどのことじゃないだろう、こんなこと。ほら、俺からの話はこれで終わりだ。」

後はローグに金を渡してやってくれ。あの村も大変なんだ」

「デパンで良い。…ヴァラルは彼を倒したことについて何の感慨も沸いていないようだけど、事はそう単純じゃないんだ」

「…何だと？」

「またもや嫌な予感がした。」

「ヴァラル、良く聞いてくれ。そもそも一人の冒険者がアザンテを倒すこと自体、ありえないことなんだ」

ローグは震えを誤魔化すかのように冷静に言った。

「トレマルク王国に限らず、魔法士はどこでも優遇される。それは単に魔法が使えるからというわけではない。」

「強いのだ、一人ひとりが。」

デパン曰く、Bクラスの魔法士を相手にするためにはCクラスの冒険者を十人同時に差し向けなければならぬらしい。Bクラスの冒険者を相手にすれば魔法士の方も苦戦は免れないだろうが、それでも数人同時に相手にすることができるのだという。Aクラスの場合には言わずもがな、相当の犠牲を覚悟しなければならないそうだ。

「セレシアがそこいらの魔法士に負けるとは思えないのだが…」

「彼女は別格だ。Bクラスいや、もしかしてAクラスの魔法士と互角の勝負をするだろう。けれどギルドの魔法士とライレンの魔法士は少し事情が違うんだ…話が逸れた、続けるよ」

デパンは話を再開した。

そして今回ヴァラルが倒したアザンテは、ライレンの誇る宮廷魔法士の一人として仕えていたという。

魔法皇国ライレンはトレマルク王国のように冒険者を戦力として雇い入れたり、バルヘリオン帝国のように強大な軍事力を持っているわけでもない。

一応軍と言うものはあるにはあるが、彼らの本当の戦力は宮廷魔法士団であり、そこに籍をおいているということは魔法士の中でもエリートと言う証でもあるのだ。

つまり、ヴァラルはそんな化け物じみた魔法士を一人で倒してしまっただということになる。

「そういうわけで、君のしたことは遅かれ早かれ王国中に知られることになる。当然すぐに他の国も黙っちゃいない。特にライレンなんて相当慌てるだろう。魔法士の優位性を覆されたんだからね」

「…」

ヴァラルはまた頭が痛くなっていた。やたら高慢な奴とは思っていたが、まさかそんな大物だったとは…

「…今このことを知ったみたいだね。まあ当然か。とりあえず今日はもう遅いからここへ泊まっていくと良い。宿の方にはこちらから伝えておくよ」

「だが、この後が問題だ、デパン伯爵。ヴァラルはEクラスの冒険者だ。そんなことまで知られたらもうどうしようもないんじゃないか？」

ローグが何も言わないヴァラルの代わりに伯爵に言った。ただでさえ彼は冒険者登録をしたばかりなのだ。そんな輩に犯罪者とはいえ宮廷魔法士が倒されたのだ。そうなれば混乱は必至だった。

「付け焼刃だけど、策が無い訳じゃあないからね。また明日話し合うことにするよ」

今日のところの話し合いは一旦終了になったが、この後ヴァラルはベッドの中で一晩中苦悩し続けることになったのである。

「なんですか？デパンさん。こんな夜遅くに」

深夜、ここはデパンの屋敷にある執務室。彼はそこにとある男を呼んでいた。

「すまないね、モーロン。実は緊急の頼みごとがあるんだ」

「何です？一体」

「ヴァラルという冒険者を知っているかい？」

「ああ、セレシア達と一緒にいる男のことですか。そりゃもう」

「実は彼のことに関してなんだ」

「へえ、やはり気になりますか」

「ああ、これから昇格試験があるだろう？申し込み期間を過ぎているはずだが、そこに彼をねじ込めないか？後で本人に確認を取っておくからさ」

「それは…まあ良いですけど、大丈夫なんですか？彼はまだ初心者なんですよ？いくら彼女達がアドバイスをしたとしても、いきなりDクラスは厳しいんじゃないですか？」

「いや違う。彼を入れるのはそこじゃ無い」

「じゃあどこですか？まさかCクラスとか言うんじゃないでしょうね？冗談はよしてくださいよ、もう」

「Sクラスだ」

伯爵の提案

「…本気で言ってますか？」

モーロンはまじまじとデパンを眺めた。

トレマルク王国のギルドマスターを勤める彼はデパン伯爵から火急の用件があると知らされ、わざわざこんな夜中に呼び出されたのだ。たまたまセクリアの街に泊まっていたことが運のツキだった。

「本気だ」

当然だと言わんばかりに彼は言った。デパンは一度決めたことはとことんやりぬく男だ。その彼がここまで真剣なのだ。戯言を言っているわけでは無さそうだった。

「分かっているんですか！？彼はまだEクラスなんですよ！？」

モーロンはわけが分からないと思った。普段は思慮深いデパンだが、こんなとんでもないことを言い出すとは思いもしなかったからだ。

「そんなことは百も承知だよ。何回も聞き返さなくても分かっている」

「ありえないですよ！こんなこと！ソロのEクラスがパーティを組まずにいきなりCクラス以上の昇格試験を受けるだなんて…正気の沙汰とは思えません！」

モーロンは間近に見てきたから分かるのだ、いかに一人で戦うこと

が厳しいものであるかということ。

Cクラスからは四人から五人のパーティで行動するのが常である。ニーベンスに住む魔物たちは強大だ。彼らと一対一で戦うには個々の力よりも集団で立ち向かう方が遥かに有効だからだ。そのため、ギルドでは安全策としてパーティを組むことを強く推奨している。仲間を見つける為の専用の酒場まであるくらいだ。それほどまでにCクラスとD・Eクラスの差は歴然としている。

そして、BとAクラスからは魔法士の存在が鍵になる。彼らがいることで魔物に対して冒険者のパーティはより柔軟な対応が可能となるからだ。しかもこのクラスの冒険者ともなると一人である程度の数の人間や魔物を同時に相手をすることができるようになる。だからセレスシアたちは人々から尊敬を受けているのだ。

けれどソロの冒険者の場合、話が大きく変わってくる。前述したように、パーティで挑む魔物の集団を一人で相手をしなければならなかったため、その負担は想像を遥かに超える。そのためEクラスでもパーティを作る者たちもいるほどだ。

これまでも自称腕の立つ冒険者が一人でCクラス昇格試験を受けに来たことを彼は何回も見てきた。しかし、どれも惨憺たる結果で終わった。誰一人無事に帰ってきた者はいなかったのだ。

「しかも、Sクラスですって？デパンさん、言うておきますけど冒険者ギルド設立以来、そのクラスを受けたものは誰一人いません。そもそも存在自体が冒険者の間で噂話になっている程ですよ」

Sクラスは冒険者ギルド発足して以来、幻の階級として存在していた。なにせこれは個人に課せられたものであるため、パーティを組

んでしまうと受けることが不可能になってしまつからだ。そのため、Sクラスはいままで誰もいなかったのである。

「だが、それに匹敵する男がいるじゃないか」

「確かにあの男はそのくらいの実力があると思いますが、それがヴ
アルルにもあるとは思えません。…とりあえず昇格試験の話は聞か
なかったことにします。それとデパンさん、今日は遅いですけど帰
らせていただきます。ただでさえ今回はAクラスを受けるセレシア
たちで忙しいんです。あまり変なことで呼び出さないでくださいよ
…」

モーロンが話は済んだとばかりにデパンから踵を返し、執務室を出
て行こうとした。

「ところでモーロン、アザンテという魔法士を知っているか？」

しかし、それをさえぎるかのようにデパンは尋ねた。

「…何ですか？いきなり。ええ、勿論知っていますよ。レスレック
魔法学院を首席で卒業、魔力量はCランクながらも卓越した魔法運
用により宮廷魔法士に任命。けれど反社会的な態度から、ライレン
に反逆するも結局失敗。その後国を逃げ出し、今では盗賊稼業に身
をやつしているとか。…けれどここ最近は何について噂を聞きませ
んね…それで彼がどうしたんです？」

「彼が倒された」

「…何ですって？嘘でしょう？」

モーロンは耳を疑った。ライレンのクーデター騒ぎはトレマルクでも有名な出来事だったからだ。その首謀者である彼が死んだ。にわかには信じられない事だった。

「死体も確認した、間違いない。二つにばっさりと斬られていてね、おかげで大変だったよ。身元の確認が彼の愛用していた杖とローブ、それといくつかの遺品があったから何とか分かったけど」

「…誰にやられたんです？一体？」

モーロンは尋ね返す一方、薄々感じてはいた。こんな夜更けに突然の呼び出し、ヴァラルの昇格試験について。すると答えは…

「言わなくてもわかるだろう。ヴァラルだよ、今話したEクラスの冒険者だ」

「…そんな馬鹿な…」

改めてモーロンは愕然とした。正直、ギルドマスターに任命されたときよりも驚いたかもしれぬ。それ程までデパンの言葉は堪えた。「そう思えたらどれだけ良かったことか。さっき彼と会ったんだけどね、さも当たり前のように話していたよ。まるで邪魔だったから殺しましたみたいない感じでね」

「…」

デパンの言葉に彼はもう何も言えなかった。

「というわけで大体の事情は理解できたとは思ってから後は宜しく。」

こつちも色々準備しなくちゃならないからね。彼からも承諾を得ないと」

「待ってください」

「ん？何だい？」

「私も参加させてもらえませんか？」

チウンチウンと小鳥のさえずりがきこえ始め、のどかな朝がやってきた。日は昇り始め今日も平和な一日が始まる頃、

ヴァラルはそれとは対照的に最悪の気分だった。

「あゝくそ…全く、何でこんなことになったんだ…」

早速彼は愚痴をこぼした。

あの話し合いの後、ヴァラルは一睡もせずこの後どうすれば良いか必死に考えていた。いくつかの代案が浮かんだがどれも却下した。時間稼ぎにはなっても結局ばれる事にかわりはなかったからだ。

とりあえず、アルカディアのことを話さなければ何とかなるだろう。多分…

彼はひとまず、この後の話し合いも自分に不利にならないよう努力することだけだった。

「やあ、ヴァラル。昨日はよく眠れたかい？」

運ばれてきた朝食を食べた後、ヴァラルはデパンの屋敷の執務室に呼ばれた。どうやらここで昨日の話しの続きをするようだ。

「おい、ローグはいないようだが」

ふと見ると彼の姿がなかった。昨日の夜にはいたはずなのだが影の形も見当たらなかった。

「彼なら先に帰ったよ。何でもテトスの村の復興を手伝わないといけないらしいからね。昨日、君と話せただけでも良かったみたいだ」

「そうか…」

名残惜しい気持ちにはなったが、またどこかで会えるだろう。とにかくこの場を切り抜けなければどうしようもない。ヴァラルは気分を切り替えた。

「とりあえず、当面の資金はこちらで出すことになったから安心してくれ。それよりも今日は君に会いたいという人がいてね、もうすぐ来るはずだ」

「どうせデパンの知り合いだろ…」

すると応接間の扉から一人の男が現れた。ローグに似たような大きな男だ。けれど、それなりに風格もある。彼もまた冒険者として名を上げた者なのだろう。

「紹介するよ。トレマルク王国のギルドマスターだ」

「宜しく。モーロンと呼んでくれ、ヴァラル」

「伯爵に続いて今度はギルドマスターのおでましか。次から次へと増えていくな」

やれやれといった顔でヴァラルは呆れた。セレシアたちはともかくとして、昨日まではこんな大物達と知り合うだなんて全く想像していなかったからだ。

「今回の件ではギルドの沽券にも関わることになるからね。少なくともヴァラルにとっても良い話になるはずだ」

モーロンはヴァラルに語った。

「そうならば良いけどな…それで、デパン。話の続きは何だ？」

「ヴァラル、ギルドには昇格試験があることは知っているね」

「ああ、セレシアたちも受けるとか言っていたな」

「それを君にも受けてもらいたい」

「断る。第一、その受付期間はとつくの昔に過ぎているはずだ」

ヴァラルは即座に拒否した。何せ彼は昇格する気などさらさらなかったからだ。多少不便はあるが、元々身分を手に入れるために冒険者と隠れ蓑を利用したのだ。それなのにどうして自分の方から目立たなければならぬのか理解できなかった。

「それはこちらで何とかする。ヴァラルはただ受けるだけで良い」

「…クラスは？」

けれど、モーロンの言葉に一応反応した。聞くだけは無駄にならないからだ。

「Sだ」

「…おいおい、確かギルドではAが最高だったはずだ。それなのに、なんで、その上があるんだ！」

「これまでに誰もいなかったからね。そのうちにすっかり忘れ去られてしまったんだよ」

「絶対に断る。セレシアたちのBクラスでさえかなり注目の的だったんだ。これ以上目立つのは御免だ」

ヴァラルは思わず天を仰いだ。セレシアたちがAクラスを受けるのにこの街は沸いている。そんな中、ヴァラルがSクラスの試験を受ければどうなるか。それは火に油を注ぐようなことであることは明白であった。

「ヴァラル。言っておくが、アザンテのことが露見するのも時間の問題なんだ。今はデパンさんが何とか押さえつけているが、それでも限界がある。ライレンの魔法士が何か探ってきているみたいだから」

「…君は目立つのが嫌なようだけど、このままだと余計なトラブル

が君の元に飛び込むんでくるよ。この前のようなCクラスの冒険者の集団が謎の重傷を負ったときのような。あれ、君のせいだろう?」

アザンテを倒した男ならあの程度のこと成し遂げるのだと踏んだのだろう、デパンは何もかもお見通しと言つ目でヴァラルを見た。

「…デパンさん、そういうことは昨日のうちに言つてくださいよ」

「いやなに、あのときは第三者の目撃者が誰もいなかったからね。確証はなかったんだ」

「本当に嫌な奴だな、デパン」

「褒め言葉をどうも。だけど、Sクラスになればそついったトラブルを未然に防ぐことが出来るし、ギルドからも最大限のサポートを保証するみたいだよ」

そつ、確かにセレシアに喧嘩を吹っかける愚か者がいなかったのは事実だ。この辺り、長いものに巻かれると言つ変なこだわりがあるのか、彼らはきちんと弁えていた。

「ああ。ギルドの各種施設は無料で仕えるよう取り計らうし、依頼人とのトラブルもこちらで対処する。それに依頼も好きなものを受けられる」

「それはニーベンスや秘境、遺跡の調査も含まれるのか?」

モーロンの物言いに別のところで反応したヴァラルであった。彼としてはAクラスの依頼も受けられるという所に一番の魅力を感じていたのだ。

「勿論。Sクラスになればむしろこちらから依頼することになるだろう。とはいえ、そう簡単に回せるものではないけどね」

「…一つ聞きたい。俺は冒険者だ。国に忠誠を誓う騎士とは違う。それなのにデパン、なぜ俺にここまでする？言っておくが俺はこの国に仕える気はないぞ」

「分かっている。目的としては君とのつながりが欲しいからかな。世の中何が起るかわからないからね、こうして少しでも恩を売っておきたいのさ。態度は不躰だけど、それ以上に君は情に厚い男のようなからね。テトスの村がいい例だ、あれほどの懸賞金をポンと渡せる冒険者なんてそうそういない。それに人との付き合いと言うのは金や名誉よりも案外大切なものだよ、ヴァラル」

「…」

懸賞金のくだりは少々間違っではいるが、意外にも彼の本質を見抜いているデパンだった。伊達に貴族の中で腹の探りあいを行っているわけでは無さそうだ。

「ギルドとしても意味はある。実は今の冒険者の上位層の殆どが魔法士だ。それは別にかまわないんだ。けれど、彼らは若い冒険者とのトラブルが絶えなくてね、今回のことはそれを防ぐためでもある」
モーションも補足するかのようにつづいた。

「成る程ね…Sクラスという存在が現れることで、彼らの関心がこっちに向くと…つまり、体のいい囿というわけか」

「そう思ってくれてもかまわない。だが、それでもヴァラルに頼らざるを得ないのも事実だ…」

ヴァラルは考え出した。このまま時間が過ぎることによって注目を浴びてしまうのは不可避のようだ。けれど、それを利用するデパンの提案は確かに魅力的だった。

これは流れに乗るしかないか…

「まったくしょうがない…分かったよ。とりあえずそのSクラスの昇格試験を受ければ良いんだな？それで、その内容は何だ？」

「それがアザンテを倒した時点でクリアしたも同然なんだけどね。だから、どうすれば良いかまた相談というわけだ」

「デパン…人を散々煽っておいてそれはないだろう。拍子抜けしたぞ」

「実際、Aクラスが最難関といわれているからね。急に作りようがないんだよ」

「…一つヴァラルには試験の代わりに頼みがある」

そんなことを言い合っているうちにモーロンが発言した。何か言いたいことがあるようだ。

「俺は別にかまわないが…そんなこと、公平な試験のはずなのにやっても良いのか？仮にもギルドマスターなんだろう？」

「素直に引き受けるヴァラルも凄いいけどね…だけどモーロンの気持ちも分かるよ。色々と世話になってるらしいから最後まで礼をしたいんだろう、きっと」

「だが、本人達が知ったら相当怒るぞ？」

「そのときはそのときだ。どうせすぐに分かることだしね」

その後、三人の怪しい会合は幕を閉じヴァラルは二人の提案を受け入れた。メリットとデメリットがそれぞれ非常に大きいものだったが、それでも彼は今後のために引き受けざるを得なかった。

身の振り方をもう少し考えていかないとな…

そして、この決断が更なる波乱の幕開けでもあった…

昇格試験

ヴァラルとデパン、モーロンの話し合いは結局のところ夕方まで続いた。そのため、今日もデパンの屋敷で泊まることになりかねなかったが、さすがに二日連続でエンラル宿を空けるのはまずいと思っただのかヴァラルは急いで帰ってきた。

「セレシアは人前で強がっている割には妙なところで寂しがりやなところがあるからな。一体どうしてあんなったんだか……」

ヴァラルは伯爵の手配してくれた馬車の中で一人呟いていた。

エンラルの扉を開けると案の定彼女がいた。時刻は夜と呼んでも差し支えない時間帯だ、それなのにセレシアはエンラルのロビーにポツンと座っていて、その姿はどこか物悲しさを感じさせるものだった。

もしかしてずっと待っていたわけじゃないだろうな？…さすがにそれはないか

「時間がかかってすまないな、シア」

ヴァラルが声を掛けると、セレシアは無言のまますたと彼に近寄ってきた。一步一步が怒気をはらんでいたため、かなりご立腹のようだ。

整った顔の瞳は少し赤くなっていたが。

「ヴァル、随分と時間がかかったんだな。遅かったじゃないか、待

ちくたびれたぞ」

口調は少し棘を含んでいたが、彼を氣遣っていることはすぐに分かった。ヴァラルを見た瞬間、彼女はほっとした様な表情を一瞬見せたことを見逃さなかったからだ。

「ああ、ちょっと伯爵のところでいろいろとな」

本当に色々あった。これからは相当目立つことを覚悟しなければならぬほどに。

…まあ、そのおかげで手間も省けたのも事実だが。

「デパン伯爵のところへか!？」

ヴァラルに掴みかからんばかりに詰め寄り、そうして彼女の吐息が感じられるくらい二人の距離は縮まった。

警備隊に連れて行かれるならともかく、デパンのところに行っていたと語るヴァラルをにわかに信じられない彼女であった。伯爵は多忙な男だ、冒険者一人に割く時間などありはしない。現に、彼女達が伯爵と会ったときは一時間もしないうちに彼は席を立ち、次の来客の相手をしていたからだ。それなのに二日近くも彼のところに行った。つまり余程のことがあったに違いない。

もしかして、以前のCクラスの冒険者達との事で新たな問題があったのか？それが伯爵の耳にも伝わってとんでもない事態に発展したのではないだろうか？様々な憶測が頭の中をよぎり、彼女は不安げな表情でヴァラルを見つめていた。

「心配するな。セレシアもそのうち分かることだ。別に悪いことをしたわけではないからな、安心しろ」

誤解を解くため、ひとまずヴァラルは彼女を落ち着かせた。こんな光景、誰かに見られたらまたとんでもないことになる。セレシアと少し距離をとる彼であった。

「ッ！？そ、そうか。ならいいんだ。全く…あまり私を心配させるな」

自分が興奮していたのに気がついたのだろう、彼女もすぐに取り繕った。こんなに慌てるのは久しぶりのことだ。まだ一ヶ月も経っていないというのに、ヴァラルの事に関しては異様に動揺する自分がそこにはいた。

…本当に不思議なことだった。

「ははっ。セレシアもそんな顔をするんだな」

「うっ、うるさい！私だっていつも仏頂面というわけではないんだぞ…」

照れたような表情でセレシアは怒った。しかし、勿論本気ではない。どちらかといえば恥ずかしがっていたというのが正しい表現だろう。

「悪い悪い。別に笑うつもりではなかったんだ、許してくれ」

こう見えていてもセレシアは誰もが振り返るほどの美貌を持っている。だが、基本的に凜々しさが先行するあまり、誰も近づけさせない雰囲気を放っていたのだ。けれど、こうして改めてみるとそんな

彼女もまた魅力的だとヴァラルは思った。

「…ヴァルには改めて話がある」

あれからセレシアは話を仕切りなおしヴァラルに言った。元々この話をするために彼女は待っていたのだまさかこんなに長くかかるとは思いもしなかったが。

「これから昇格試験で忙しくなるから、以前のように付き合うことが出来なくなる。さしあたりこんなところか？」

「…そうだ。名残惜しいが、再び会うことができるのはそれが終わった後になる。無事だったらの話だが…」

「Aクラスは確かここしばらくの間、合格者は出ていないんだろう？そのために準備をするのは当然だろう。けれど、もう少し早くても良かったんじゃないか？俺に付き合って落ちたら元も子もないだろう」

「確かにそうだが、これは四人で決めたことだ。ヴァルの気にすることではない。死んでしまったらそのときは私達がそれまでだったということだ。けれど、私達の方も全力を尽くすつもりだ」

「当たり前だ。これで戻ってこなかったら俺が他の冒険者達から何言われるかわからないし、下手をすれば襲われかねないからな」

「フツ、それもそうだな…それとだな、ヴァル」

「何だ、まだあるのか？」

「私が帰ってくるまで…死ぬなよ？」

ヴァラルは呆気に取られた。Aクラスという試験を前にして、自身ではなく、他人の心配をするとは…

彼女は自分のことを何とも思っていないのか？いや、それは考えられない。何せ彼女はBクラスだ、どこへ行っても憧れの存在なのだ。当然、自身の価値をより理解しているはずだ。それなのにどうしてここまで歪なのだろうか。ヴァラルは目の前の彼女が非常に危うい存在に見えた。

「…それは俺が言うべき台詞だ…シアも気をつけてな」

「ああ、わかっているさ」

セレシアの表情は実に晴れ晴れとしたものだった。

その後の一週間は瞬く間のうちに過ぎていった。

セレシアの姿はあの日以来エンラルの宿と行きつけのクレーヌ亭でも見かけることはなかった。おそらくグレイン、ソイル、エーニスたちと綿密な準備をしているのだろう。

そして八日目、セレシアたちはAクラスの昇格試験を受けにギルドの館を訪れていた。

「よく来たねセレシア」

「今日は宜しく頼む、モーロン」

ギルドの館のとある一室でセレシアたちのパーティとモーロンがいた。

今回の試験はギルドマスターであるモーロンが直々に取り仕切る事になっていて。それほどまでに今回のAクラスという試験は重要性を持っているのだ。

「一応確認するけど、今回の試験をもってセレシアたちのパーティは解散と言うことでもいいのかな？今ならまだ取り消せるけど」

羊皮紙をめくりながらモーロンは尋ねた。

「いや、そのまま手続きをしてくれ。私は国へ帰らなければならぬし、グレインたちもそれぞれ進むべき道が決まっているのだから」

グレインはトレマルク王国の近衛軍に所属、ソイルは貴族になり、エーミアは魔法皇国ライレンに戻るのだそうだ。

「そうか…このまま残ってくれたら有難かったんだが、しょうがないね。それじゃあ改めて内容を説明するよ」

「頼む」

すると、モーロンの雰囲気はがらりと変わった。

「今回の試験の内容はクヴィクトの森でのオーク討伐だ。これは本来Bクラスの受け持つものだが、その周辺ではオーガの姿が確認さ

れている。そのため、君たちにはオークの討伐を主にしながらもオーガについて調査を行ってもらいたい」

「待った。オーガの討伐はしなくて良いのか？」

グレインが尋ねた。オーガはAクラスのパーティが討伐する魔物だ。これをしないということは難易度が大きく変わることを意味するからだ。

「オークの数が六十体ほどいるようだ。魔法士がいるとはいえ、さすがに四人でこれほどの数のオークを相手するのは骨が折れるだろう。そのため、オーガに関しては無理して戦う必要はない。彼らと遭遇したのなら逃げてもらってもかまわない」

「分かりました」

ソイルとエーニスそれぞれ納得した。Bクラスではオークを数多く倒してきた彼らであったが、一度に相手したのは三十体ほどだ。それを考えると確かにこの内容はAクラスの昇格試験としてふさわしいものだと感じた二人であった。

「この袋に討ち取った証であるオークの部位を入れてくれ。彼らは周辺の村や街に危害を及ぼしている。変な遠慮は無用だ」

モーロンは頑丈な袋をセレシアたちに手渡した。

「それではセレシア、グレイン、ソイル、エーニス。健闘を祈る」

四人は無言で頷き、そのまま部屋を出て行った。

誰もが歴戦の冒険者である雰囲気纏わせて。

「…行ったようだな」

それから少しの時間が経ち、男が一人モーロンの元へやってきた。

「そうだね…何事もなければ良いけど。でも、本当にいいのかい？」

モーロンは確認した。本来、これは彼にとって受けなくても良いものだった。しかもAクラスの昇格試験だ、何が起こるかわからない。もしかしたら彼もろとも殺されてしまいかもしれない。そんな漠然とした不安がモーロンにはあった。

「あいつらには俺の依頼に付き合ってもらったことがあるからな、その礼だ。それに彼女はまだまだ成長する。そんな才能溢れたやつをこのまま見殺しにするわけにはいかないな」

「そうか…わかったよ。くれぐれも気をつけて」

驚くのはもう飽きた。モーロンは彼の言葉をそのまま信じることにした。

そうして一人の男もまた、彼女達の後を追うようにして旅立っていた。

目的地はオークの多数住まう

クヴィクトの森だ。

彼女の苦悩

その頃セレシアたち一行は街道を歩きつつ、目的地であるクヴィクトの森を目指していた。彼女達の歩く速度は中々速い、このペースで歩き続ければ三日後には到着するだろう。

けれどセレシア、グレイン、ソイル、エーニス誰も喋っていないかった。それも当然だ。彼らは冒険者ギルドの最高峰であるAクラスの昇格試験を受けている真つ最中なのだ、緊張しないわけがない。そのため四人の空気はどことなく重たいものだった。

すると、エーニスが場を和ませようとグレインに明るい声で話しかけた。

「グレインさん、モーロンさんの言ったことをどう思いましたか？ 私としては少し拍子抜けしたというか…その、今までの試験のことを考えたら楽そうだなと」

「まあ、Aクラスの内容にしては少し簡単だろうな。俺はてつきりオーガを討伐することになると思っていたからな」

「そうですね。私達なら大丈夫です！このままさっさと終わらせて、街に帰りましょう！」

「ああ、そうだな」

オーク討伐ならセレシアたちのパーティは何回も経験済みだ。そのためか、二人の雰囲気は明るくなっていき、あれやこれやと色々な会話をしていた。

「二人とも、そんなことを言っただ丈夫なのですか？ギルドマスターも話していたではないですか、オーガも確認されていると。私はとてもこの依頼は一筋縄ではいかないと思いますよ」

だが、ソイルはエーニスとグレインに水をさした。二人は甘い、これはAクラスと同等の依頼内容なのだ。必ず何かあるに決まっている。そんなことでこの先立ち向かうことが出来るのか、彼は不安だった。

「ソイルさん。今回、オーガは関係ありません。私達はオークを相手にすればいいんですよ」

エーニスが内容を確かめるように彼に言った。今回の討伐は発見されている八割程、つまりは約五十体倒すことで依頼達成となる。彼女の言い分も考えると何とかかなりそんな気もするが…

「ですが、実際に戦闘になったときはどうします？見つかったらそのまま尻尾を巻いて逃げるのですか？試験だけを考えるのならそれでも良いかもしれませんが、村や街はどうなります？調査といってもそのままオーガを放っておくのですか？私は反対です」

ソイルはエーニスの言い分に反論した。昇格試験とはいえ結局のところ形を変えた通常の討伐依頼と同じなのだ。それをみすみす放置することなど彼には出来なかった。

「だからといって五十体のオークを倒した後にあいつの相手にするのはさすがにきついぞ。判っていつてるのか。まず何よりも俺達が生き残らなきゃ話にならないだろう」

明るいムードになりかけたと思っただけの間にか険悪なものとなり、バチバチと三人の間で火花が散っていた。彼らの間で意見の食い違いがあったのはこれが初めてではなかったが、それでもこれはかなりまずい状況だった。

「…三人ともそこまでだ。ソイル、あくまでもオーガについては調査だということをおぼろげに忘れるな。実際の村の被害はオークによるものだと聞いている。ひとまずそのことは置いておけ。それとエーニスとグレイン、場を和ませようとしたのはわかる。だが、その考えは危険だ。最後だからこそ、油断は禁物だ」

見かねたセレシアは諭すように彼らに言った。そう、彼女たちは行方不明の冒険者パーティの捜索というのも引き受けたことがある。その中で彼女達は依頼達成の半ばに死んでいった者たちを何度も見えてきたのである。

「そ、そうですね。すみません…反省します…」

「…悪い。少し浮かれていた。最後だからって油断してしちゃ元も子もないな」

「エーニス、グレイン、私からも謝らせてください。どうやら少し緊張していたようです。あなた達の気持ちを知りながらも、むきになっていました…」

「それでいい。こんなところで争いになってもしょうがないからな…もうすぐ日が暮れるみたいだ、初日からそんなに急ぐこともないだろう。三人とも、準備の手伝いを頼む」

グレインたちが仲直りしたのを見て、日が地平線に沈むのを遠目で

眺めていた彼女はこのあたりで休むことを提案した。もう少し先に進むことも出来たが、今日のところはお預けだ。

「分かりました」

「了解です」

「オッケー。とっとと終わらせるぜ!」

セレシアの言葉に三人はそれぞれ野営の準備に取り掛かった。何度も繰り返してきたため、その動きに淀みはない。

どうやらいつもの調子に戻ったようだな…

彼女はとりあえず一安心した。

「そういえば、こうしてヴァラルがこの場にいないのは珍しいことだよな」

グレインがふと思い出したように言った。

時間は少し経過して、四人は焚き火を囲いながら彼のことについて振り返っていた。日はすっかり沈み周りは夜の闇に支配されていたが、炎の暖かさが彼女達の疲れを癒していた。セレシアを含めた四人はこうした時間が何よりも好きだった。夜であるがゆえ魔物には警戒をしなければならなかったが、それでも親睦を深めるいいタイ

ミングであることには間違いないからだ。

十分すぎるほど既に深まっているのも事実だったが。

「確かに。ここ最近彼の依頼に付き合っていましたからね。こうして四人だけと言うのも久しぶりな気がしますよ」

「そうですね…今思うとなんだかとても不思議な人でした」

「ヴァルは冒険者の才能の塊みたいな奴だからな。全く、今までどこで何をしていたのだから…」

そうなのだ。ヴァラルという男はセレシアたちの協力があったとはいえ、どの依頼もそつなくこなしていたのだ。大抵何かしらの失敗をこの時期にするもののだが、彼女達が見る限りそういうことは一切なかった。むしろ依頼人の大半から感心される場合がほとんどであった。

セレシアたちも今では有名な冒険者パーティの一員として名を上げてはいるが、当然最初の頃は様々な失敗を経験した。今ではいい思い出になっているが、その当時は色々と落ち込んでいたものだ。

「彼がもし私達とこの場にいたらどうなっていたんでしょうね」

「案外、この試験もあっさりパスできたかもしれないぜ？」

ソイルが冗談混じりに言うと、グレインもそれに続いた。

「仮定の話をするのはよせ。あいつはここにはいないんだ。」

「でも、彼といると安心するんですね。何か大きなものに守られているような…そんな感じがします」

「そうだ、それ。何でだかわからないが、あいつとは不思議と息が合うんだよな。なあ、セレシアの姉さん。本当にヴァラルは素人なのか？正直かなりおかしいと思うんだが？」

「そういわれても…私と彼が会ったときはクレーズ亭なのは知っているな？そのとき、あいつから冒険者登録をしてきたばっかりだと言うことを聞いた。実際、ギルドカードも発行されたばかりのものだった」

「怪しいなあ…」

グレインはセクリアの街にいるはずのヴァラルに疑いのまなざしを向けた。正直言ってセレシアに紹介されたときからおかしいと思っていたのだ。Bクラスを目にしたEクラスの連中はグレインの顔のことを差し引いたとしても恐れおののくのが普通だ。なのに彼は何食わぬ顔で席に着き、自らの素性をはぐらかし、余計な口を一切挟まずに聞き役に徹していたのだ。通常だったら格下の冒険者は自らの顔売るために何かしらの行動をとるものだが、ヴァラルは全くそんな気配を見せなかったのだから尚更おかしい。

「嘘をついてもしょうがないだろう。それともグレイン、ヴァルが実力を隠しているとそう言いたいのか？なら何故Dクラスを受けなかった？エーニスだったら分かるだろう？」

「私の場合は魔法士ということ、逆にギルドの方からすぐにも昇格試験を受けるよう言われましましたから何ともいえません…けれど普通だったら受けるのでは？」

冒険者になった以上、彼らの大半がCクラスを目標にしている。そこから先は分からないが、とりあえず一種のスタート地点であることには間違いないだろう。それを目指さなかったとしたら一体彼は何が目的なのだろうか？

…これ以上悩んでも仕方がない。エーミアは考えるのをやめ、再び三人の会話の中に入っていった。

「セレシアさん、彼はこの後どこまで伸びると思いますか？」

ヴァラルについてソイルも何か思うところがあるのか、彼女に聞いてみた。彼もまたヴァラルの不可解さに疑問を持っているようだ。

「Dクラスはすぐにでも受かると思う。気の会う仲間を見つければCクラスもあつという間だろう」

「本当のところは？」

当たり障りのない模範的な回答を聞いてソイルはセレシアをじっと見つめた。そんなことを聞いているのではない、もっと本質的な意味でのことだと訴えるかのように。

「正直わからない…ヴァラルはグレインも言ったように本当につきみどころがない。覚えているか？コボルドの討伐のときのことを」

「ええ、覚えています。あのときはさすがに彼は戸惑っていたようですけどね。何とか倒すことが出来ましたが」

「そうか…ソイルにはそう見えたのか…」

「セレシアさんはどう思ったのです？彼にとって最初の討伐はさすが…私としては特に違和感を感じなかったのですが」

「ヴァルは別の意味でコボルドに苦戦しているように見えた。本来の実力を出せないかのような…ああ、さっきと言っていることがまるで逆だな。すまない、忘れてくれ」

セレシアは人を見る目は確かだ。彼女がヴァラルのことを紹介した時点で信頼に値する人物であることソイルは知っている。だが、当の本人でさえ理解できないという彼女の姿は非常に珍しいものだった。

何ともいえない沈黙が彼女達を包み込む。彼のことを考えれば考えるほど四人は深みにはまっていくようだった。

「…セレシアの姉さん」

「何だ？グレイン」

「一度ヴァラルと腹を割って話してみたらどうだ？あのことを含めて」

「そうですね！彼はきつと大丈夫です！」

「だが…」

「二人とも、これはリーダーである彼女自身の問題です。迂闊に触

れて良いものではありません」

「でもよ…これが終わったら俺達ばらばらになっちまうだろう？その前に話くらいはしてもいいんじゃないか？」

「それでもです。私達はセレシアさんに一歩引いてしまったのも事実なのです。彼ももし、私達と同じようになったとしたら？それこそ取り返しのつかないものになります。私達はこのことについて既に何かを言う資格などないのですよ」

「ソイルさん…」

「…ソイル、グレイン、エーニス。お前達の気持ちは良くわかった。ありがとう、少し考えてみることにする」

「…分かりました。出すぎた真似をしてすみませんでした」

「いや、いい。気にすることではないからな。今日は私が寝ずの番をするからお前達は早く休め」

三人はちらりと彼女を眺め、了解したと頷き、そのまま眠りについていった。

ぱちぱちと火花が散り、薪をくべながら彼女は焚き火を眺めていた。先程の喧騒はなくなり、夜の闇はますます色濃くなっていった。

あれから彼女は必死に考えた。何度も何度も繰り返して。けれどAクラスの昇格試験の影響か、結局彼女は後一步が踏み出せなかった。

「…すまない二人とも。やはりヴァルには言えない…これ以上誰かが離れていくのはもう嫌なんだ…」

膝を抱え、何かに怯えるようにして彼女は夜明けを待っていた。

その姿は凜々しい騎士のものではなく、一人のか弱い女の姿であった。

予兆

セクリアの街から出て三日後、ついに彼女達は目的地であるクヴィクトの森に到着する。

昇格試験の場所となるクヴィクトの森はフェンバルの森とは違い、奥地に良質な材木が採れるという事でいくつかの民家が立ち並ぶ程に開発が進んでいるところだ。けれど、その場所は既にオークの襲撃によって占拠され、無残なところと成り果てていた。

オークの習性として、一体ではなく複数で村や街を襲う点があげられる。

これはCクラス相当のゴブリンも似たような特徴を持つが、オークの方が彼らよりも一体一体がそれなりに強力なため冒険者ギルドでBクラス指定を受けている。実際問題、セレスシアのような卓越した剣の技能を持つ者がいるか、エーニスのような複数を同時に相手に出来る魔法士がいなければ苦戦は免れない相手なのだ。

「どうだ、ソイル？」

小声で隣にいる彼に声を掛ける。

「やはり多いですね…ざっと見ただけでも二十体はいます」

オークの集落近くでソイルはセレスシアに報告する。

彼らは集団で行動するとはいえ、人間ではなく所詮は魔物だ。大抵は十体ほどのごく少数で彼らは生活しているのだが、クヴィクトの

森に住むオークはいままででない規模であるようだ。

セレシアたちは現在、ソイルが彼らを目視できるギリギリの場所にいた。とはいえ彼の目は非常に良いため一方的に動向を探ることが出来、さらにつつそうと生えている茂みの中に隠れているため、余程のことが無い限りオークたちに気づかれることはないだろう。

初日では四人ともちょっとした問題が起こったが、クヴィクトの森に近づくにつれていつもの調子に戻っていった。これから命のやりとりをするという瀬戸際で以前のことを気にする程、彼女たちはやわではないのだ。

「やはりモーロンの言っていたように六十体はいると見るべきだろうな。…よし、それなら手はず通りに行く。タイミングは任せたぞ」

「分かりました。私も出来るだけ援護しますが、それでも魔物と直接戦うのはセレシアさん、貴方です。くれぐれもお気をつけて」

「その言葉、グレインとエーニスにも伝えておく。ソイルも危なくなったらすぐに知らせるんだ。今回は何よりもソイルの腕にかかっている。それを忘れないでくれ」

「そこまで期待されているのならば応えないわけにはいきませぬね…お任せください」

その力強い返事を聞いてセレシアはソイルをその場に残し、二人の待つ場所へと移動していった。

「待たせたな。二人とも、何か問題はあったか？」

彼女は二人に問う。これがセレシアたちパーティの最後の依頼なのだ念には念を入れる必要がある、もし何かあればすぐにも引き返すつもりだった。この後三人はそれぞれの別の道を歩き始める。その道半ばでその命を無駄には出来ない。彼らのためなら命を賭けて戦う決意が彼女には備わっていた。

「大丈夫です」

「問題は無いぜ」

二人はリーダーの到着に安堵したのかほっと一息をついた。

セレシアの立てた作戦はいたって単純なものだ。まず、ソイルがオークたちを弓で注意を引かせ、次に別の方向からエーニスが魔法を放ち、彼らを動揺させる。そして最後はセレシアとグレインがエーニスを援護しつつ一気に彼らを掃討にかかる。あまり長くかけすぎると増援を呼ばれるかもしれないので、これは時間との戦いでもあり、入念な下準備とパーティの連携が重視されるのだ。

「準備はいいな…頼むぞ、ソイル」

セレシアが呟き、いよいよオーク討伐が始まりを告げた。

「頃合ですか……それではいかせてもらいますよ」

ソイルは近くに設置してある弓に矢をつがえ、遙か彼方に見える一体のオークに狙いを定める。弓は今にも魔物を撃ち殺そうとばかり

にギリギリと音を立て、弦を限界まで引き絞るところで彼は矢を放った。

パシュツと何かが森の中を駆け抜けたとき、集落にいたオークの一体の首がドスツと鈍い音を立てて吹き飛んだ。すると周りにいたオークたちがその音の出所を探ろうとして騒ぎ始めた。けれど、その間にもパシュツ、パシュツと乾いた音が森の中に響きわたり、オークの腕や足を吹き飛ばして彼らは次々と倒れていった。

「ふう…」

ソイルは一通り矢を放ち終えた後、弓を下ろし一息つく。

持っている弓は対魔物用に改良された弓で、通称魔物殺しの大弓とも呼ばれる。これは飛距離は勿論のこと、威力もオークの首を一撃で吹き飛ばすほど強力な物である。魔物だからこそ良いものの、人間に向かって放つことになろうものなら鎖帷子を仕込んだ服ごと容易に貫いてしまうだろう。

また矢も特別なものを使用しており、通常の矢に比べ遙かに大きい。彼はこの大弓と大矢を共に使いこなすことで数々の魔物を葬り去ってきたのだ。

実はセレスシアたちのメンバーの中で一番力があるのは意外にもソイルで、グレインが一度彼の弓を引き絞ろうとしたことがあるのだが結局少ししか引っ張ることができなかったという逸話がある。腕相撲も、グレインが彼に勝てたためしが無いくらい彼は力持ちなのだ。

「とりあえずざっと十体はいけましたか…さて、次の場所へ移動しないと。そろそろ気づくかもしれないからね」

そうして彼は急いで弓と矢を抱え、その場を後にした。

「ソイルが上手くやっているようだ。エーニス、頼むぞ」

オークたちが慌てている姿を確認したセレシアはすぐさま指示を出す。

「はい！」

エーニスはその言葉を聞き、すぐさま集中した。魔法の発動に必要なのは雑念を振り払い、気を静めることが何よりも重要だからだ。

エーニスは魔法士としての才能はよくいって平凡、悪く言えばそれよりもやや下といったところだが、セレシアたちのパーティで彼女は欠かせない存在であった。勿論、魔法士ということもあるのだが他にも理由がある。

彼らの力は確かに目を見張るものがある。だが、ギルドに所属する魔法士たちは仲間との連携というのをあまり重要視していなかった。魔法を放つだけで大勢の魔物が倒れていくのだからメンバーのことをあまり考える必要性がなく、しかも大半がパーティのリーダーであるためどちらかといえば指示を言い渡すタイプなのも拍車をかけているのだ。

けれどエーニスの場合はその魔法士たちとはだいぶ違う。彼女は自分の魔法をセレシアたちやグレイン、ソイルに役立てて欲しいと思いい行使するのだ。つまり、魔法士であるエーニスが逆にセレシアたちに合わせているのだ。

そして長いようで短い時間は終わり、ついに魔法が発動した。

『ウインド・カッター』

杖から魔力の風が生み出され、オークたちの集団に猛烈な勢いで吹き荒れる。魔法で作り出した風は自然発生したものとは違い、明確な意思を持って全てを切り裂く真空の刃となって彼らに襲い掛かった。

ガアアア!!!!!!

獣のような絶叫が辺り一面に響き渡り、風に取り込まれた彼らの皮膚に無数の裂傷が走っていく。そして、風がやんだ後、辺りには無残な姿と成り果てたオークがバタバタと地に倒れていった。

「さすがだな、エーニス。それじゃあここからは俺の出番だ。しっかりついて来いよ」

「グレインさん、あまり一人で行かないくださいよ。ついていくの結構大変なんですから」

「フオローは私がする。それではいくぞ!」

そうして三人は茂みの中から飛び出し、彼らの住処を奇襲した。

「うっむア!!--」

ドスツと鈍い音を立てグレインの大剣がオークの体に深々と突き刺さる。致命傷を負ったオークは口から血を吐き出し彼を呪うかのような咆哮を上げ、命を落とした。

彼はソイルの弓を引きことは出来なくてもこうして身の丈にも及ぶ剣を軽々と振り回し、態勢を整えて次々と襲い掛かってくるオークたちに一歩も引かずに立ち向かっていた。

本来、人間と魔物では基礎的な身体能力に大きな差がある。けれど、人間は知恵を絞り、武器と体を鍛え、魔法の力を駆使して彼らと対抗してきた。そしてグレインもまたその中の一人であった。

彼は武器の扱いのみならず、勇敢な男である。討ち倒した魔物は数知れず、その功績のため街やギルドから何度も表彰され、そしてバルヘリオン帝国で行われた大陸中の実力者の集う闘技大会に出場したという経歴を持つ程だ。

「次い！！」

彼はすぐさま別の一体に狙いを定め再び突撃した。オークもまた彼を迎え撃とうとするが、グレインは素早く懐に飛び込み渾身の力をこめた上段斬りに腕を持っていかれ、続けざまに大剣を振るった彼の前に痛みの声を上げる間も無くあっけなくやられた。

しかし、オークもただやられっぱなしというわけではなかった。彼らのうちの一体がグレインの不意を突こうと死角から近づいてくる。グレインは他のオークに気をとられ、まだ気づいていない。そして棍棒が彼の頭上めがけて振り下ろされる直前に彼は咄嗟に反応した。

「くっ！！！！」

思わず大剣で防御したものの、オークの叩きつけるような強い衝撃が腕を伝わり思わずグレインはよろけてしまった。その隙を見逃すまいとオークは再び棍棒を振り上げる。このまま頭に直撃すればさすがの彼とてやられてしまう。しかしその一瞬の間に、

「はぁア！！！」

セレシアのレイピアがオークの棍棒を持つ腕に穴を開けていた。

「出すぎだといったはずだ、グレイン。聞こえなかったのか」

目の前では突然の痛みに棍棒を落とし、腕から血を流しているオークが怒り心頭といった顔で彼女を威圧していたが、セレシアはそれをひとまず捨て置いて辺りに気を配りながらグレインを助け出した。

「いや、本当にすまん！聞いてなかった！」

痺れが治り、剣を持つ手に力が戻ってきた彼はセレシアの背中を守るように構えながら謝っていた。どうやら彼らを相手にするのに夢中で本当に気づいていなかったようだ。

「……まあいい。後でたつぷりと叱ってやる。覚悟するんだな」

「ああ、最後の最後でやつちまったぜ……」

目の前の魔物を無視するかのように軽口を言い合っている二人のその姿に、先程手傷を負ったオークは憤慨した。何せ止めを刺さずに今まで放置されており、しかも女が一人出てきただけで男の気迫は嘘のようになくなっていたからだ。

「…………あのオークやたらとセレシアの姉さんをうらんでいるみたいですが、大丈夫ですかい？」

横目で彼女を見る。こうなったのも自分のせいであるということを理解しているのだろう、気まづげに彼は尋ねていた。

「それよりもグレインは後ろを見ておくんた。今度はちゃんと聞いておけ」

「わ、わかった…………」

けれどそんな心配も全く無用のようで、彼女の有無を言わせない力強い言葉に彼は言う通りにした。

セレシアと今にも折れそうな細長いレイピアを構え、さっきのオークはもう片方の手で棍棒を持ち、互いを牽制していた。負傷したとはいえ、さすがはBクラス指定を受けている魔物だ、中々のタフさである。

あまり時間はかけられない、さっさと終わらせないといけないな…

そして彼女は素早くレイピアを引き抜き、オークはそのまま血の海に沈むこととなった。

「すげえ……」

グレインは惚れ惚れするような彼女の技に驚嘆していた。

セレスシアはグレインやソイルのように力があるわけでもないし、エーニスのように魔法を使えるわけでもない。けれど、彼女はBクラス、いや冒険者ギルドの中でも屈指の実力を持つ。それは恐るべき早さで繰り出される技の数々だ。

本来、レイピアは魔物の討伐においてあまり使用されない武器だ。使うのに高い技能が要求され、ロングソードやブロードソードのほうが遥かに扱いやすいからだ。

けれど、セレスシアが扱うことでそれは真の強さを発揮する。魔物が武器を振るった瞬間、先程のようにセレスシアは反撃に転じることが出来るのだ。

彼らの力は人間よりも強大だが、その一方で武器の扱いには長けていない。そのため振りも大雑把で、ただ相手を叩き潰すことしか考えていないのがほとんどである。

そういった魔物は大抵セレスシアの前に力尽きることになる。何せ彼女の技は魔物の優れた感覚を持っていても捕らえきれないほどに鋭く、そして魔物を容易に刺し貫いてしまうからだ。

これは最早才能の一言で片付けられる問題ではない、

彼女はいわば天才だった。

さすがは” の一人娘…俺達とは最初から出来が違うというわけか…

「……おい、グレイン！ここはもう片付いた、早く次の場所へ行くぞ。そこでエーニスと合流する手はずになっている。もたもたするわけにもいかない、急ぐぞ」

そんなセレスシアの姿にポーっとしてみると、彼女から声を掛けられた。

「あ、ああ。分かった。すぐに行く……」

こんな場所にいつまでも長居するわけにもいかない、残りのオークを片付けるため二人はすぐさま移動を開始する。

そして彼らの残した死体から血の臭いが森全体へ広がり、それを嗅ぎ付けてうごめく影があった……

接触

「グレイン、右の連中を相手にしろ！ エーニス、私がオークを引きつける、その間に魔法を打ち込め！」

「おうよー！」「はい！」

グレインの大剣が唸り、エーニスの魔法が次々と炸裂し、そしてセレスシアの華麗な剣技の前にオークたちは手も足も出なかった。

エーニスと合流した二人は破竹の勢いでオークたちをなぎ倒していく。先程はグレインが一人で突っ込んでしまったため一時は危なかったが、今ではその遅れを取り戻すかのように彼らを殲滅していた。一人ひとりでも十分強いのだが、セレスシアの的確な指示により彼らはそれ以上の実力を発揮していたのだ。

「！！」

すると、グレインと戦っていたオークの首が突如音を立てて近くの木に突き刺さった。いきなりすることにオークたちの混乱の度合いはさらに増し、恐慌状態に陥っていた。

これはもしかや…

「ソイルか！」

咄嗟にグレインは後ろを振り向く。何も返事が無かったものの、森の茂みの中から何かがあるのを感じ取れた。彼もセレスシアの指示通りに動き、一目散に駆けつけてきてくれたようだ。

ソイルは弓の名手だ。長距離からの狙撃は勿論、この距離からの味方への誤射は一度も無い。何よりも正面から勝てないと悟ったオークたちの不意打ちを防ぐという意味で彼の存在は非常に頼もしかった。

「よし、このまま一気に押し込むぞ！」

彼女は三人を鼓舞するかのような大声を出した。もう残り十体もない、彼らを倒せばこの依頼は達成することができる。そう思うとセレシアは胸がいっぱいになったが目の前のオークたちを倒すことに集中する。

「わかったぜ！」

グレインが三人を代表するかのように返事をする。気合の入った声だ、これなら大丈夫だろう。

そして四人の猛攻の前にクヴィクトの森にいるオークたちは駆逐された。

セレシアたちが彼らの住処を襲った僅か二十分の出来事であった……

「やれやれ、ようやく終わったぜ……お！ソイルじゃないか。さっ

きは助かったぜ、ありがとうな」

森の中から現れたソイルにグレインは礼を言う。

「相変わらず一人で突っ走っていたようですね。さては、セレスシアさんにまた迷惑をかけましたね？」

彼のもとへ進み出るソイル。その顔は怒っているというよりもまたやったのかという呆れが混じったものだ。

「まあ、結果オーライだからいいじゃないか……はは」

「グレインさん！もう、心配したんですからね！あんなことはもう二度としないでください！」

すると、ソイルに引き続きエーニスからも説教を食らった。結局、自業自得ではあるものの全員からお叱りを受けるグレインであった。

「悪い悪い！次からは……つてもう無いのか。……エーニス、名残惜しいがお前の気持ち確かに受け取った。その言葉を胸にこれから俺は頑張るぜ！だから……元気でな！」

「何をバカなことをやっているんだあいつは……まだ終わりじゃないぞ。ほら、さっさと回収するんだ」

セレスシアはグレインに袋を渡す。要はこの中に魔物の部位を入れるということだ。

「了解。けど、こればかりは何度やっても慣れないな……」

「そうですね。仕方ないとはいえやはり気が引けます……」

「二人とも、これが最後です。私も苦手ですが早く終わらせましょう」

そうして四人はグレインとソイル、セレシアとエーニスの二組に分かれ、倒した証となるオークの体の一部を回収していった。ギルドにきちんと報告をするため、こうした作業は必要不可欠だったが、それでも中々慣れない三人であった。しかも辺りはたくさん死体の山だ。これほどの数はかつて経験したことの無い量であったため、そこからの血の臭いが満ちて、彼らの鼻を曲げさせる。そのため、討伐した後だというのにどこか気分が晴れないでいた。

幾分かの時が流れ、四人は再び集まった。グレインとセレシアの袋にはいっぱい詰まっております、この場所にたくさんオークがいたことをうかがわせていた。

「どうでしたか？セレシアさんたちの方は。こちらは大体四十体ほど이었습니다」

「四十五体。似たようなものだな。しかし、これほどたくさんいたとは正直驚いたぞ」

「確かに。この数は少し異常ですね…一体何があったんでしょうか？」

エーニスは首をかしげる。モーロンが彼女達に説明した時点でこの数は少しおかしいものだと感じてはいたのだ。そして実際には八十体も生息していたことで彼女の疑念はさらに深まっていた。

「私も少し気になるところだが、今回の依頼はあくまでも討伐だ。いちいち詮索してもはじまらない。とりあえずここを出よう」

「そうだな。さすがにこのままいたら鼻がおかしくなっちまう。さつさと街に帰ろうぜ」

セレスシアの意見にグレインも賛同の意を示した。こんな血なまぐさい場所ではなくもっと別のところで考えればいい、彼はとにかくここを一刻も早く出たがっていた。

そして彼女達はオークの住処を後にする。結果として四人で八十体以上のオークを相手にしたのだ、これほどまでの数と戦ったことがあるのは恐らくセレスシアたちだけだろう。四人は疲れた表情をしていたが足取りは軽く、あの不快な場所を離れたのが功を奏したのか心は晴れやかであった。

「しっかしこれでこのパーティも解散か。何だかんだいって上手くいったよな、俺達」

大剣を背負いながらグレインは今までのことを振り返る。討伐に限らず、採取や調査など様々な依頼をこなしていたセレスシアたち四人はギルドの間でもかなり仲の良いパーティとして知られていた。Bクラス以上のパーティは基本的に魔法士がリーダーだ。けれど、それ以外のメンバーは魔法を使えないためリーダーとの間で軋轢が生じることが多々あった。

ギルドに所属する魔法士は自分の力を基準にしてしまい、どうしても彼らの力量をうまく測れないものが大勢いた。そんな彼らが仲間達に指示するのは魔物の群れを一人で相手にしろだのといった無茶なものばかりだった。そのため、そんなリーダーに飽き飽きする者達が続出していった。けれど、結果として依頼は成功すると、取り分は少ないものの結構な額をもらえるのでそこを中々抜け出せないというのが現在のBクラス以上のパーティの現状だった。

そんな中、セレシアはリーダーとしての責務をきちんと果たしていた。報酬は四等分、作戦を決める際も一人ひとりの意見を尊重し、自分の得意分野を生かせるよう最大限の配慮をしていた。何よりも、剣の実力だけでなく彼女の力量把握は天性のものがあつた。魔法士でもないのにエーニスのがどれほどの実力があるかすぐさま見抜き、彼女が集中して魔法を唱えられるようフォーローしたり、グレインのバックアップに回ったりと八面六臂の活躍をこなしていたのだ。

そして、一番の驚くべきところは解散するこの日までメンバーの誰一人死なせていないことだ。

実はセレシアのパーティが注目されていたのはこのことが大いに含まれる。魔法士ならいざ知らず、冒険者が死亡、または瀕死の重傷を負うというのはBクラス、Aクラス共に珍しいことではない。むしろ日常茶飯事だ。そのため、パーティを組んだとしても一年も経たないうちに解散に追い込まれるところも少なくない。一方でセレシアのところはパーティ発足以来、グレインが腕の骨を折るということがあつたもののそれ以外は目立った負傷は一切無かつた。

そもそも彼の骨折も魔物との戦闘によるものではなく、ソイルとの力比べで起きた本当にしょうもない理由だったが……

「そうですね。色々ありましたけど私はとても楽しかったです。グレインさんは確かこのままトレマルクに残るんですね？」

「ソイルもな。こいつ、貴族の地位をさりげなく掻っ攫いやがったからな……羨ましいやつめ」

「そう言っておきながらも、あなただって王国戦士長直属の部隊に配属されるみたいじゃないですか。名誉なことじゃないですか、前例が無いって聞きましたよ？」

「ん〜そう言われてもな……あまり実感がわかないんだよな」

隣の芝生は青いという言葉があるが、ソイルは実のところグレインのことを感心していた。

彼はその性格が災いしたのか交渉ごとはかなり苦手で、トラブルに巻き込まれるとソイルがいつも仲裁に入っていたのだ。正直、このパーティが解散した後彼がどうするのか正直心配ではあった。けれど、グレインはひよんなことで王国戦士長と知り合い、彼に気に入られたようだった。

トレマルク王国の戦士長ガナード・モーゲン。質実剛健を表したかのような壮年の男は、厳しいながらも部下からは慕われていることで有名だ。そのため彼の元なら大丈夫だろう、グレインの話聞いたとき率直に思ったのであった。

「でもグレインさん、早くそのことを意識しないと大変なことになりますよ？なにせ、冒険者ときのような勝手気ままな行動は許されないんですから。最後だから言いますが、気をつけたほうがいい

です」

「私からもだ。臨機応変に対応するのは大切だが、基本的に軍というものは上官の命令には従うものなんだ。今日のことを含めてちゃんと反省しておけよ」

「わかったわかった……あゝほら、俺のことよりもエーニスのこの後の話とか聞かせてくれよ。ライレンのこととか、たくさんあるだろ？」

「えゝ！グレインさん、話を逸らさないでください。まだまだ言いたいことがたっぷりあるんですからしっかり聞いてもらわないと！」

「そつだ。それに帰った後は説教だからな。逃げるなよ？グレイン」

「ああ……なんてこつた……」

女性陣二人から容赦の無い宣告を受け、へこたれる彼がそこにはいた。

だが、これでセレシアたちの最後の冒険がこれで終わるはずも無かった。彼女達はこの後パーティ結成以来、最悪の危機に直面するということを誰も知らなかった……

四人は森の中をひたすら進む。ある程度開拓されているとはいえ、やはり大自然の中に変わりは無い。同じような風景が続いていくうちにさすがの彼女達も先程の戦闘による疲労の色を隠せなくなっていた。

「……もうそろそろ休まないか？」

「駄目ですグレイン。まだ森を抜けていません」

ソイルはぴしゃりと言う。彼も少し疲れてきたようで、額には大量の汗をかいており、その言葉にもあまり余裕は感じられなかった。

「でもよ、さすがにこの辺りにはオーガはいないだろう」

「その油断が命取りだ。荷物が重たいのは分かる。もう少しの辛抱だ、頑張れ」

「私も持ちます。少し貸してください」

「セレシアの姉さんとエーニスに言われちゃあまずいな……悪かった」

ガシャリと音を立てて背負いなおし、再び彼女達は移動する。

グレインとソイルは彼女達よりも少し大目の荷物を持っていた。今回は中々の大仕事だった。いつもだったらとつくの昔に休んでいたのだが、今回はオーガの目撃情報があったため、なるべく早く森の外に出る必要があった。けれど、オークの住処からだいぶ離れたはずなのに、いまだこの森には血の臭いが満ちていた。そのため、セレシアは少し焦っていた。

（何故だ？私達も多少の返り血を浴びたのは分かる。それでもどんどん臭いが濃くなっているのはどうしてなんだ？）

とにかくこの森はどこかおかしい。気を取り直して不気味に静まりかえる森を彼女は突き進んだ。

だが、不幸にも彼女達は見つけてしまった。

百体を優に越すオークの死体を

「これは……何だ……」

セレシアはそう呟くのが精一杯だった。

目の前に広がるのはうず高く積まれたオークの死体の数々。その周囲の木々は竜巻にあったかのようになぎ倒され、死体はどれも絶望に満ちた表情のオークたちだった。しかし、表情を辛うじて読み取れたのはまだいい、それ以外の死体のほとんどが原型をとどめていなかったのだから。

「……………」

グレインもまた絶句した。自分達もオークを殺したばかりだということをしつかり忘れ、凄惨な光景を見せ付けられた一人だった。エ

「二スの場合は顔色を悪くしていたが辛うじて意識を保っていた。さすがに魔法士のことだけはある。こんなもの誰が見たところで通常は胃の中のを全部吐き出してしまっただけだ。酷いものだったからだ。」

「何があつたんですか、一体……」

以前ここを通つたときは何も無い森の風景だったのだ。それが短時間でこの有様。

(まさか……)

ソイルの脳裏を何かが掠めた瞬間、四人の間で一斉にゾクリと今までに無い強烈な寒気が走つた。

こちらに何かが近づいてくる！

彼女たちはすぐに臨戦態勢を取る。荷物を全員かなぐり捨てグレインは鉄で出来た丈夫な大剣を、ソイルは魔物殺しの大弓を、エーニスは古めかしい杖を、そしてセレシアはレイピアを構え、全神経を集中させた。

ザザザツツ！と茂みをかき分けその音が一瞬止んだとき、森の中から何かが飛び出してきた！

それは森に住む魔物の中でも上位に位置し、数々のAクラス冒険者を死に至らしめた

『オーガ』と呼ばれる存在がセレシアたち四人の前に姿を現したの

だ
っ
た
…
…

オーガとの戦い

オーガ。

体長三メートル、岩を削りだしたかのような大斧を携え、猛牛とオークの頭を混ぜ合わせたかのような醜い相貌である。四肢は丸太をくっつけたかのような溢れんばかりの筋肉で盛りあがっており、不気味に光る大きな二つの目でセレシアたち四人を見ていた。それは彼女達を敵としてではなく一方的に狩り尽くす対象としての捕食者の目つきだった。

獐猛な性格をする彼らはAクラス指定されている魔物の中でも冒険者達の間からさらに警戒されている。オーガは立ちふさがる全てのものを喰らい尽くす凶悪な存在だからだ。

ある日、オーガ討伐に出かけたAクラスの五人の冒険者達が依頼に失敗して帰還したことがあった。五人中一人だけが命からがら逃げ出したようで、生き残った冒険者は右腕が何かに食いちぎられたかのような痕が残っていおり、見るも無残な姿に成り果てていた。ギルドは急いで男を治療し、そのときの状況を詳しく聞こうとした。けれど、その冒険者は中々口を開こうとしない。男の表情はなにもかも諦めたかのようなものだったが、度重なる説得によりぽつりぽつりと語り始め、彼の口から語られた内容にギルドは驚きをあらわにした。

たった一体のオーガに魔法士を含めた四人の冒険者が目の前で食べられていったのだ。

今まで、彼らが肉食だということは確認されていたが、まさか人間

までも捕食するようになるとは……

冒険者の死亡報告は彼らの悲しい日課でもであったが、遺族にこのことをそのまま伝えるのはさらに躊躇した。結果として死ぬということには変わりなかったが、それでも食べられるという事実は彼らの心に重くのしかかった。

このようなことが明らかになったことでギルドはすかさず大陸の全支部に連絡した。Aクラス未満の者が遭遇した場合は直ちにその依頼を中止しても撤退をすること、またAクラスの冒険者達であってもオーガとの戦闘をする場合はくれぐれも万全を期するようとの異例の通達だった。

その日以降、Aクラスの冒険者では彼らのことを人食い（マン・イーター）という恐怖の代名詞として認識されていたのである。

（……まずいな、よりもよってこのときか……）

彼女は悔しげに目の前の怪物を眺めていた。

怖気づいたわけではない。昇格試験を受ける際、オーガが出ることを最初から想定はしていた。だが、最悪のタイミングである。あとほんの少してクヴィクトの森を出られるところだったのだ、その直前に現れるとは何ということだろう。

（だが、私達なら勝てない相手ではないはずだ…今までだってこうしたピンチは何度も潜り抜けてきたんだ、ここでやられるわけにはいかない！！）

彼女は気持ちを奮い立たせて仲間達に指示を下す。

そして、オーガとセラシアたちとの戦いが今ここに幕を開けた……

「ソイルッ！！やれッ！！」

彼女の声を聞いた瞬間、ソイルはすぐさま魔物殺しの大弓をオーガにむける。この距離ならば確実に当たる、彼は弓をギリギリと引き絞り、必殺の一撃を放った。

乾いた音が響き、オーガを射殺さんと矢が飛んでいく。その速さは最早肉眼では識別不可能な程で、たとえオーガだろうと見切ることが出来まい。ソイルはそう思った。

しかし無情にも彼はその期待を裏切られることになる。

「なッ！！」

四人の目の前で信じられないことが起こった。オーガがいきなり大斧を目の前に構えたと思ったらソイルの放った矢をガードしたのだ。彼はまず頭よりも確実に当てられると踏んだ肩を狙った。しかし、オーガはあの一瞬でソイルの弓の軌道を読み、すかさず大斧で弾き返すという芸当を見せたのだ。

そして、彼女達が一瞬ひるんだところにオーガは手に持つ大斧を構え強靱な二本の足で突撃を開始する。

「ッ離れる!!」

その声に、四人は弾けたかのように一斉に散開した。

グレイン、エーニス、ソイルたちがその場を離れた瞬間、彼女達の前元いた場所はベキベキと何かが折れるような音が聞こえてきた。オーガが周りの木々を大斧でなぎ払ったのだ。

「やばいぜ……こりゃあ……」

グレインは茂みの中に素早く隠れ、間一髪のところまで難を逃れていた。そしてもうもうと土煙や木の破片が立ち込める中その一部始終を見ていた。倒された木の一本一本はそれなりの太さだ。それを一気に破壊するとはなんて馬鹿力だ。あと少し遅かったら彼の体もあの木々のようにはらばらになっただろう。そのことを思い出したのか、体中から冷や汗が流れだしていた。

「それよりもあいつらは……っっておいつ!! エーニス!!」

「え……あつ……」

グレインははつとエーニスの姿を見ると、彼女は尻餅をついて動けなくなっていた。彼女は目の前でおきたあまりの出来事にぼつとしてしまったのかオーガの方にまで気が向いていない。

そしてオーガはそんな彼女を狙い定めるかのようにじろりと見ていた。

(クソツ!! 間に合え!!)

彼は一目散に走り出す。一刻も早く助けなければエーニスは死んでしまう。オーガに斬りかかるという思考よりも先にグレインは彼女の命を優先させたのだ。

オーガはエーニスに向かって大斧を振りかぶる。その動きは先程とは違いゆっくりとしたものだったが、それでも彼女は動かない。いや、恐怖で動けなかった。

再び森は凄まじい音が響き渡り、辺りは土煙が舞う。

「グレイン！エーニス！無事かッ！」

セレシアは危険を承知で叫んだ。オーガという怪物を前にして自分の居場所を知らせるといふ彼女にあるまじき行動だったが、それでもこの日まで苦楽を共にしてきた仲間だ、二人を見捨てることなどセレシアに出来るはずも無かった。

視界が開けると、彼がすんでのところでエーニスを助け出したようだ。守るかのようにグレインは彼女を抱きしめ、すぐさま茂みの中に隠れるのを確認した。エーニスのいた場所はすっかり誰もいなくなっていたが、オーガの繰り出した大斧の衝撃で彼女の後ろに立っていた木は粉々になっていた。あんなのをまともに受けたらひとたまりも無い、彼女達が無事で本当に良かった。

（グレイン、流石だ。帰ったら説教ではなく褒めてやらないとな…）

「ソイルッ！」

体勢を立て直すため、森のどこかにいる彼に援護をするよう指示し

た。

彼の弓が放たれると同時に彼女は森の中を駆け抜ける。ソイルが注意を引いている間にセレシアはオーガに見つからないよう慎重に行動した。とにかく、あれは正面から一人で戦ってどうにかなる相手ではない。足止めするならまだしも、倒すのなら四人の力が絶対に必要だ。特にエーニスの魔法を使わなければ勝ち目は無い。セレシアはそう悟り、すぐさま二人と合流することを決意するのだった。

「あつぶね……エーニス、怪我は無いか？」

「ッは、はい！私は大丈夫です！おかげで助かりました。それよりもグレインさん、その傷……」

「ん？ああ、これか？全然大したことはないぜ」

グレインは腕に怪我を負っていた。どうやらエーニスを庇った際、飛び散った木の破片で腕を切ったようだ。けれど、彼はそんなことは気にしていないとばかりに彼女に応える。

「……本当にごめんなさい……私がしっかりしていなかったからこんなことに……」

「俺は普段エーニスたちに迷惑をかけてばかりだからな。これくらい出来なきゃ三人に申し訳が立たないし、気にすんな！」

「グレインさん……」

「エーニスはそのようなことはない」と声を大にして言いたかった。あんな強大な魔物を前にしてすぐさま行動に移せる冒険者はそういない。彼女が以前入っていたパーティなら最初のオーガの突撃でやられていただろう。彼女にはグレインに對しいかに凄いことをしたのか説明しなかったが、オーガが近くににいる以上そんなことは出来ずじまいであった。

「エーニス、グレイン！ここにいたか！」

すると、セレスシアが二人を見つけて近寄ってくる。息が荒い、それほどまでに急いできたのだろう。それほどまでに事態は急を要するみたいだ。

「今ソイルがオーガをひきつけてくれている。私達はすぐに彼を見つけて合流し、奴を倒すぞ」

「倒すってどうやってだ？あんな攻撃、俺じゃ防ぎきれないぞ」

「防ぐんじゃない、避ける。または受け流せ」

「ちよっ！！相変わらず無茶なことを……」

「できないと死ぬだけだ、グレイン。さっきのを見ていたぞ。咄嗟にあれだけのことが出来たんだ、お前なら大丈夫。それにちゃんと私がフォローに回る、だから安心しろ」

「お、おう。わかったぜ……」

いきなり彼女から褒められたため、思わずそう返事をしてしまったグレインであった。

「私とグレインの二人は魔法の発動までの時間稼ぎだ。エーニス、やれるな？」

「はい！三十秒……いえ、二十秒ください！それまでに何とかしてみせます！」

「グレイン、エーニスの言ってくれたように、ソイルと合流したら二十秒だけオーガを二人でひきつける。決して近づけさせなよ」

そうして三人は移動を開始する。オーガという魔物を前に決して怖気づくことなく立ち向かう彼女達の姿は間違いなく冒険者を体現するものだった。

「くッ!!」

ソイルはセレシアの指示を忠実に守っていた。元々単独行動が多い彼は次々と弓を射る場所を変え、しつこくオーガを射殺さんとならっていた。だが、オーガはその図体とは裏腹に時折予想外の動きをする。彼の放つ矢を常に大斧でガードし、拳銃の果てには片方の手でそれを掴み取ることがあったのだ。そして、ソイルのいる場所に岩や木を投げつけて反撃してくるため、彼はその突飛な行動に苦しめられていた。

（オーガ……噂以上の魔物ですね……しかもこのままでは……）

ソイルは今回のオーク討伐で大量の矢を持ち込んでいた。だが、それもオーガにことごとく防がれていったため、残り十本も無かった。

それ以外にも彼は短剣と投げナイフを持ち込んでいたが、あの速度の矢を掴み取るということはこれらの武器も全くの無意味だろう。彼の焦りの表情が色を濃くしていくのだった。

だが、そんな彼の前についてに逆転の兆しが見えた。

そう、セレシア、グレイン、エーニスの三人がオーガと対峙するのを目にしたのだ。

(何とか合流できたようですね。私も行かなければ……)

ソイルはすぐさま三人の茂みの近くへ駆けつける。恐らくエーニスの魔法を発動させるための時間稼ぎをするつもりなのだろう。彼女の意図を理解した彼は走りながら残り僅かの矢に手をかけた。

その頃、二人はオーガの猛攻を辛うじて凌いでいた。エーニスは魔法に集中しているのか全く微動だにしない。任された時間は二十秒。だが、大斧の繰り出す衝撃で彼らの足元は揺れ、思うように立ち回ることが出来ない。

「うお!!」

頭上を大斧が通過していき、グレインは思わず身をかがめた。一瞬でも気を緩めればあの世行きなため、彼はとにかく避けることに専念していた。

「ッ!!」

一方セレシアはレイピアを翻し、オーガへ攻撃を仕掛ける。彼女はグレインと違い、徐々にだがオーガに切り傷を与えていった。その

思わぬ反撃に苛立つオーガ、一気にけりをつけようと彼女に向かって大斧を振り上げた。

しかし、彼女達に意識を向けたのが間違いだった。

次の瞬間、

「オオオアアアア!!!」

オーガの苦悶の声が二人の耳に聞こえてくる。ソイルの魔物殺しの大弓から放たれた矢が命中したのだ。当たったところは武器を持つ腕ではなかったが、それでも深々と突き刺さり、そこから大量の血液が噴き出している。

「グレイン！」

「よっしゃあ!!」

ここぞといわんばかりに彼の大剣が唸りを上げ、負傷したオーガの腕を一刀両断する。

「!!!!!!」

更なる反撃に手痛いダメージを受けるオーガ。今まで数々の冒険者を貪り食ってきた怪物がついに一步後退した。信じられないという表情で彼女たちを見るオーガ。その目は強者である自分が負けるという事実を認識できないようだ。

そしてついにそのときを迎える。

「時間だ！！離れる！！」

ここにおいては危険だ、セレシアとグレインはすぐさまオーガから離れる。

「いきます！！」

杖の先から魔力が迸り、エーニスの魔法が発動する。

『エア・ハンマー』

エーニスが行使用することの出来る魔法の中で最大の威力を誇るものであり、圧縮された空気が片腕となったオーガを叩き潰す。その破壊力には確かなものがあり、三メートルもある魔物の巨体が一瞬のうち地に伏せ、その後はもうもうと土煙が舞い上がり、周りの地面も大きく窪んだことからそれは明らかだ。

そして、セレシアたち四人はついにオーガを討ち果たした。

「……………」

人食い（マン・イーター）の異名を持つ強大な魔物が沈んだ瞬間、四人の誰もが声を発することが出来なかった。全員肩で息をし、ソイルもいつの間にかそばにいたが、そのことに気を配ることが出来ないほど彼女達は疲弊していたのだ。

「…………いよつしゃあああああ！！！！！！」

しかし、そんな疲労を気にしないかのようにグレインは歓喜の叫び声を上げた。

オークを八十体以上を倒した後、オーガを討ち取ったのだ。しかも全員生還して。こんなこと、どの冒険者パーティも成し遂げていない快挙であることは間違いなかった。

グレインはその前代未聞の出来事で感動に打ち震えていた。

「…………ツ！！」

エーニスの場合、自分がオーガに止めをさしたという事実感激していた。

魔法皇国ライレンではレスレック魔法学院の入学試験に落ちてしまったという苦い経験がある。

セレスシアたちと出会う前は、冒険者達に忌み嫌われることもあったけれど、そのつらい過去を全て払拭するようなのが彼女の手で為され、思わず涙ぐんでいた。

「はあ……流石に疲れましたよ……」

ソイルはどっかりとその場に座り込んだ。普段は落ち着いた雰囲気を持つ彼だったが、これほどの大仕事を終えた後ではさすがのソイルも限界だったようだ。

「お疲れみたいだな、ソイル。だが仕方ないか」

そこへセレシアも歩み寄る。彼女の足取りもやや疲れたものがあつたが、それでも三人に比べれば力強いものを感じ取れた。

「ええ、まあ……私はあの二人みたいに喜べません。この一日で何度寿命が縮む思いをしたことが……」

「グレインと合流する際は一人で任せてすまなかつたな。でも、最後の一撃は助かった。ありがとう」

「あれはセレシアさんのおかげです。貴方がオーガの注意を逸らしていなければ当たりませんでした。それよりも、あの距離でオーガと互角に渡り合うセレシアさんの方が凄いですよ……」

ソイルの見た中でも一番に挙げられるくらい先程の戦いは印象深かった。グレインを手助けしつつ、オーガの豪腕から繰り出される攻撃を紙一重で避け、受け流す彼女の姿は『戦女神』の二つ名にふさわしいものだった。

「……そうか！ならリーダーとしての面目を保てたということだな。こう見えても私だけあまり活躍が無いように感じていたんだ……う

ん、それなら良かった」

(……………本当に貴方という人は……………)

この人には一生敵わない、ソイルはそう思った。

「しっかしよ、オーガの部位は証拠として集めるとして、こいつらはどうする？これも俺達の手柄にするか？」

四人の目の前にあるのはうず高く積みれたオークの死体。ギルドでは一体ごとに金額を設定されており、それに応じて金が支払われる。そのため、冒険者にとってはこのオークの死体は金のなる木も同然だった。

「好きにしる。だがもうすぐ日が暮れる。なるべく早く済ませるんだぞ」

「わかったぜ、セレシアの姉さん！」

そう言ってグレインは比較的損傷の少ないオークの死体から部位をかき集めていく。先程は集めるのは苦手だといっておきながらこの変わりよう。彼もまた冒険者としてしたたかだった。

「しかし、これだけの量をオーガがやったとなると……………少しぞつとしますね……………」

「確かに。この森では予想以上にオークがたくさんいた。しかも過去に類を見ないほど。一体どうしたことなんだ……？」

夕陽がクヴィクトの森を不気味に照らし出す。それはまるでセレスアたちを黄泉路に引きずり込むかのように。

そんな赤く光る夕陽を眺めているうちに、セレスアの脳裏に衝撃的な事実がひらめいてしまった。

それが彼女達の死のカウントダウンが始まる合図でもあった。

(まずいッッッ！……！……！……！)

「三人とも……！！！！今すぐここから離れるぞ……！！！！」

セレスアはかつて無い大声で叫んだ。

「どうしたんですかい？セレスアの姉さん？そんなに慌てて」

「……何かあったんですか？」

「そうですね。どうしたんですか？」

セレスアの取り乱しように一同は騒然とした。こんな彼女の姿を今まで誰も見たことがなかったからだ。

「説明する時間が惜しいッ……いくぞッ……！！」

「お、おい！」

彼女がすぐさま駆け出したのを見て、三人は荷物を背負って慌てて走り出した。

そしてオークの死体たちは無駄な足掻きだといわんばかりに死んだ目で彼女達を見届けていた。

「どうしたんですか！？セレシアさん！！」

走りながらソイルは彼女に尋ねる。彼女の美しい横顔は悔しげに顔を歪ませていた。

「いいか！今回のオークの異常な数には理由がある！そもそもありえないだ、オークたちがあんな集団でいること自体が！」

オークは基本的に十体でひとまとまりだ、今回の依頼ではセレシアたちが確認しただけでも二十倍近い数がこの森にいたということになる。通常、こんなことはありえない。

ありえるとするれば、彼らが何かに脅かされてさらに大きな集団で行動せざるを得ないときだ。

「つまりだ！、彼らはオーガから逃げてきたんだ！その一部のオーガたちがさっきの場所を襲い、それが私達の依頼に回ってきたんだ！」

「さっきの奴ですかい？」

「違うんだグレイン！私達は今までオーガが単独で生活をする魔物だと勘違いしていたんだ！」

「それって……まさか!？」

エーニスがセレシアと同じ考えに至ったとき、森の中からがさがさとは何かか蠢く音が聞こえてきた。

そして、ぬらりと地獄の淵から蘇るように彼らは現れた。

猛牛とオークの頭を混ぜ合わせたかのような醜い顔。四肢は丸太をくつつけたかのような溢れんばかりの筋肉で盛りあがっており、不気味に光る大きな二つの目で彼女達を敵としてではなく一方的に狩り尽くす対象として見ていた。

そうして、オーガの集団が四人の前に現れる。

彼女の生死を分けた戦いがいまここにはじまった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5627w/>

黄金の時代

2011年10月15日00時15分発行